

民俗的古式技法の存在とその意味

特に編組技法について

The Existence of Ancient Folkloric Techniques and Their Significance

名久井文明

はじめに

① 縄紋時代の編組技法

② 民俗例における編組技法

③ 民俗的古式技法の存在とその意味

おわりに

【論文要旨】

縄紋時代人が繊維状の植物性素材で入れ物その他を製作した技法には「組む」「編む」の2種類があった。しかし一般に「組む」「編む」という用語で現される技法の内容は混乱している。そこで筆者は「組む」「編む」の用語は厳密な技法の違いを反映すべきであるとの考えから、まず両者の差異についての見解を明確にした。縄紋時代の遺物から観察できる「組む」技法には「四つ目組み」「石畳組み」「ごご目（ぎる目）組み」「飛びごご目組み」「木目ごご目組み」「六つ目組み」「網代組み」などの種類があること、「編む」技法には「縄目編み」「ねこ編み」があることを明らかにし、それぞれの技法で製作された遺物を例示した。また編組技法で入れ物を作る場合、必ず先に底部を作ってから側壁の形成に移行し、その後には口縁部を形成していることを指摘した。底部を形成する技法には「網代底」「菊底」「縄目編み底」等の種類があり、口縁部を形成する技法には「縦芯材折り込み縁」「縄目返し縁」「巻き縁」「返し巻き縁」があることを明らかにし、それぞれに該当する遺物を例示した。

以上の植物性素材を用いた縄紋時代の造形上の諸技法は、ほとんどそのままのかたちで近現代民俗例にも存在していることを述べ、それぞれの技法で製作された民俗例を示した。これらの要素が縄紋時代と民俗例とでよく共通しているのは偶然ではなく、諸技法が幾百世代にもわたって受け継がれてきたからである。その背景としては、縄紋時代から現代まで、それぞれの時代の人々は食料をはじめとする各種の自然物を採集し、運搬し、収納、保存するためにはそのための入れ物その他の用具が必要であったこと、その製作素材として自然素材を使い続けたことにあるとした。

はじめに

縄紋時代人は各種の植物性素材を用いてさまざまな製品を作った。大は巨木を用いた構築物から小は微細な糸まで、素材の物理的特性を生かした種々の製品は彼らの生活になくてはならないものとしてそれぞれ役割を担っていたに相違ない。私はこれまで植物性素材を用いた各種の組織方法について検討を加え、糸縄類の製作技法や結合の方法、あるいは平面を形成するために駆使された「編む」「組む」「巻く」といった各種技法について、縄紋時代例と近現代民俗例との間に共通性がある事実を指摘したことがある[名久井 1998]。さらに縄紋時代と共通する要素はそのような植物性素材を用いた諸技法ばかりではなく、クルミの殻の割り方やナラの実の「あく」を抜いて食用に供すること、ナラやクリの実の果皮を除くためにこれらを乾燥させてから打ち割って殻を除く手法などにも認められることも指摘した。そのうえでそうした彼我の共通性を根拠として、民俗例にみられる諸技法の中には縄紋時代から受け継がれているものがあることを主張したのである[名久井 1999]。その後そのような連続性を遡るようにして民俗例から縄紋時代の文化を推察することを試み、動物性、植物性食料の獲得や保存、乾燥させておいた薪の利用、雪を利用する重量物の運搬、適材の選別、生活用具の製作等の文化要素について指摘した[名久井文明・名久井芳枝 2001]。そのような試みも民俗例の中に縄紋時代以来の種々の文化が受け継がれているという考えに基づくものだった。

その後、植物性素材を用いる編組の技法について縄紋時代の遺物と現代竹工芸や籐工芸、あるいは樹皮等を用いる伝統的民俗例との対比をさらに推し進めたところ、縄紋時代の諸遺物から窺われる諸種の技法のかなりの種類が近現代民俗例と対比できる見通しになったので、この機会に現在考えられるところをまとめておくことにした。

民俗例には籐や竹材のほかイタヤカエデ材等の木材や樹皮を用いて入れ物を製作する分野がある。入れ物の側壁、その他の平面を形成するために駆使される竹工芸の技法には、「四つ目」「市松」「ござ目」「とびござ目」「六つ目」「網代」などの各種の素材組織方法がある[大分県別府産業工芸試験所 1991]。しかしこのような各種の技法は何も竹工芸に限って行われたのではなく、竹以外の素材を用いる伝統的民俗例にもしばしば駆使されている。そういった各種の民俗例と共通する素材組織方法は実は縄紋時代にも存在していた。

民俗例で入れ物を製作する場合、まず底面を作り、底面形成のために使われた素材をそのまま利用して側壁を形成し最後に口縁部を始末して完結する。そのような手順で製作した証拠は縄紋時代の遺物にも見いだされる。口縁部を処理する場合、竹工芸には「縄目編み留め」「縄目返し縁」「巻き編み」「返し巻き」その他各種の技法があるが、それらの一部とよく共通する組織方法は縄紋時代にも存在したのであった。

このように、縄紋時代が弥生時代へと移り変わってから優に2000年以上も経っている現代の民俗例の中に、縄紋時代の編組技法ときわめてよく共通するものが存在していることは疑いようのない事実である。そのような共通性はどのような背景のもとに成立したのであろうか。

なおはじめにお断りしておくが、以下では専ら編組技法を扱うものであって、それを生み出した文化についてはふれていない。また敬称は省略させていただいた。実測図に伴う数値の単位はmmで

ある。

①……………縄紋時代の編組技法

(1)平面形成の技法

縄紋時代人が細長い繊維状もしくはテープ状の植物性素材を組織して平面を形成する技法をもっていたことは多くの遺物が示すところである。そんな遺物に用いられた素材は、元はといえば無秩序な単なる細長い素材に過ぎなかった。それが一定の方法に基づいて編成組織されたことによって初めて平面的あるいは立体的工作物の表面を形成し得ることになったのである。そのようにして平面を形成する技法は「編む」「組む」の二種に大別され、それぞれに属すさまざまな技法が、時には単独で時には組み合わされることによって多様な形態の製品が作られたのであった。

1 「組む」と「編む」——用語の使い分けについて——

縄をなうといい、紐を組むという。俵を編むといい、布を織るという。製作する際の動作の違いに応じてそれを表す呼称が異なっているから、呼称を聞いてその具体的な動作を連想できることは便利である。先学によって生み出され定着してきた、押型紋、貝殻圧痕紋、絡条体圧痕紋、竹管紋、磨り消し縄紋等の呼称が施紋具や施紋の様子を相当具体的に連想させていることが想起される。

いま技法を表す呼称について提起したいのは、植物性遺物から窺われる編組技法を表現する際に用いられている「編む」という呼称についてである。現代竹工芸の分野ではテープ状に整えた素材を用いて箆や籠を作る技法に対して「編む」という表現を用いている。網代編み、ござ目(ざる目)編み、六つ目編み等の名称である。一方、発掘現場からそのような竹工芸の平面形成技法と共通する技法で製作されたと推察される遺物が発見されると、報告書等でその技法を紹介するに際して竹工芸から呼称を借りることがある。問題はその呼称で、次のように全く異種の技法であるにも関わらず等しく「編み」の名が付される場合がある。

例えば漆を絞った布が発見されるとそれは編み布と呼ばれる。一方竹工芸の平面形成技法から借りた呼称にも「編み」の名が付けられる。漆を絞った布と竹工芸の平面形成方法では後述するように素材の組織方法が根本的に相違している。それにも関わらず等しく「編み」の名が付されるのはいかにも無原則である。このことについては自ら省みるころもあるが、有機質素材の組織方法を論じる研究、論述の場合には組織方法の違いに応じた個別の呼称を与えるのが望ましい。「編む」という呼称の用法について整理を期待したいゆえんである。

私がかつて「編む」と「組む」という呼称を使い分けたのは上記のような考えからであった[名久井 1998]。使い分けの必要を感じているのは今も変わらないから、この両者の違いについてここでも明確にしておきたいと思う。

「編む」と「組む」という組織方法には実測図の断面図に明瞭に現されるほど画然とした違いがある。両者の相違点を現物によって知るためにそれぞれの技法で製作された小破片を例示してみよう。

両者の技法を理解するためにはそれぞれの平面を形成している構成材に着目し、素材どうしの関係性を見極めることが肝要である。例えば福島県の荒屋敷遺跡出土の一例(図1-(1))は、縦方向と

横方向の構成材が関わり合って形成されている。その縦横の素材が接触している部分を見ると、互いの表裏が重なり合っているだけである。縦横に向かうそれぞれの素材どうしの重なる位置に注目すると、ある横芯材が縦芯材の表面を通るとき、その直下の横芯材は同じ縦芯材の裏面を通っている。したがってもしもこの製品の実測図を描くならば、その断面には、模式図に示したごとく縦芯材を挟んで左右に横芯材の断面がそれぞれ段を違えて現れるのである。このような類が「組む」技法で製作された例である。

一方、富山県の桜町遺跡から出土した一例(図1-(2))も、やはり縦方向と横方向の構成材とが関わり合うことで平面が形成されている。縦横の素材が接触している部分に注目すると、横に向かう素材が縦芯材を表裏から取り込んでいる。その取り込み方は、必ず複数本用意された横芯材(編み芯)が個々の縦芯材を表裏から挟み、そのつど捻りを加えることによって縦芯材を確保し、次の縦芯材を挟んでまた捻るということを繰り返しているかのように見える。したがってもしもこの製品の実測図を描くならば、その断面には、模式図のごとく縦芯材の左右に横芯材の断面が水平に並ぶわけである。この点が先に述べた「組む」技法と決定的に相違しているわけで、このような類を「編む」類として認識したい。ただし網の類を編む技術と一線を画すため、この手法の呼称については竹工芸や籐工芸の分野での呼称を借用して「縄目編み」と呼んでおきたい。この技法が「もじり編み」[渡辺 1985]と称されることは承知しているが、「もじり編み」はいま述べた「縄目編み」の技法に加えて全く別種の編み方をも包括する呼称であることについては後でふれるつもりである。

以上に述べたように技法上の画然とした相違を根拠として、それぞれに「組む」「編む」という異なった呼称を使い分けることにしたのである。そのような使い分けをしながら縄紋時代の編組技法について論述を進めようとするとき、一部の発掘調査報告書のように現代竹工芸等で一般的な呼称となっている「四つ目編み」「ござ目編み」「網代編み」等の呼称をそのままのかたちでは使用しないことに理解を求めなければならない。というのは竹工芸でいう「四つ目編み」等々は本稿でいう「組み」に属す技法だからである。したがって、以下では竹工芸でいう呼称の「編み」の部分だけを

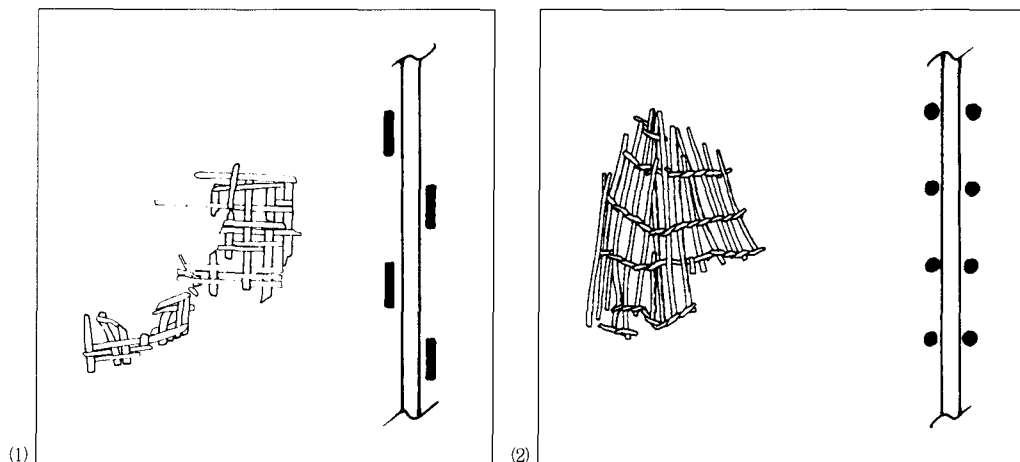


図1 「組む」と「編む」

- (1)素材を組んだ例(荒屋敷遺跡出土)[三島町教育委員会 1990 p.769]と組まれた組織の断面模式図
(2)素材を編んだ例(桜町遺跡出土)[桜町遺跡発掘調査団 2001 図18]と編まれた組織の断面模式図

「組み」と置き換えて使うことにしたい。例えば「網代編み」と言わずに「網代組み」といい、「ござ目（ざる目）編み」と呼ばずに「ござ目（ざる目）組み」と呼ぶことにしたい。あえてこのように言い換えるのは、あくまでも有機質素材の組織方法を扱う学術上の論述を進めるにあたって、技法識別、説明の必要性から呼び分けようとしてのことに過ぎず、竹工芸等の業界用語に対して意見を唱えるつもりは毛頭ないことをお断わりしておく。

2 「組む」技法で製作された縄紋時代例

縄紋時代の植物性遺物の構造を分析的に観察すると「組む」手法にはさまざまな種類がある。それら各種の技法を識別するためにはそれぞれの技法ごとに固有の名称が必要である。そこで現代竹工芸の分野で用いられている各技法の名を借りるわけだが、前項で明らかにしたように呼称の一部を改変し、「編む」「組む」の技法上の相違に即した表現を行いたい。以下では「四つ目」「石畳（市松）」「ござ目」「飛びござ目」「六つ目」「網代」などの各種の組み方による縄紋時代例を取り上げる。

ア 「四つ目」組み

縦横に組み合わされる素材が規則的、交互に浮沈するもので、もしも素材どうしの間隔を空けて組むと格子目のような外観となる。熊本県の曾畑貝塚から検出された破片は緩くあるいはやや緩く組んだ例である（図2-1(2)）。

イ 「石畳（市松）」組み

四つ目組みのように縦横に向かう素材として同程度の幅のものを整え、目を詰めた状態で組んだもので、その外観はわが国の伝統的な意匠である石畳（市松、一松）模様に通じる。埼玉県の後谷遺跡の一地区から樹皮と思われる植物性素材で製作された小さな環状の製品が発掘されており、その表面が精緻に整えられた薄い素材で縦横から整然と目が詰んだ状態で組まれているのは好例である（写真1）。

ウ 「ござ目（ざる目）」組み

大分県の縄紋時代早期に属す横尾遺跡から黒曜石を入れた籠の破片と思われるものが発見された。現在のところわが国最古の編組品であるその組織方法は調査概報によれば、「1本越え、1本潜り、1本送りの網代編み」であるという[大分市教育委員会 2001]。写真を見ると「ござ目（ざる目）」組みと呼んだ方が理解が容易である。

福井県の鳥浜貝塚例（写真2・3）、あるいは石川県の真脇遺跡出土の土器底部に残された圧痕が示す例（拓影1）は「ござ目（ざる目）」組みの例である。これらは縦に並ぶ軸芯を真横から別素材が組み込む類で、任意の横芯材に着目すると縦芯材の1本を飛んで1本をすくうということを繰り返している。縦芯材の上を飛び越えるとき、その上下の横芯材は同じ縦芯材の下を潜っているという規則性を維持する。富山県の桜町遺跡からござ状の組織体の断片が発見されている（写真4）。荒屋敷遺跡出土土器の底部にこの種の組み方で組織された製品の圧痕が付されたものがある（写真5）。

エ 「ござ目（ざる目）」組みによる円形平面の製作

遺物や土器底部に残された各種の編組品の圧痕などから、「ござ目（ざる目）」組みの技法は入れ物の側壁や矩形を呈する平面的製品の形成に駆使されることが多かったことが知られる。しかし時には円形の平面を形成する場合にもこの技法が用いられたらしい。金沢市中屋遺跡から発見された

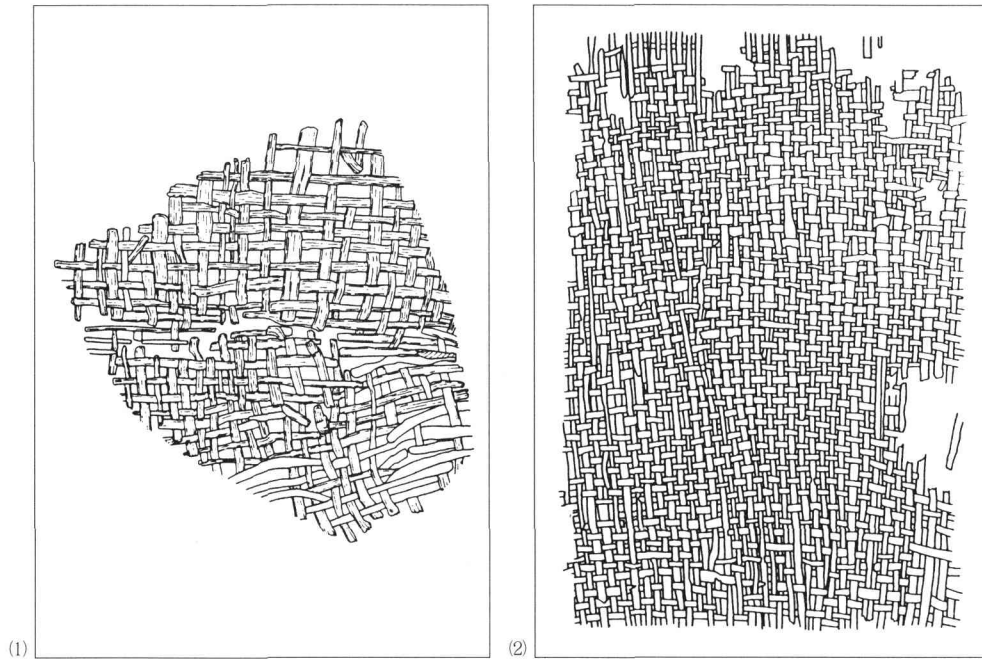


図2 四つ目組み

- (1)緩く組んだ四つ目組み製品の破片（曾畑貝塚出土，縄紋時代前期）〔熊本県教育委員会 1988 p.323〕
 (2)やや緩く組んだ四つ目組み製品の破片（曾畑貝塚出土，縄紋時代前期）〔熊本県教育委員会 1988 p.319〕

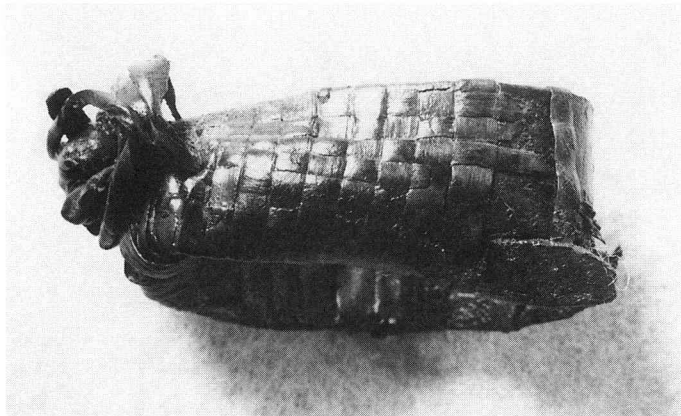


写真1 石畳（市松）組みの製品破片（後谷遺跡出土，縄紋時代後期以降，写真提供桶川市歴史民俗資料館）〔桶川市 1990 p.82〕

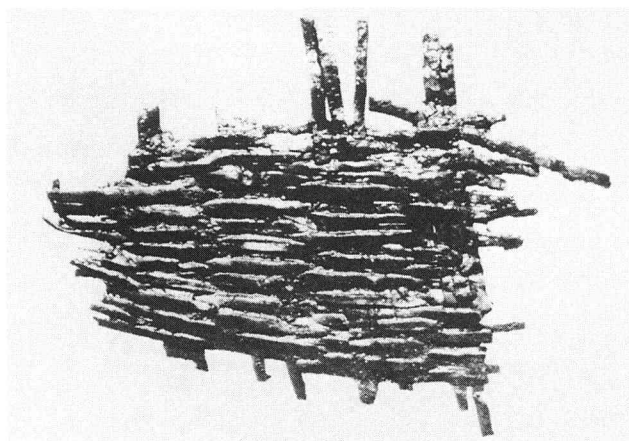


写真2 ござ目（ざる目）組み（鳥浜貝塚出土，縄紋時代前期）
 〔鳥浜貝塚研究グループ 1984「研究の成果」p.2〕

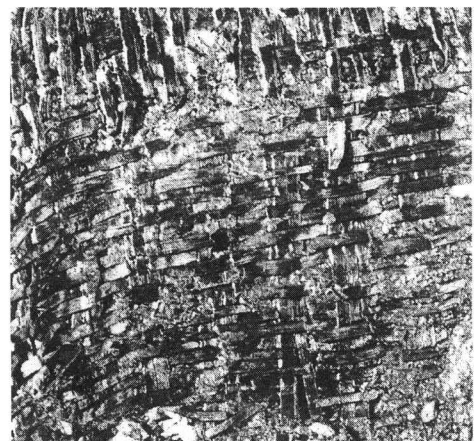
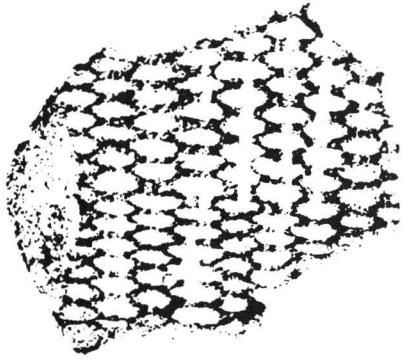


写真3 ござ目（ざる目）組みの製品破片（鳥浜貝塚出土，縄紋時代前期）〔鳥浜貝塚研究グループ 1987 p.143〕



拓影1 ござ目（ざる目）組み製品の
圧痕ある土器底部（真脇遺跡出土、縄
紋時代中期）[能都町教育委員会ほか
1986（本編）p.249]



写真4 ござ目（ざる目）組みの製品破
片（桜町遺跡出土、縄紋時代中期、提供
富山新聞社）[富山県小矢部市ほか 1999
p.72]

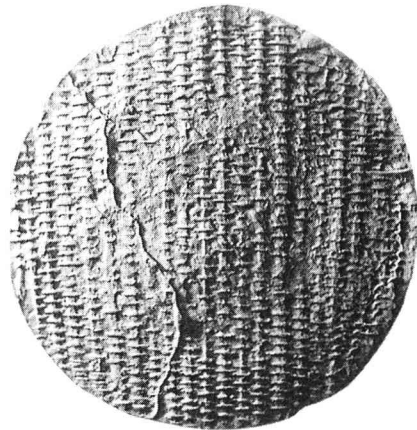
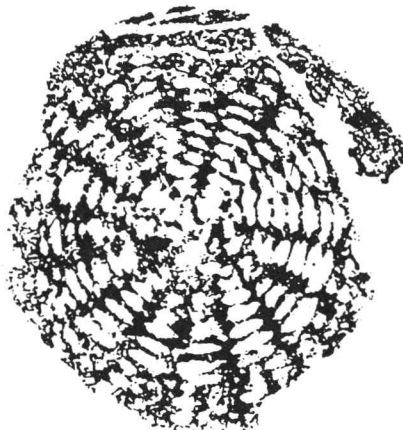


写真5 ござ目（ざる目）組み製品の圧
痕ある土器底部（荒屋敷遺跡出土土器底
部圧痕反転陽像、縄紋時代晩期末～弥生
時代初頭）[三島町教育委員会 1990 図版
142]



拓影2 ござ目（ざる目）組みと縄目編
みの圧痕ある土器底部（中屋遺跡出土
土器底部、縄紋時代晩期）[山本直人
1986 p.311]



拓影3 ござ目（ざる目）組みの圧痕あ
る土器底部（東市瀬遺跡出土土器底部、
縄紋時代中期～後期）[山本直人 1986
p.311]



写真6 飛びござ目組み製品の圧痕あ
る土器底部（荒屋敷遺跡出土土器底部
圧痕反転陽像、縄紋時代晩期末～弥生時
代初頭）[三島町教育委員会 1990 図版145]

土器（拓影2）はある事情により実物を拝見する機会を得られずにいるが、幸い鮮明な写真が紹介されているところから技法の若干が判る。この圧痕を残した組織体の骨格となっているのは角度を違って中央で交差させた6本の芯材である。この芯材どうしを連絡、組織する技法について渡辺誠は「3～5mmのタテ材6本を放射状にくみ、これに2本のヨコ材をもじり編みで5周させ、6周目からはタテ材を割くか新たに加えるかして、目を細かにしている」と説明している [渡辺 1982]。

途中から目が細かくなっているのは、芯材どうしを組織する技法が途中から別の種類に変化したからではないだろうか。組織技法の実際についての手掛かりはその圧痕にある。というのは後半部にはあたたかも縄を置いたかのように見える編芯の圧痕が顕著だが前半部にはそれが認め難いからで

ある。このことはそれぞれが別種の技法によっていることを現していると思われる。隣り合う軸芯間を連絡する役割を担った素材の圧痕の様子から、中央に近い前半部分を形成した技法は「ごぎ目（ざる目）」組みではないかと思う。ただしあくまでも原資料に当たることが困難な現況のもと、写真観察によっての見解に過ぎないことをお断りしておきたい。

そうしてみると同じ金沢市の東市瀬遺跡から発見された例（拓影3）も興味深い。こちらも円形平面の製作物の圧痕で、報告者によってこの圧痕を土器底部に残した物は「もじり編み」で製作されたものと説明されイラストも添えられている〔山本 1986〕。これも原資料を見る機会が得られない状況下では拓影から推察するしかないが、「ごぎ目（ざる目）」組みの可能性がないであろうか。

オ 「飛びごぎ目」組み

荒屋敷遺跡からは横芯材が縦芯材の1本を飛び越えてから2本をすくうという技法で製作された製品の圧痕が付いた土器底部が発見されている（写真6）。同様の例は石川県野々市町の御経塚遺跡出土例の中にも認められた。鳥浜貝塚からはこの技法で組織された製品の断片が発見されている（写真7）。この鳥浜貝塚例では一部に着色した素材を装飾的に組み合わせており、この技法を駆使することによって相当精緻、美的なものが製作されたことが窺える。この破片のうち着色した素材を組み込まない部分の構成は、（横芯材が縦芯材の）3本をおさえて3本をすくう、2本をおさえて1本をすくう、1本をおさえて2本をすくう、2本をおさえて2本をすくう、等々さまざまである。この破片の上端、着色素材を組み込むことで浅い「V」字状のデザインを重ねている部分の組み方はかなり規則的である。4本おさえ4本すくいを基調としながら、4本おさえ5本すくい、4本おさえ7本すくい、4本おさえ3本すくいなどを組み合わせることによって模様を浮き出させている。特別に装飾的な模様を浮き上がらせたこの例は、この遺跡から発見された他の資料（写真8）等に対して格別の精巧品であることが明らかである。実用の枠を超えたとも見られる特別精巧な編組品が少なくとも縄紋時代前期には登場しているとみてよいのであろう。

以上の諸例は「飛びごぎ目」組みの中でも横芯材をかなり規則的に浮沈させたものであったが、荒屋敷遺跡からは不規則に浮沈させたものが発見されている（図3）。

カ 「木目ごぎ目」組み

荒屋敷遺跡から検出された「飛びごぎ目」組みの類にはかなり手の込んだ変わり種がある。すなわち土器底部に残された圧痕から横芯材の組み込み方によって表出された模様の全体を見ると、途中で折り返して流れを変えている（写真9）。同遺跡から出土した底部から口縁部までの構造が観察できる籠のような入れ物の側壁にこの「木目ごぎ目」組みの技法が見える例がある（図4）。

キ 「六つ目」組み

東京都の下宅部遺跡から発見された一例は構成材が互いに一定の間隔を保ちながら三方向から交差されており、交差によってできた六角形の目が規則的に並んでいる（写真10）。

ク 「網代」組み

青森県の三内丸山遺跡から発掘された、全体の様子がほぼ判る有名な小籠は「網代」組みの手法で製作された好例である。縦芯材の2本を飛び越えた横芯材は縦芯材の2本をすくう、という「二本飛び網代」組みの技法で製作されている（写真11）。ちなみに写真のような容器をこの手法で製作する場合は、底から立ち上がって口縁部に向かう縦芯材の本数が奇数でなければならない。すな

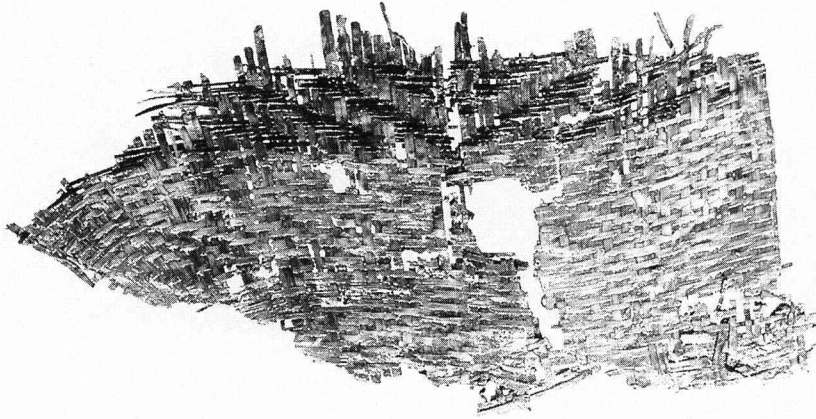


写真7 飛びござ目組み製品破片（鳥浜貝塚出土，縄紋時代前期）[鳥浜貝塚研究グループ 1979 巻頭図版2]

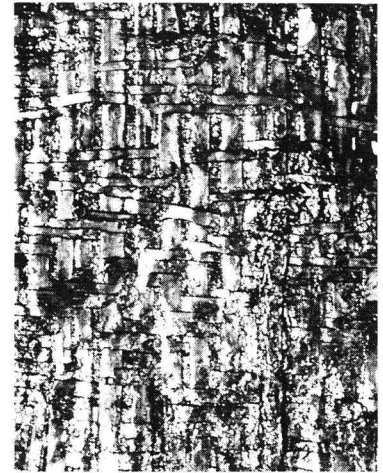


写真8 飛びござ目組み製品破片（鳥浜貝塚出土，縄紋時代前期）[鳥浜貝塚研究グループ 1979 図版84]

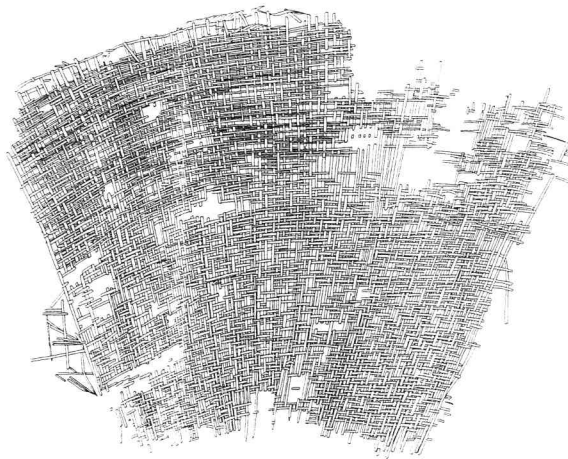


図3 飛びござ目組み製品の破片（荒屋敷遺跡出土，縄紋時代晩期末～弥生時代初頭）[三島町教育委員会 1990 p.771]



写真9 木目ござ目組み製品の圧痕ある土器底部（荒屋敷遺跡出土土器底部圧痕反転陽像，縄紋時代晩期末～弥生時代初頭）[三島町教育委員会 1990 図版142]



図4 木目ござ目組み製品の破片（荒屋敷遺跡出土，縄紋時代晩期末～弥生時代初頭）[三島町教育委員会 1990 p.770]

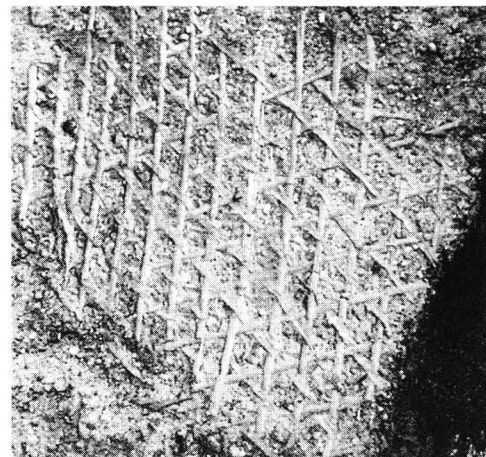


写真10 六つ目組みの製品破片（下宅部遺跡出土，縄紋時代後期）[東村山市遺跡調査会 2000 p.11]

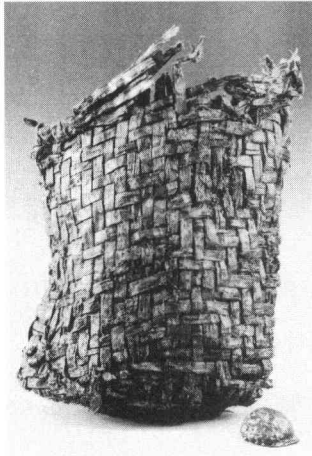


写真11 二本飛び網代組みの小籠（三内丸山遺跡出土，縄紋時代前期）[青森県史編さん考古部会 2002 p.304]

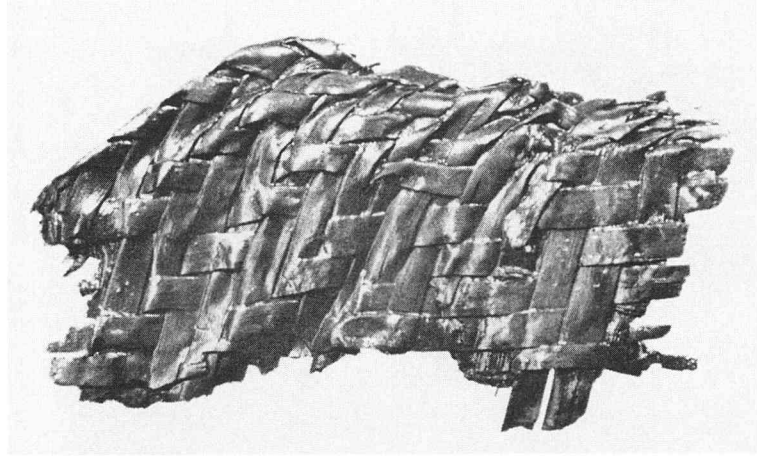


写真12 二本飛び網代組み製品の破片（鳥浜貝塚出土，縄紋時代前期）[鳥浜貝塚研究グループ 1979 図版 85]

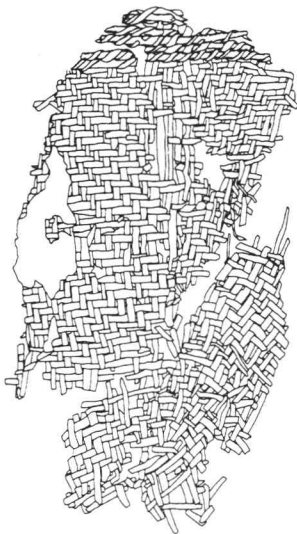


図5 網代組み製品の破片（桜町遺跡出土，縄紋時代中期）[桜町遺跡発掘調査団 2001 図18]



写真13 二本飛び網代組み製品の圧痕ある土器底部（荒屋敷遺跡出土土器底部圧痕反転陽像，縄紋時代晩期末～弥生時代初頭）[三島町教育委員会 1990 図版 141]



図6 間隔を空けた縄目編み製品の破片（桜町遺跡出土，縄紋時代中期）[桜町遺跡発掘調査団 2001 図18]

わち網代組みの入れ物を作った縄紋時代前期の人はその効果を知っており，装飾的な構成を行うために明確な意図をもって縦芯材の本数を加減して奇数にしたことが理解されるのである。

鳥浜貝塚例（写真12）も網代組みの例である。桜町遺跡から発掘された例（図5）も荒屋敷遺跡例（写真13）も「二本飛び網代」組みによる製品の圧痕が残る土器底部である。

3 「編む」技法で製作された縄紋時代例

これは先にもふれたように器体形成の骨格として絡まれる役割を担う縦芯材と，それを取り込むことによって縦芯材どうしを連絡する編み芯によって平面を形成する技法だが，その根本的な違いに基づいて別種の2方式に分けることができる。一つはひと筋の編み芯が，あらかじめ準備された軸芯を編み込みながら前進する「編み芯独走方式」とでも称すべきタイプで，竹工芸や籐工芸の分

野で「縄目編み」と称される技法である。箆、籠の底や側面の形成に駆使される。

もう一つは編む作業が素材上の複数箇所でも同時進行に近いかたちで行われると思われるもので、編み込まれる軸芯材を順次追加する、「編み芯併走方式」とでも称すべきタイプである。

ア 編み芯材独走方式

「縄目編み」による平面の形成

竹工芸や籐工芸でこれが「縄目編み」と呼ばれるのは、平面を形成し終わった編み芯材がそこにあたかも縄を置いたかのような外観になるからであろう（図6，写真14・15・16）。以上の鳥浜貝塚例，忍路土場遺跡例，是川遺跡例はそれぞれ編み芯どうしの間隔がやや空いている類である。これらの縦芯材を編み込んで進む編み芯を構成している基本の繊維の本数は2本であるらしい。しかし中にはそれが3本以上の場合がある。

例えば真脇遺跡からは、この基本の繊維が4本である籠らしい編み物が発見されている（写真17）。報告者によるとそれは「底の中央部から放射状に広がるタテ条を絡みながらヨコ条が同心円を描いて絡む」ものでその技法は「錘具を用いない左撚りのもじり編み」であるという。ここでいう「もじり編み」がどのような技法を指すかという点については、同遺跡から発見されたもう一つの編物（図7-(1)）の製作技法についての説明によって理解される。すなわち「ヨコ材4本でヨコ条を1本形成しており、これをもじり編みⅡ類とする」というのである〔能都町教育委員会ほか1986 p.251〕。このことから「もじり編み」には「錘具を用いない」編み方が少なくとも2種類あること、その他に「錘具を用いる」方式も含まらしいから、結局「もじり編み」には異なる2方式の都合3種類の技法が包括されていることが理解できる。ちなみに真脇遺跡例に添えられている模式図（図7-(2)）を見ると、この編み方は竹、籐工芸の分野でいうところの「縄目編み」で、竹工芸ではその基本の繊維に3本を使った編み方を「三本縄目編み」、4本を使った編み方を「四本縄目編み」と呼んでいる。

この真脇遺跡例には四本縄目編みによって製作された部分が4箇所において認められるという〔前出報告書 p.251〕。そのことはこの全体が編み芯独走の方式によらなければ成立し得ないことを意味している。編み芯を走らせるにあたってこのように間隔を詰めて平面を形成させる手法もあったことが判る。

佐賀県坂の下遺跡例は縄目編みの技法で編み進む方向性が窺える資料である（写真18）。龍頭遺跡のドングリ・ピットと通称される貯蔵穴の中からは、縄目編みの手法で製作された3点の編み袋が発見された〔大分県教育委員会1999〕。そのうちの1点は底部付近と思われる部分から口縁と推測される部分まで連続した状態で残っているから、この手法が入れ物の側壁の形成に用いられたことが判る（図8，写真19）。この龍頭遺跡例の他、これまでに挙げた諸例から明らかになることは、籠ないし袋のような入れ物を製作する際にこの技法が使われたこと、縄目編みの手法で編み進む編み芯はほとんどの場合、縦芯材を真横から編み込むことである。

編み芯独走型による円形の平面形成技法

編み芯独走方式による縄目編みの技法は入れ物の側壁のような立体的な平面を形成するためにだけ用いられるものではなかった。平面形が円形になる籠の底のような平面を形成する場合にも用いられたのである。石川県御経塚遺跡出土のいわゆる「カゴ底圧痕」が付いた土器底部のように編み

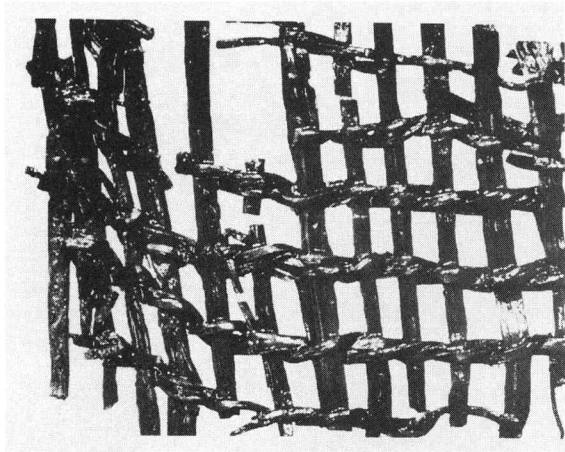


写真14 間隔を空けた縄目編み製品の破片（鳥浜貝塚出土，縄紋時代前期）[鳥浜貝塚研究グループ 1979 図版 82]



写真15 間隔を空けた縄目編み製品の破片（忍路土場遺跡出土，縄紋時代後期）[北海道埋蔵文化財センター 1989 図版Ⅶ-76]

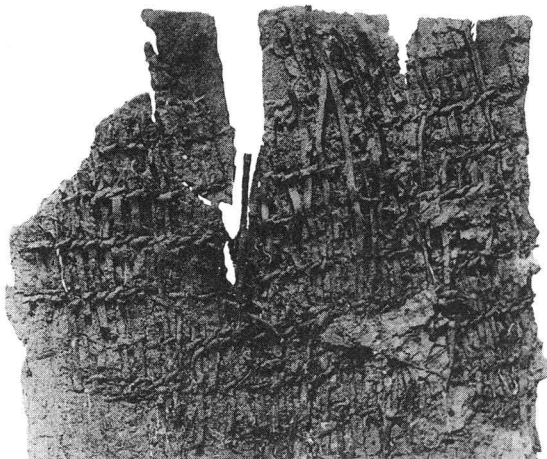


写真16 間隔を空けた縄目編み製品の破片（是川遺跡出土，縄紋時代晩期）[喜田貞吉・杉山寿栄男 1932 第九図版]

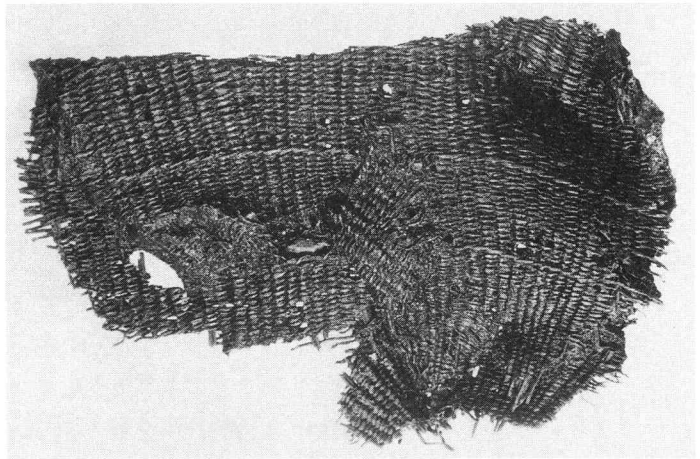


写真17 間隔を詰めた縄目編み製品の破片（真脇遺跡出土，縄紋時代前期）[能都町教育委員会ほか 1986（本編）p.255]

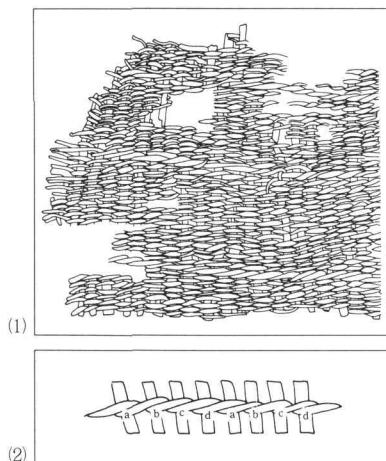


図7 間隔を詰めた縄目編み
 (1)製品の破片（真脇遺跡出土，縄紋時代前期）[能都町教育委員会ほか 1986（本編）p.251]
 (2)編み芯材の組織図（同前）

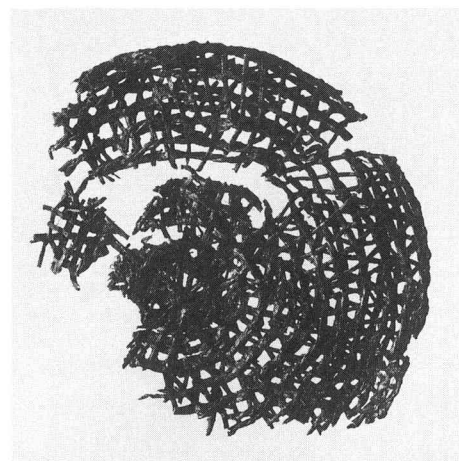


写真18 底部形成後に体部形成へ移行した例（坂の下遺跡出土，縄紋時代中期）[佐賀県立博物館 1975 p.132]



図8 間隔を詰めた縄目編み製品の破片（龍頭遺跡出土，縄紋時代後期）[大分県教育委員会 1999 p.55]

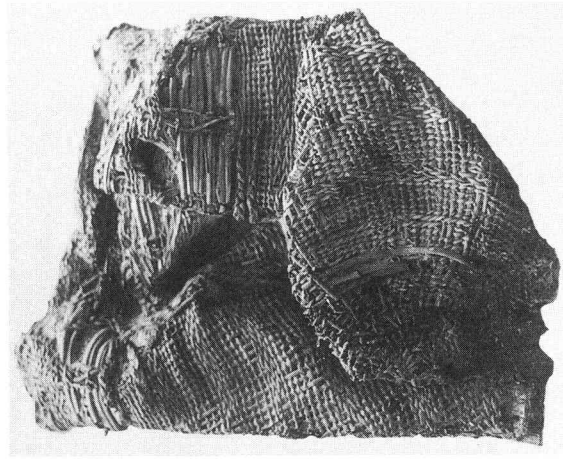


写真19 間隔を詰めた縄目編みによる袋（龍頭遺跡出土，縄紋時代後期）[文化庁 1996]

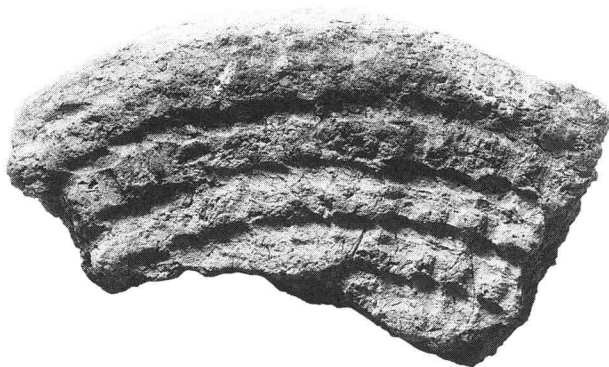


写真20 縄目編み製品の圧痕ある土器底部破片（白座遺跡出土，縄紋時代前期）[青森県階上町教育委員会 1989 p.99]



拓影4 縄目編みの圧痕ある土器底部（真脇遺跡出土土器底部）[能都町教育委員会ほか 1986（本編）p.248]

芯が中央の編み始めから渦を廻るようにして外縁に向かう縄目編みの技法が認められる [野々市町教育委員会 1983]。類例が青森県の白座遺跡（写真20）や石川県の真脇遺跡にある（拓影4）。同一個体に相前後して「ごぎ目組み」と「縄目編み」の2種の技法を合わせたものが中屋遺跡例（拓影2）があることについてはすでにふれた。

「ねこ編み」（仮称）

山形県の押出遺跡から発見された縄紋時代前期の布地片（写真21）には、あたかも右撚り、左撚りの縄を交互に並べて置いたかのように見える特徴がある。それを「左絡み、右絡みと交互の絡みになっている」ととらえ、これが「横編み法」で編まれた一種の編み布であるとの結論を得たのは尾関清子である [尾関 1996]。尾関によれば「横編み法」とは、木枠とかパネルの上下に釘を打って経糸を張りつめ、1本の経糸に2本の緯糸を絡ませて編み進めるものという。私は押出遺跡例が、あらかじめ準備された軸芯が横から別の素材によって編まれたものとする見解には賛成である。しかしこの布の編み方についての見解は別で、「編み芯独走方式」の縄目編み手法を、編み芯の間隔を詰めて往復させることによって形成したものと判断する。このような外観を呈する厚手の布地は、これまでのところ縄紋時代の遺跡からはこれ以外には発見されていないようである。民俗例から呼称を借りて仮に「ねこ編み」と呼んでおく [長野市立博物館 1984]。

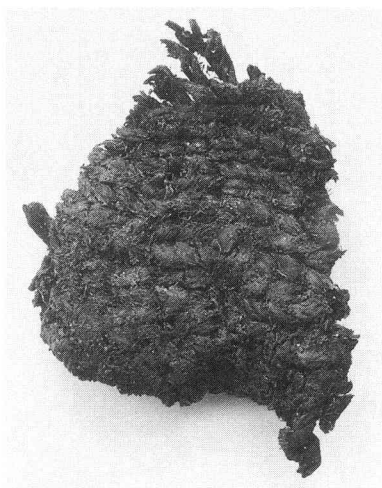


写真21 ねこ編みによる布地片（押出遺跡出土，縄紋時代前期）[山形県うきたむ風土記の丘考古資料館 1996 p.14]

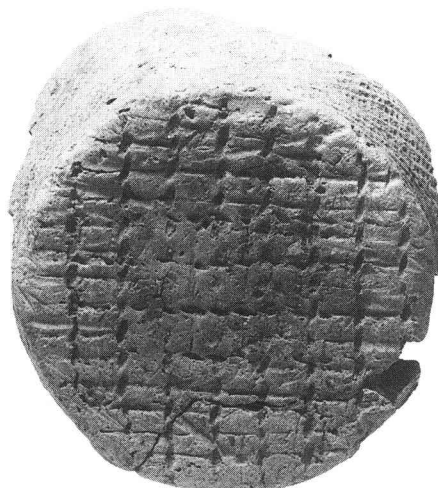


写真22 縄目編み製品の圧痕ある土器底部（白座遺跡出土，縄紋時代前期）[名久井 1998 p.34～36]

イ 編み芯材併走型

白座遺跡から発掘された土器の底面に残された圧痕（写真22）を観察すると、これの元になった製品は硬質棒状の素材を順次追加しては複数箇所併走するように編み進めることを繰り返しているようにも見える。簀の子や簾の編み方に通じるこの技法について「編み芯併走方式」によるものと推測したことがあったが[名久井 1999]、「編み芯併走方式」による「縄目編み」の技法が縄紋時代にもあったことを裏付ける直接的証拠はまだ発見されていないようである。しかし各地の遺跡から発見されている漆を絞った布は、その編み目が細かいため編み台と錘を用いて編まれたと考えられている[伊東 1966]。

(2) 入れ物の製作に関わる諸技法

植物性遺物の籠類の残片と推測されるものを観察すると、底部を形成し終えた素材を上を起こしてそのまま体部形成の骨格たる縦芯材としていることがよく理解される。また体部と口縁部が残存している諸例からは、体部を形成し終わったその後に口縁部の始末に移行していることが知られる。すなわち縄紋時代人は底面をもった入れ物を作ろうとする場合には「編む」「組む」の技法によってまず底部を製作し、その際に用いた素材を上を起こしてそのまま体部形成の拠り所とし、体部の形成後に口縁部の処理を行って製作を終わった。そのような手順はどうやら不動の原理であったらしい。

1 先に底部を形成したことを現している例

ア 網代底

荒屋敷遺跡（図9-(1)）例は網代組みの組織とごぎ目の組織が連続して認められる大破片である。「ごぎ目（ざる目）」組みの縦芯材が網代組みから連続した素材であることから、この個体は網代底とこれから連続して形成された側壁下部を残した入れ物の破片と推察される。網代底であるところ

からこの製品の底はおおむね平底で、平面形はだいたい矩形であったろう。

同遺跡から出土したもう一つの例は未製品であるかそれとも破損したものか判らないが、底がすぼまった深い入れ物の底部付近の破片であろう(図9・(2))。底面下部の組織方法は判らないがほとんど丸底をなす底部から立ち上がった素材の上を、横から別素材が浮沈して組み上げている。おそらく底部中心部の近くから縦芯材を越えたりすくったりしながら口縁部に向かって螺旋に組み上げるといった組織方法であったと推察される。

先に底部を作り、続けて側壁に移行したことが判るもう一つの好例が秋田県の戸平川遺跡から発掘された藍胎漆器である(図10)。実測図によると漆が剥落した底部の素材は網代に組まれている。これまでに発見された各地の藍胎漆器と同様にまず底面が製作され、その構成材がそのまま上に起こされて側壁形成の軸芯となったものであろう。矩形の平底であることは底部の網代組みに由来する。

イ 菊底

縄紋時代には竹工芸でいう菊底に通じる技法が存在した可能性が大きい。すなわち底面で芯素材を交差させ、それを細い別素材で編んだり組んだりして円形の平面を形成するもので、中屋遺跡(拓影2)、東市瀬遺跡(拓影3)、白座遺跡等から発見された土器底部に残る圧痕はそのような技法の存在を物語る。

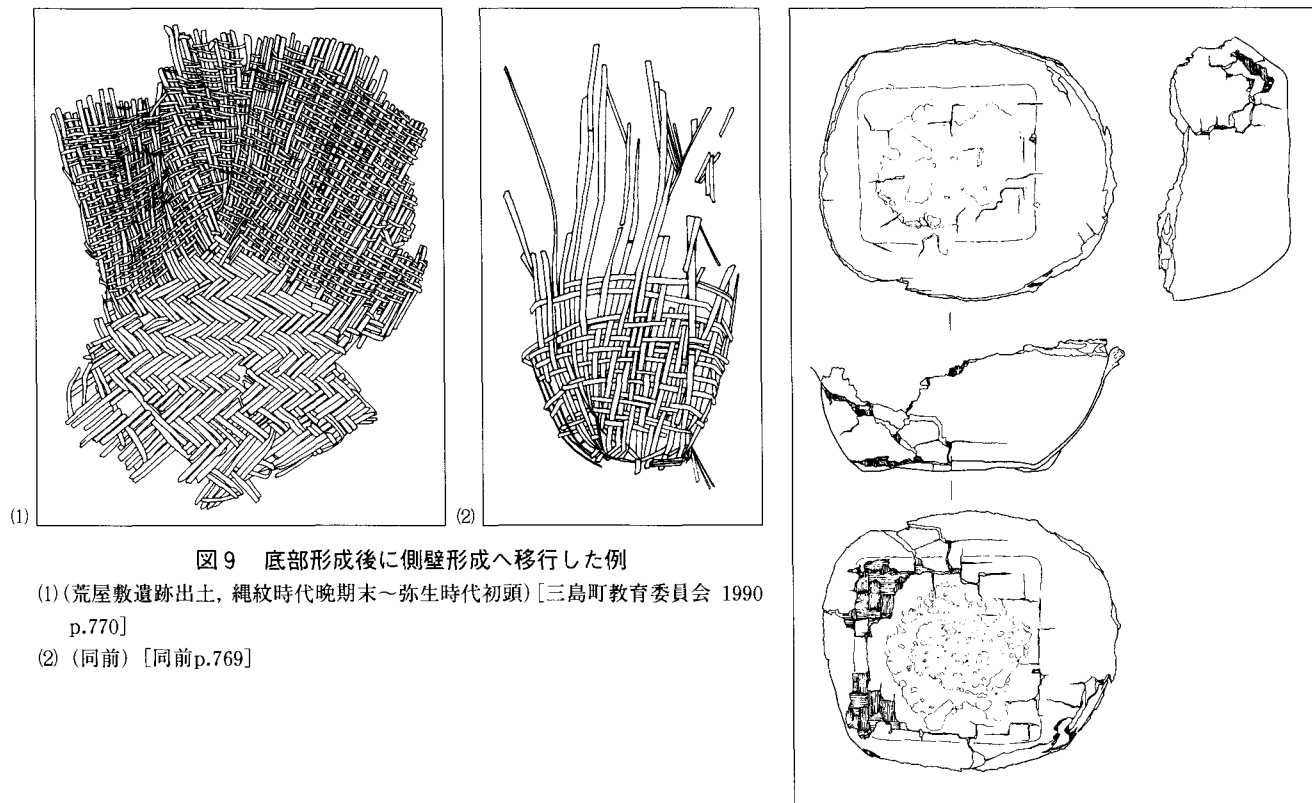


図9 底部形成後に側壁形成へ移行した例

(1) (荒屋敷遺跡出土、縄紋時代晩期末～弥生時代初頭) [三島町教育委員会 1990 p.770]

(2) (同前) [同前p.769]

図10 底部形成後に側壁形成へ移行した例 (戸平川遺跡出土藍胎漆器、縄紋時代晩期) [秋田県埋蔵文化財センター 2000 p.172]

ウ 縄目編み底

坂の下遺跡から発掘された大破片には底部から口縁部までが残っている（写真23）。写真からこの入れ物を形成する素材の方向を観察すると底部で交叉する素材はそのまま側壁の骨格となって口縁部まで至っており、その縦芯材を横から別な素材が順次編み込んでいる。その進行の仕方は縦芯材を取り込んだ編み芯が平仮名の「の」の字を描くように進むようである。螺旋を描くようにして中心付近から側壁に移行し、側壁を編み上げてついには口縁部に至ったものであろう。編み上げたその姿はあたかも側壁上に縄を置いたかのようであり、竹工芸や籐工芸でいうところの縄目編みの技法である。入れ物の製作が底部から側壁へと移行したことを知る事ができる好例である。

桜町遺跡例も底部および側壁と口縁部のかなりの部分が残る好資料である（図11）。本来の器形ははっきりしないが浅い鉢形でもあったろうか。底部中心には交叉させた軸芯を縛った様子が見え、その軸芯はそのまま側壁形成の骨格となっていることが判る。側壁の骨格たる軸芯を底部付近から口縁部に向けて、縄目編みの手法で螺旋状に編み進めているのは先の坂の下例と共通している。

2 軸芯材を増やす手法

入れ物の側壁を形成するに際し、必要に応じて軸芯を増やす場合があったことは、縄紋時代人の造形上の見落とすことができない技法である。軸芯を増やすには芯の一部を裂く場合よりも別素材を追加挿入する方が多かつたらしい。曾畑貝塚例（図14）では縦芯材を追加した形跡が顕著で、その手法が入れ物の鉢を広げるうえで効いている。坂の下遺跡例（写真23）については形成途中で「U」字形の軸芯を追加していることが指摘されている〔渡辺1982〕。桜町例（図11）の場合は直線的な素材を差すことで軸芯の本数の増加を図っている。

戸平川遺跡例（図12）例では縦芯材が枝分かれしたかのように見える部分が12箇所認められる。縦芯材を編み終えている編み芯の上に別の縦芯材が乗っている部分が少なくとも4箇所認められるから、これは新規の縦芯材を追加した痕跡である。そのために全体の縦芯材が開いており、これが鉢の開いた入れ物の側壁の一部であったことが推測できる。

軸芯を増やすことは、いま指摘した鳥浜貝塚例、坂の下遺跡例、桜町遺跡例のように縄目編みの技法に限って行われることではなかった。曾畑貝塚例（図13）は底を網代風に荒く組み、その素材を側壁の骨格たる軸芯としている一例だが、図の左上の部分に縦芯材を差して増やしたことが見て取れる。同様の技法は荒屋敷遺跡例（図9-(1)）にも認められたところであった。すなわちこの例では残存しえた底部の一隅の上方で「ござ目（ざる目）」組みを施す軸芯を増加させている。おそらくこの個体の底部の他の隅の上でも同様の製作をしたであろうから、この入れ物および図13例の側壁はやや鉢の開いた形になっていたのであろう。

側壁の軸芯を増加することによって器体の鉢が開いたかたちにする造形がいつごろから行われたか、現在知られている資料による限り曾畑貝塚例（図14）の縄紋時代前期まで遡ることは確実である。

3 口縁部の処理方法

縄紋時代人が入れ物を仕上げる段階で口縁部を始末した方法は側壁を形成してきた縦芯材の終末部分を始末する方法でもあった。それにはかなりの種類があるらしいがここでは以下の4種類を取り上げておく。

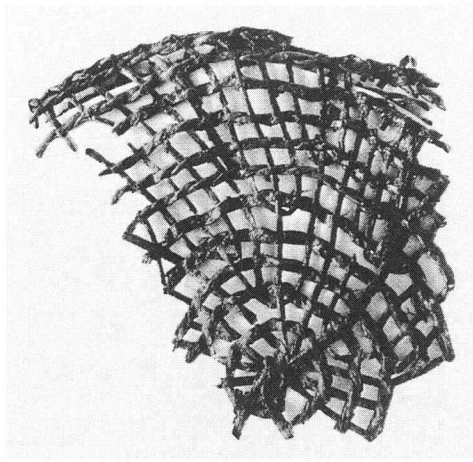


写真23 縦芯材を追加した例（坂の下遺跡出土，縄紋時代中期）[佐賀県立博物館 1975 p.132]



図11 縄目編み底の例（桜町遺跡出土，縄紋時代中期）[桜町遺跡発掘調査団編 2001 図18]

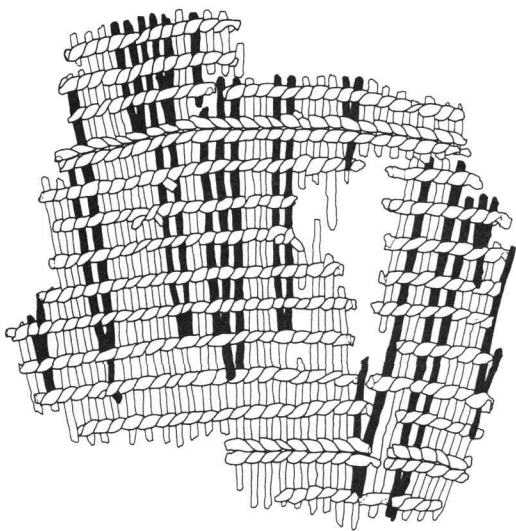


図12 縦芯材を追加した例（戸平川遺跡出土，縄紋時代晩期末）[秋田県埋蔵文化財センター 2000 p.173 掲載図に着色]



図13 縦芯材の追加した例（曾畑貝塚出土，縄紋時代前期）[熊本県教育委員会 1988 p.320]



図14 巻き縁の例（曾畑貝塚出土，縄紋時代前期）[熊本県教育委員会 1988 p.322]

ア 縦芯材折り込み縁（仮称）

側壁を形成し終わった最後の芯が横に走った時、各縦芯材がその横芯材の内外から直立していることがあった。そのような縦芯の始末の仕方の一つは、横に走っている最後の芯をくるむように折り曲げて、その末端を2～3段下方の横芯に挟み込む方法であった。三内丸山遺跡に例がある（写真24）。

イ 縄目返し縁

口縁部に向かって組み上げてきた側壁形成の最終段階で縄目編みを巡らせる。そこからさらに伸びている縦芯材をある角度をもって折り曲げ、その末端を縄目編みの部分に挿入するという技法である。竹工芸の呼称を借りてこのように呼んでおく。この例に当たると思われるものが荒屋敷遺跡から出土している（図4）。

ウ 巻き縁

曾畑貝塚例（図14）の場合は側壁を組み上げる際にその骨格としての役割を果たしてきた縦芯材を横に倒し、それを別の素材で巻き締めて口縁としている。桜町遺跡例（図15）も側壁を縄目編み



写真24 縦芯材折り込み縁（仮称）の例（三内丸山遺跡出土、縄紋時代前期）[青森県史編さん考古部会 2002 p.409]

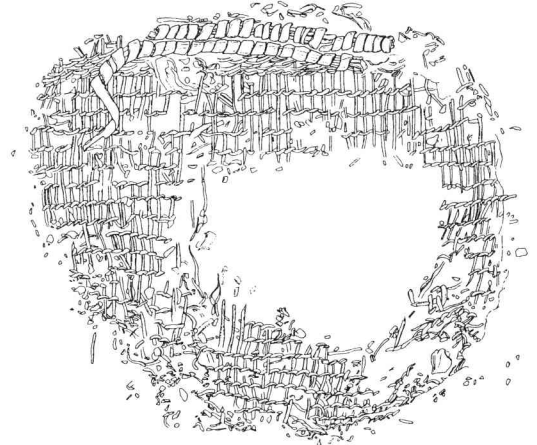


図15 巻き縁の例（桜町遺跡出土、縄紋時代中期）[桜町遺跡発掘調査団 2001 図18]

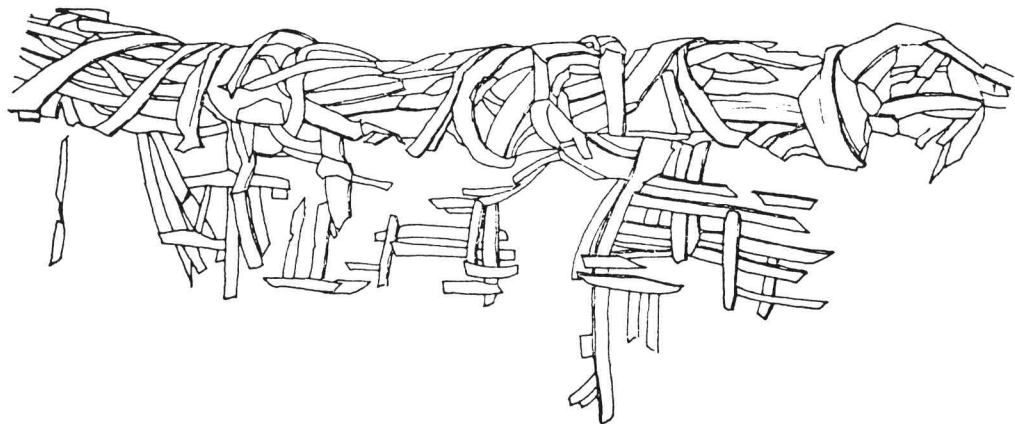


図16 巻き縁の例（寿能泥炭層遺跡出土、縄紋時代後期）[埼玉県立博物館 1984 p.560]

の技法で編み上げた後に縦芯材を横に倒し、それをサクラの樹皮で巻き締めている。埼玉県の寿能泥炭層遺跡例（図 16）は破損が著しく不明瞭だが、一応この類に入れておきたい。

エ 返し巻き縁

口縁をまず斜めに巻き締め、次いでこれと交差させるように逆の斜めに巻き重ねる技法である。下宅部遺跡から発見されている例はまず右上がりに巻き、その後で左上がりになるよう巻いて被せている〔東村山遺跡調査会 2000 p.10〕。

以上に挙げたのは縄紋時代の編組に関わる諸技法のうち以下に述べる民俗例に関わると判断したものである。すなわち現時点では縄紋時代例に有っても民俗例には見あたらないというものがあるし、その逆の例もある。しかし本稿の主旨は民俗的古式技法と私が呼ぼうとするある種の技法の伝承を取り上げるのがねらいである。その観点から見ておきたい民俗例は以下のとおりである。

②……………民俗例における編組技法

(1)平面形成の技法

前項では「組む」と「編む」の技法上の根本的相違について、縄紋時代の遺物を例に引いて述べたわけだが、民俗例の場合にも全く同じことがいえる。すなわち「組む」技法で製作された背負い籠を例にとると、これを形成する縦横の素材どうしの位置関係は実測図の断面図に現れるが、このとき縦芯材の表裏に横芯材の断面が必ず段を違えて現れる（図 17-(1)）。これはこの個体の平面を形成する縦、横の素材が互いに片面どうしで接しているからである。これに対して「編む」技法で製作された籠の場合は実測図の断面にその構造が別なかたちで現れる。すなわち縦芯材の表裏に横芯材の断面がおおむね水平に、縦芯材の断面形を挟むかたちで現れる（図 17-(2)）。これはこの個体の平面を形成する際に縦芯材を横芯材が表裏から絡むように取り込んでいるからである。このように「組む」「編む」というそれぞれの技法が上記のように根本的に違うことは民俗例の場合にも同様なのである。よって以下の民俗例の諸技法を扱うにあたっては「組む」「編む」の呼称を使い分け、それぞれの技法を呼ぶにあたってはある程度一般的になっている竹工芸などの分野の呼称を利用することにする。

1 「組む」技法で製作された民俗例

ア 「四つ目」組み

縦、横ともに同様形状の素材でしかも隙間を残しながら互いに浮沈させたものである。写真 25 はヤマブドウの蔓皮で作った現代民俗例で底部を四つ目に組んでいる。図 18 はシナノキ、ウリハダカエデの樹皮を混ぜて四つ目に組んだ背負い籠である。図 19 はヒバの樹皮で組んだ物入れで、相当密に組まれてはいるがこの類としておく。

これらの民俗例を形成した「四つ目」組みの技法は縄紋時代の曾畑貝塚例（図 2）、下宅部遺跡例、荒屋敷遺跡例（図 3）のそれと共通している。

イ 「石畳（市松）」組み

「四つ目」組みの類に属すが素材を特に緻密に組んだもので、少しの隙間も作るまいとした意図が

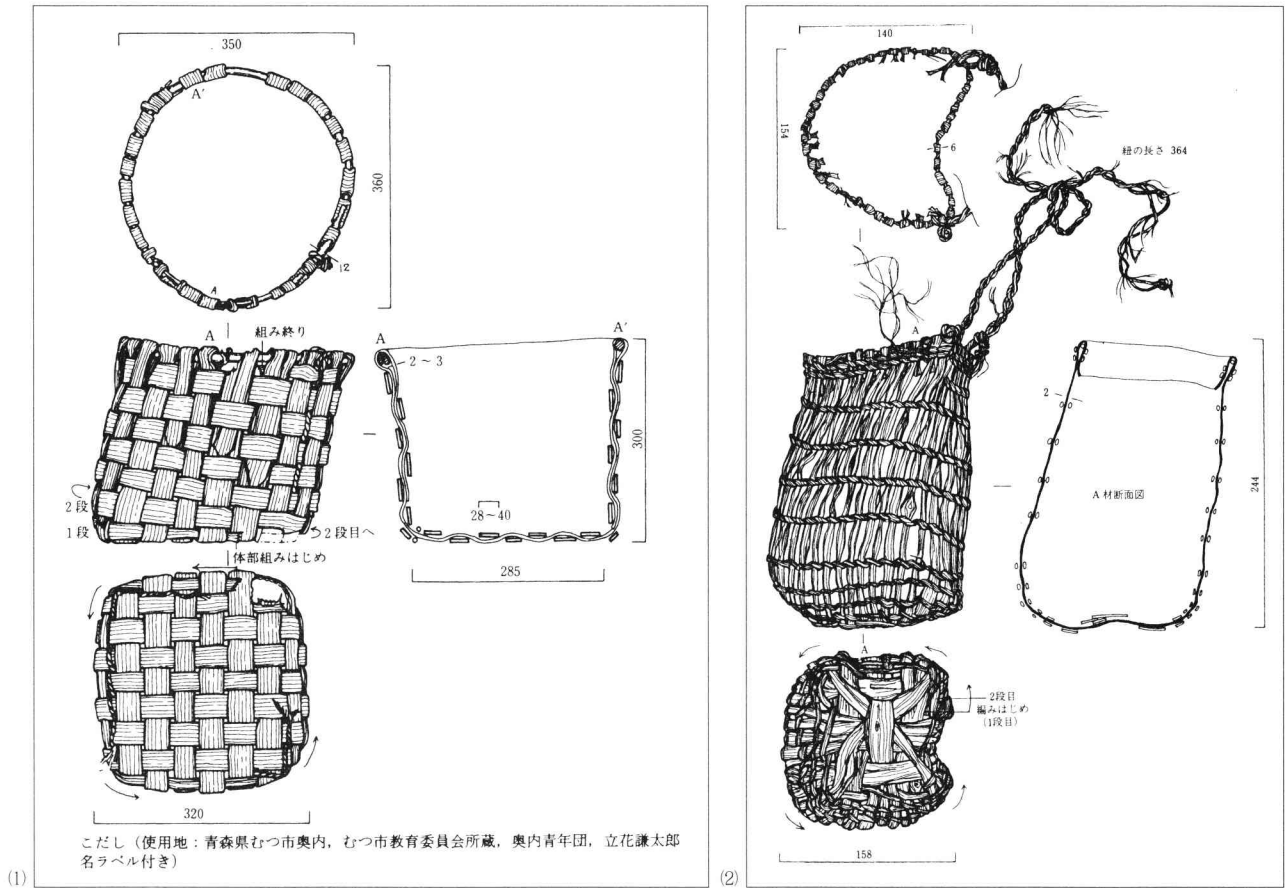


図17 「組む」と「編む」

(1)素材を組んだ「こだし」(むつ市教育委員会蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.263]

(2)素材を編んだ「こだし」(葛巻町やすらぎの家資料館蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.269]

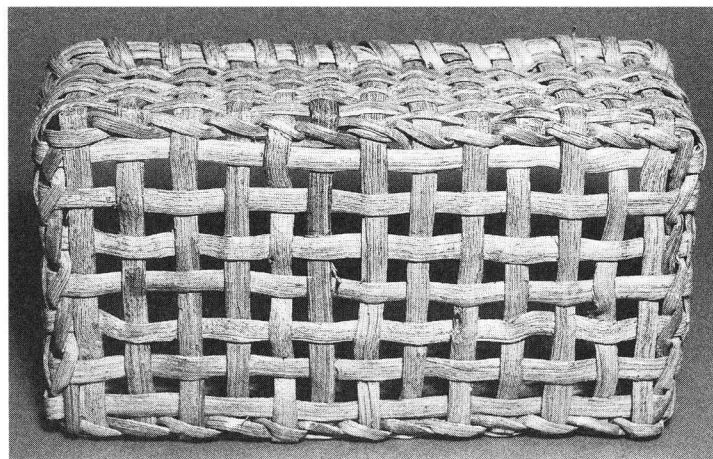


写真25 四つ目組みの小物入れの底部 (ヤマブドウ蔓皮製, 現代民俗例:
福島県三島町長郷千代喜作製)

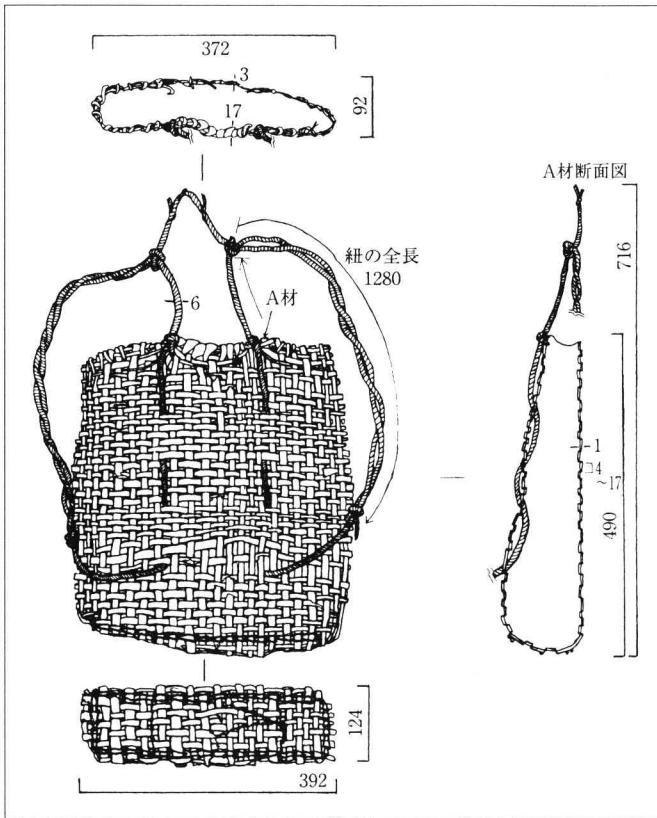


図18 四つ目に組んだ「背負い籠」(内間木家資料, 高橋茂樹作図『山と生きる』p.208)

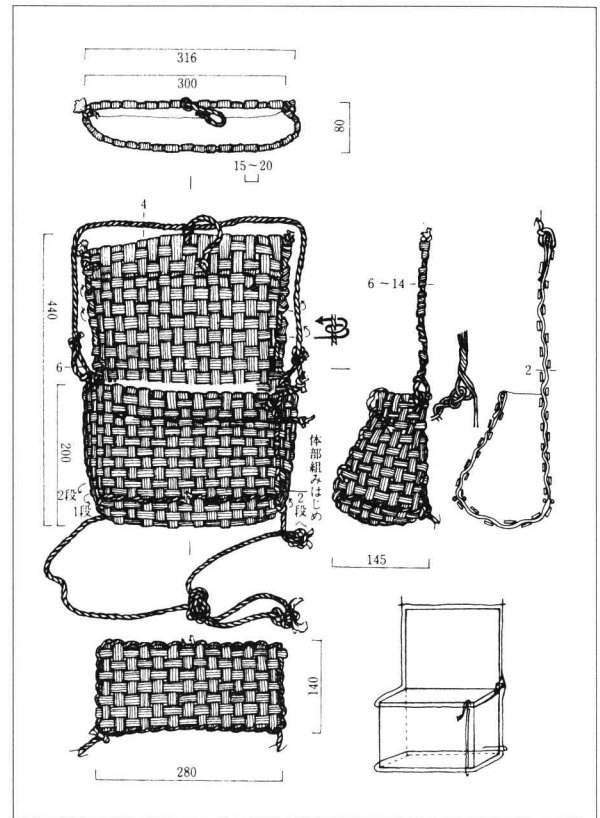


図19 四つ目に組んだ「かばん型もの入れ」(田中忠三郎所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.264]

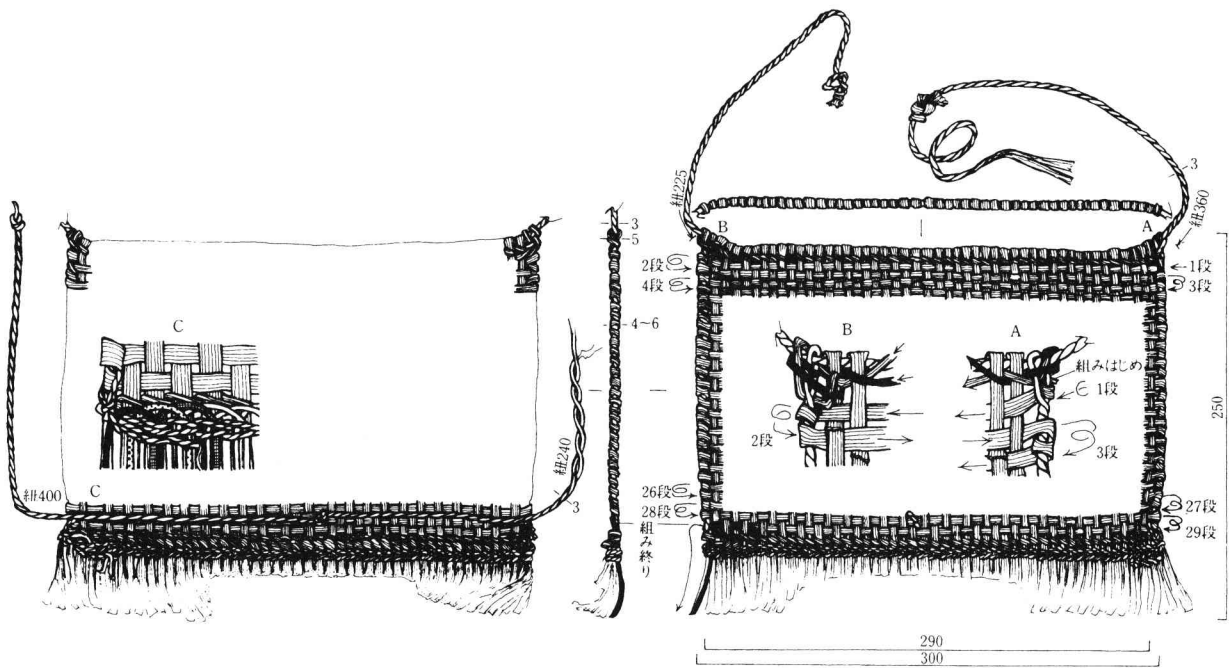


図20 石畳(市松)組みの「はばき」(葛巻町やすらぎの家資料館所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.268]

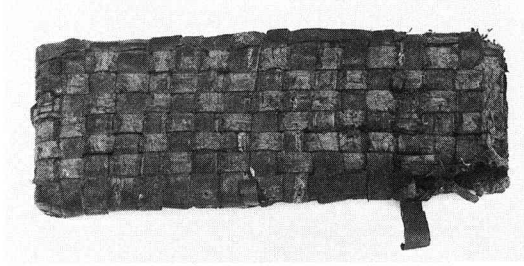


写真26 石畳（市松）組の「鉦の鞘」（サクラ樹皮製，
雫石町教育委員会所蔵，『北国の樹皮文化』p.77）

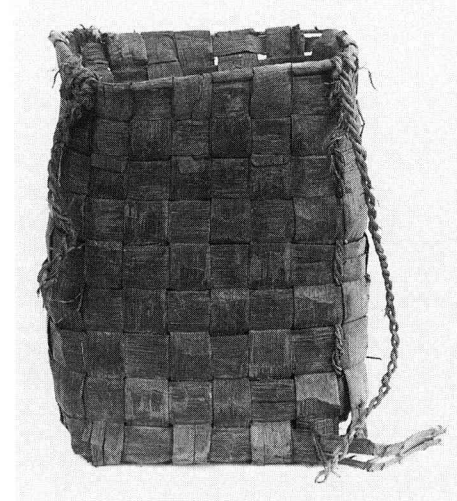


写真27 石畳（市松）組の「こだし」（ヒバ
樹皮製，むつ市教育委員会所蔵，『北国の樹皮
文化』p.57）

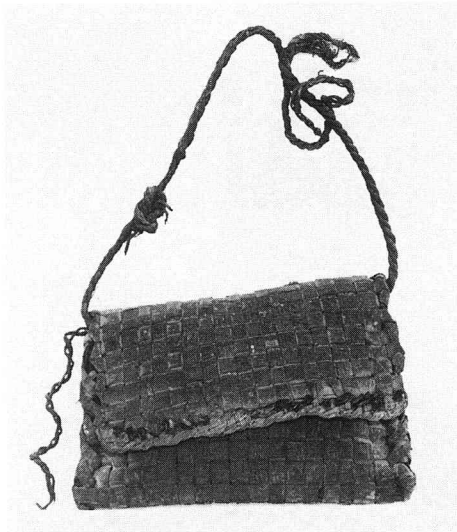


写真28 石畳（市松）組の「もの入れ」（ヒバ
樹皮製，むつ市教育委員会所蔵，『北国の樹皮
文化』p.60）

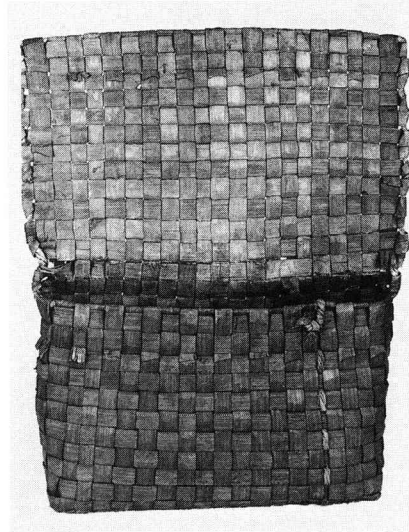


写真29 石畳（市松）組の「やじがれ」
（ヒバ樹皮製，むつ市教育委員会所蔵，『北
国の樹皮文化』p.48）

窺われる製作である。図20は樹皮製のはばき，写真26はサクラの外皮で組んだ鉦の鞘である。写真27は山の幸を採り入れる腰籠でヒバの内皮を組んで作っている。写真28もヒバの内皮を組んで作ったもので，大きさや形態はハンドバックのようなもの。青森県の下北地方ではヒバの内皮を組んでこのような蓋のある大きな入れ物を作り，山仕事に使う諸道具を入れて背負った（写真29）。図20はウリハダカエデの樹皮を組んで作った「はばき」である。杉山寿栄男が紹介した煙草入れもこの例にあたる [杉山1942 図版46]。

これらの民俗例を形成した製作技法は縄紋時代の後谷遺跡例（写真1）に通じる。

ところで菅江真澄が江戸時代後期に現在の松前で見掛けたアイヌ民族の入れ物に「木皮袋 サラネフ」がある [菅江1982]。彼のスケッチ（図21）を見ると小さな矩形が規則的に並んでおり，彼が見た入れ物の外観の特徴が窺われる。おそらく素材を組んで製作したものだったのだろう。彼は

その素材の正体について「木皮」と判断しているから、それは下北のヒバ皮製の「やじがれ」（写真29）のようなものではなかったかと推察される。江戸時代後期には松前と下北に樹皮を用いる類似した物質文化があったのかもしれない。

ウ 「ござ目（ざる目）」組み

平面形成上の骨格となるべき縦芯材として強靱な素材を用い、横から組む芯にやや柔軟な素材を支度して縦芯材の1本を飛んで1本をすくうという組み方を、目を詰んだかたちで展開する技法である。図22の「こだす」はクリ、クルミ、茸を採集する際に腰に付けた籠で、シナノキの樹皮を組んで作っている。図23の「しよい籠」はクリや茸を採集する際に使った籠で、クリを拾う時は紐の片側を解いて腰に付け、籠が一杯になったら紐を結び直して背負って使ったもの。サルナシの蔓を割り、裂いて取りだした材で組み、クマヤナギを巻いて仕上げている。図24の「しよい籠」は茸や山菜を採る時に使った籠でサルナシの材を組み、シナノキの樹皮繩を付けたもの。図25の「よこた籠」はニガタケで組み口縁部をウリハダカエデの樹皮で巻いたもので、行商に出掛ける時に商品を入れて背負ったもの。図26の「丸箆」はクリやクルミ、茸などを天日乾燥する際に使ったもので、ニガタケで組み口縁部をサルナシの材で巻いている。図27の「めじゃる」は水洗いした野菜の水切りの時に使ったもので、シノダケで組み口縁部をイタヤカエデ材で巻いている。写真30は「味噌こし」、写真31はドジョウを捕る「どう」である。

以上の諸例から窺われるようにこの組み方は容器の類の製作の際に多く用いられる技法である。

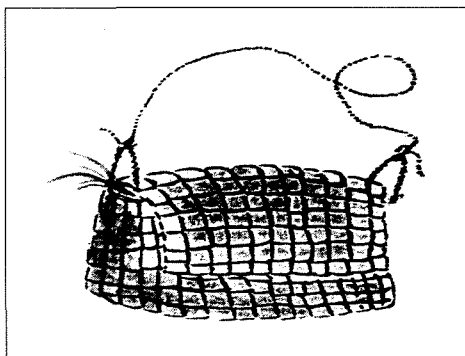


図21 菅江真澄が描いた「木皮袋、サラネフ」
（『菅江真澄全集』第二巻，図81）

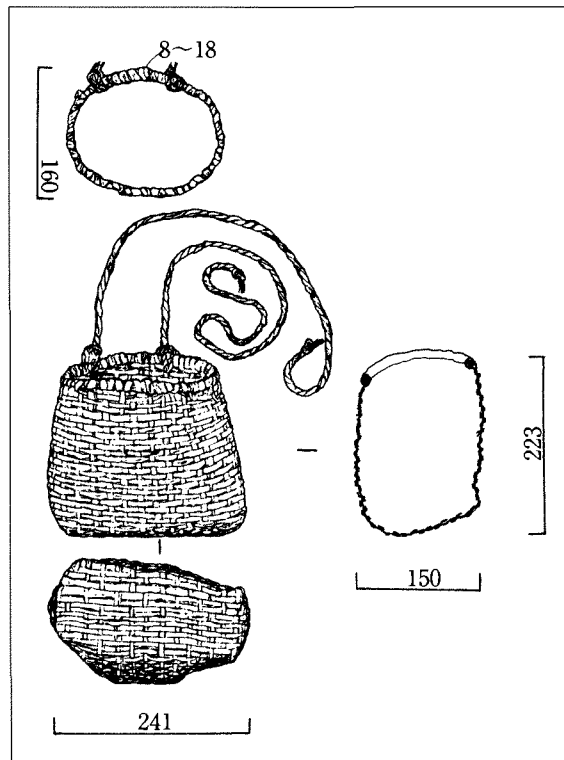


図22 ござ目（ざる目）に組んだ「こだす」（内間木家資料，金戸美智子作図『山と生きる』p.206）

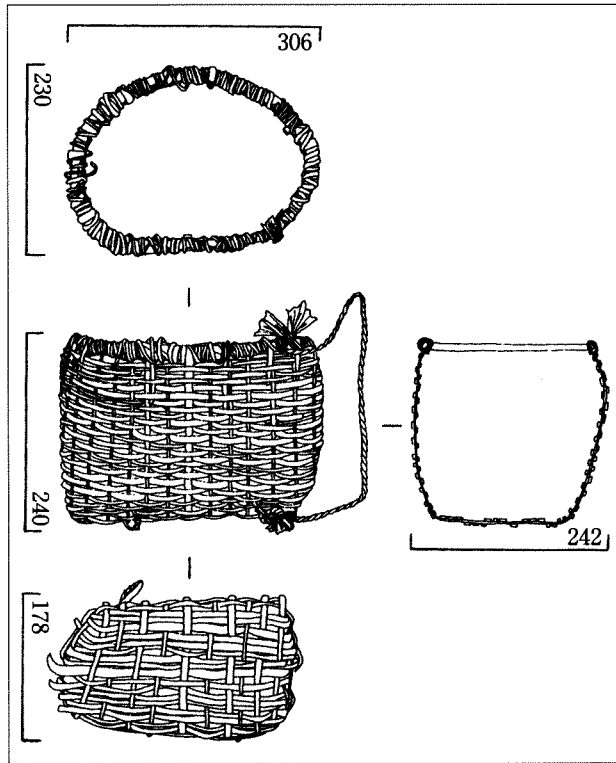


図23 ござ目（ざる目）に組んだ「しよい籠」（内間木家資料，坂本由美子作図『山と生きる』p.206）

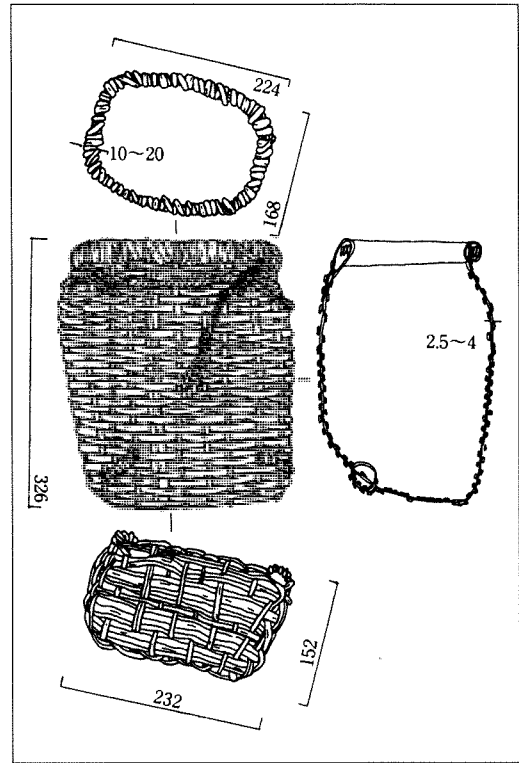


図24 ござ目（ざる目）に組んだ「しよい籠」（内間木家資料，大道陽子作図『山と生きる』p.207）

ただし藁もしくは樹皮で製作する履き物等，平面的なものを形成する際にも用いられた。図28は「つまご」，図29は「わらじ」，図30は「ぞうり」，図31は家の周囲だけで履く「すんべ」である。図32の「背中当て」は山仕事をする人がこれに「まさかり」や「鋸」や弁当を入れて背負ったシナノキ樹皮製の入れ物だが，この例の場合は底部に「ぞうり」や「つまご」の底と同様に組んで製作したものが付けられている。

これらの民俗例を形成した「ござ目（ざる目）」組みの技法は縄紋時代の鳥浜貝塚例（写真2・3），桜町遺跡例（写真4），荒屋敷遺跡例（写真5）に見られるそれと同様である。

室町時代の作とされる『三十二番職人歌合絵巻』の十五番は「箕づくり」で，肩に担いだ棒の両端に「箕」を束ねて掛けている（写真32）。この描写で特徴的なのは奥から開口部に向かって多数の短線が並列していることで，それが箕の全面にわたって整然と何列も描かれる。多数の短線列が整然と，少しの隙間を隔てながら全面にわたって何列も描かれるのは，描き手が見た箕が「ござ目」組みの技法で製作されたものだったからではないだろうか。すなわちこの短い線は縦芯材を越えた横芯材の並列を現しており，両隣に僅かな空白を置いているのは，横芯材の浮沈する境界を描写したのではないかと思われる。

エ 「ござ目」組みによる円形平面の製作

民俗例では主として籠の底を製作する場合の技法で，中心部から順次外側へ渦を遡るように巡りながら組み進んだものであった。竹工芸で「菊底」と呼ばれるこの組み方は，やや幅のある素材を放射状に置き，これよりも細い1本または2本の材でござ目組みの技法で組み進むものである。写真33は竹製の浅い皿状容器の底で，写真34は写真30の「味噌こし」の底部である。

「ござ目（ざる目）」組みで円形の平面を製作するこの技法は，縄紋時代の中屋遺跡例（拓影2），

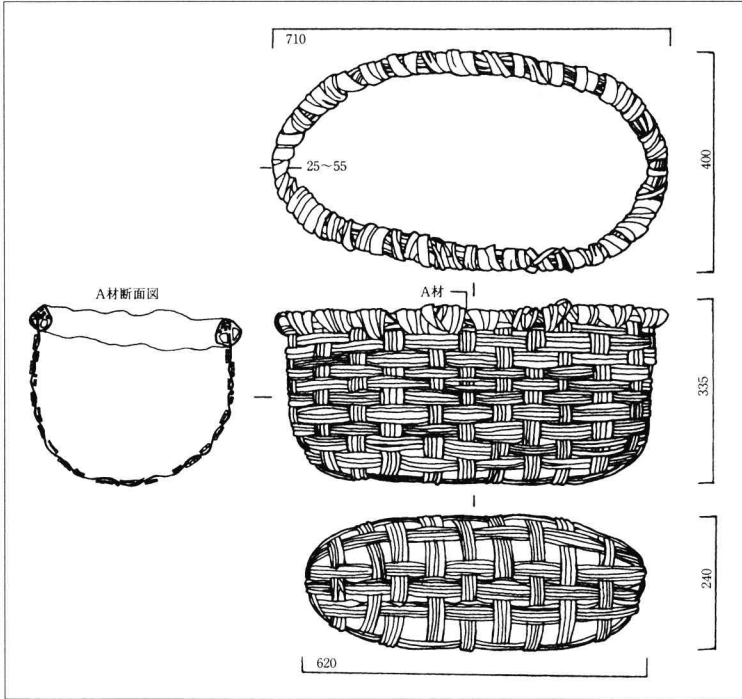


図25 ござ目（ざる目）に組んだ「よこた籠」（内間木家資料，樋口綾乃作図『山と生きる』p.10）

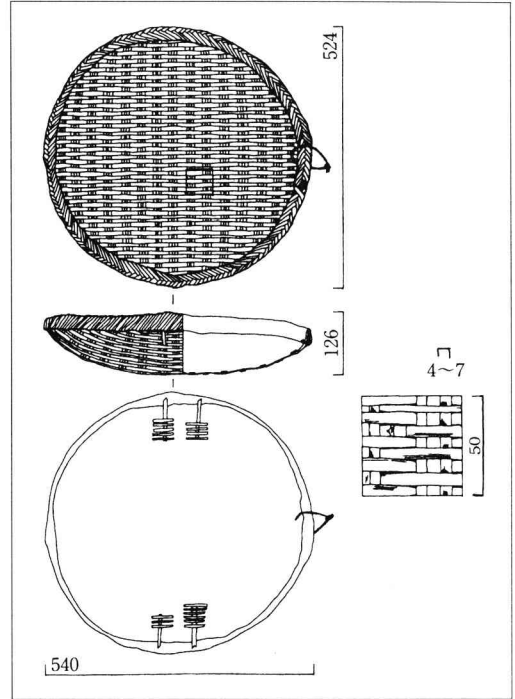


図26 ござ目（ざる目）に組んだ「丸笊」（内間木家資料，熊谷朋子作図『山と生きる』p.166）

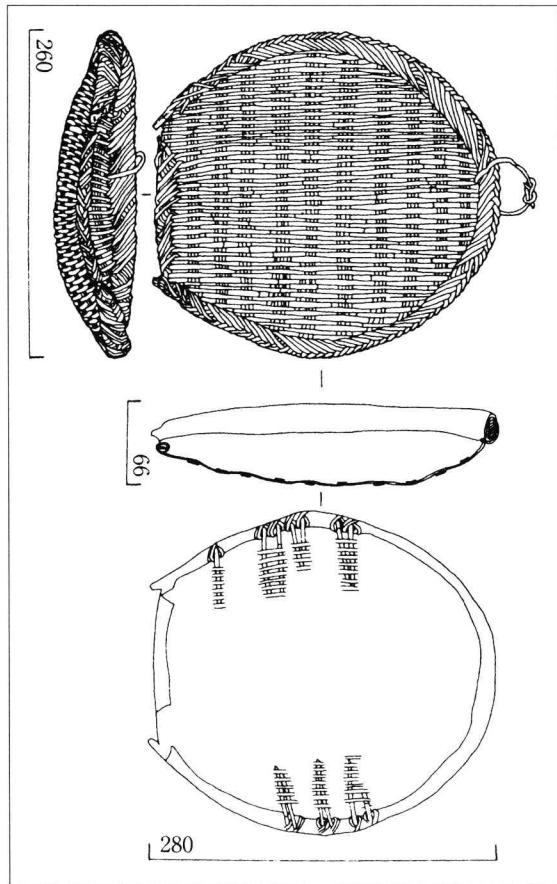


図27 ござ目（ざる目）に組んだ「めじゃる」（内間木家資料，根澤瞳作図『山と生きる』p.166）

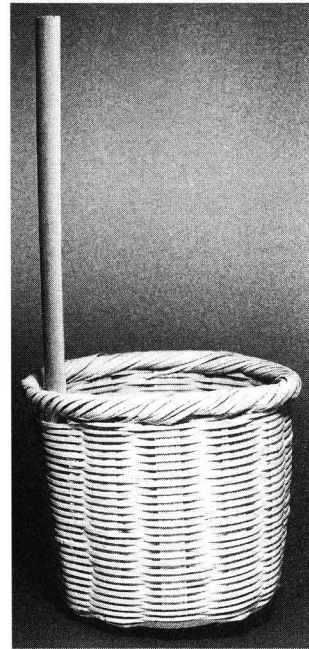


写真30 ござ目（ざる目）組みの「味噌こし」（タケ製，現代民俗例）

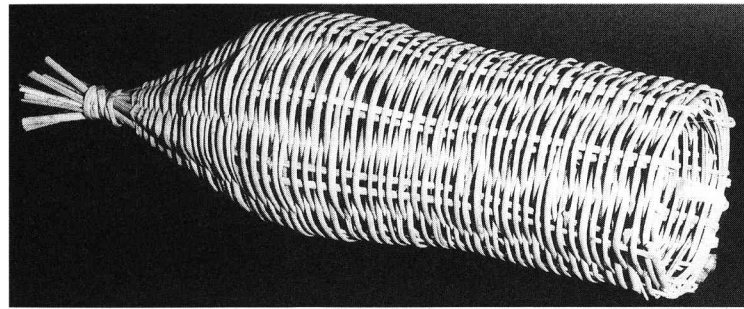


写真31 ござ目（ざる目）組みの「ドジョウどう」（タケ製，現代民俗例：岩手県滝沢村）

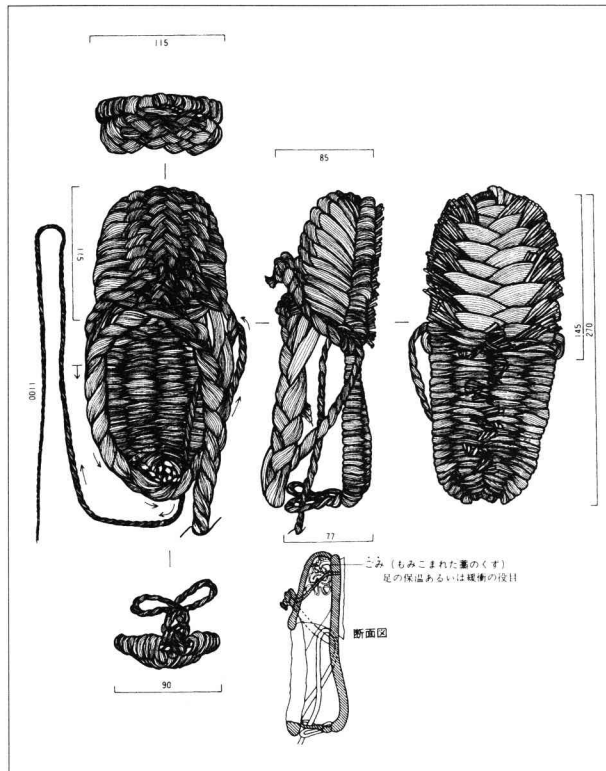


図28 ござ目（ざる目）に組んだ「つまご」の底（岩泉市太郎作製，名久井芳枝作図『実測図のすすめ』p.115～121）

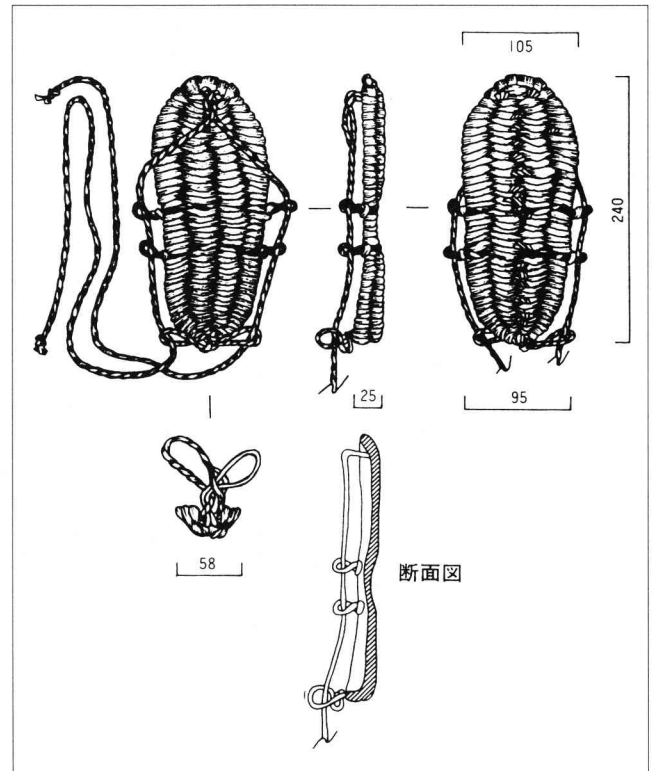


図29 ござ目（ざる目）に組んだ「わらじ」（岩泉市太郎作製，名久井芳枝作図『実測図のすすめ』p.123）

東市瀬遺跡例（拓影3）のそれに共通するものである。

オ 「飛びござ目」組み

竹工芸の世界では「ござ目（ざる目）」組みの横芯の進行の仕方と似てはいるものの，かなり闊達な飛び方，すくい方をする類を総称してこのように呼んでいる。図33の「米上げ笊」は酒造用具の一つだが，網代に組んだ底部からござ目に組む側面までの移行部分にこの「飛びござ目」組みの技法を見ることができる。この例の場合，縦芯材の2本を飛んで2本をすくっているようである。写真35は天秤棒の両端から下げた浅い入れ物だが，この網代に組んだ底部からござ目に組んだ側壁

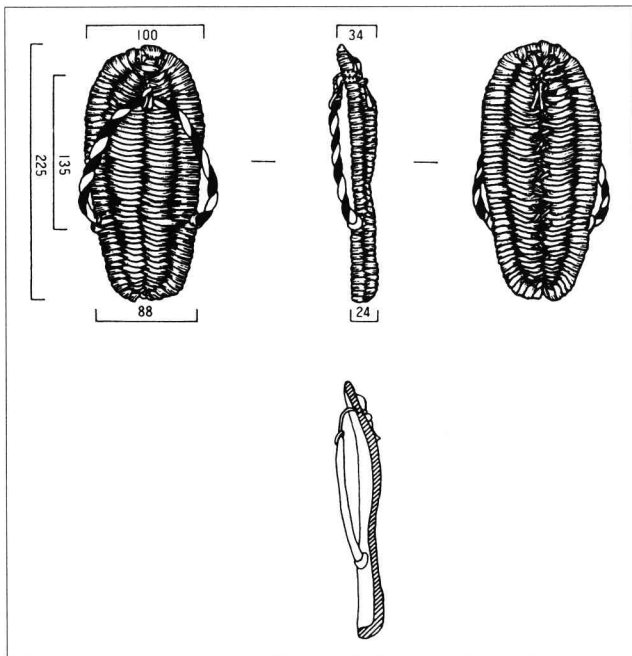


図30 ござ目（ざる目）に組んだ「ぞうり」（岩泉市太郎作製，名久井芳枝作図『実測図のすすめ』p.124～125）

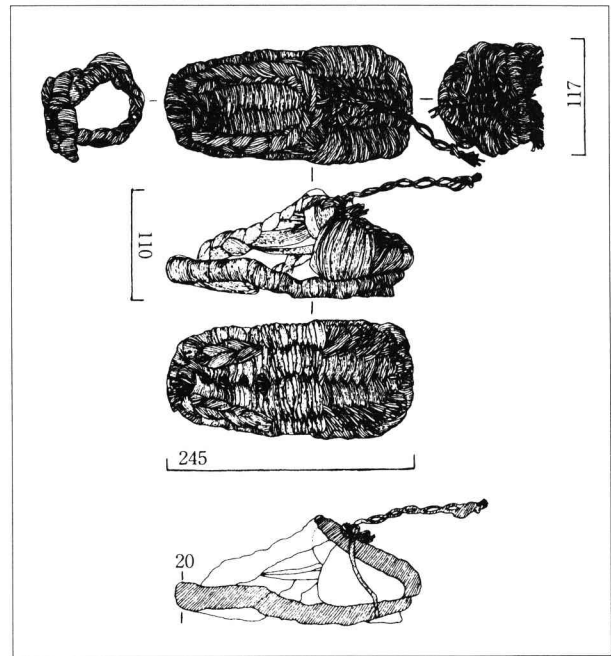


図31 ござ目（ざる目）に組んだ「すんべ」の底（内間木家資料，深見友紀作図『山と生きる』p.136）

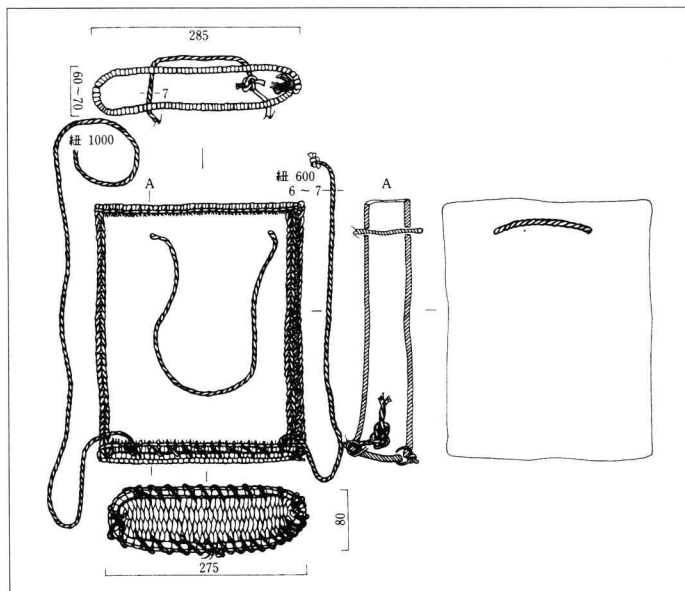


図32 ござ目（ざる目）に組んだ「背中当て」の底（葛巻町やすらぎの家資料館所蔵，名久井芳枝作図）[名久井文明 1993 p.260]



写真32 『三十二番職人歌合絵巻』に描かれた箕（複製使用許可・便利堂）

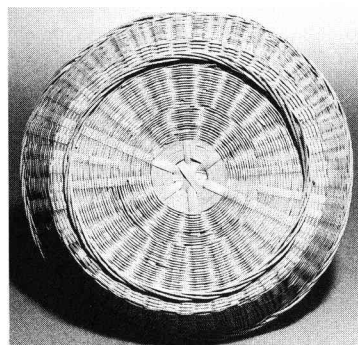


写真33 ござ目（ざる目）組みによる円形平面の形成 菊底の「皿」（タケ製，現代民俗例）

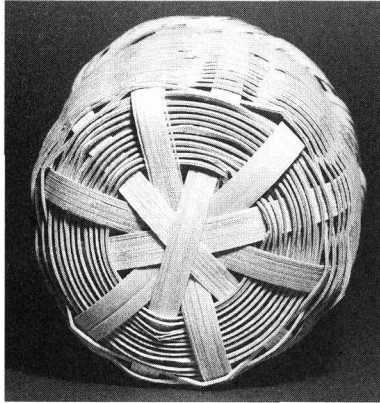


写真34 ござ目(ざる目)組みによる
円形平面の形成 菊底の「味噌こし」
(写真30と同一個体)

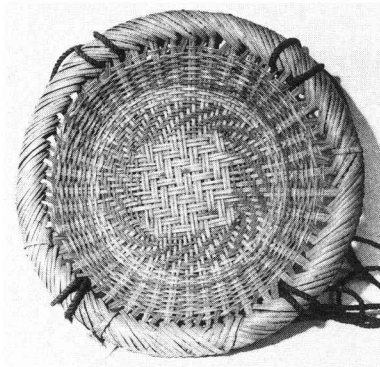


写真35 一部を飛びござ目に組んだ
皿形の入れ物(タケ製, 岩手県農業科
学館撮影許可)

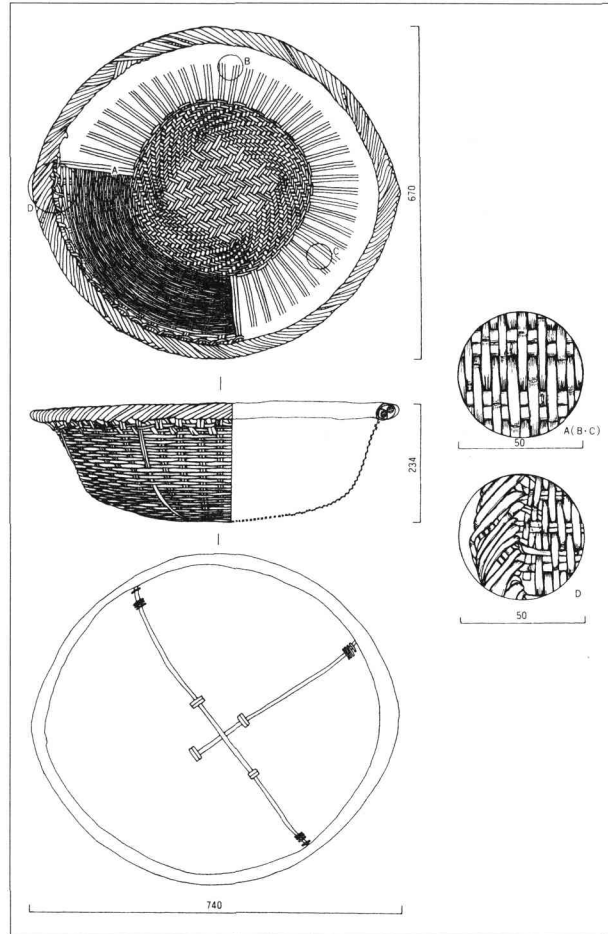


図33 飛びござ目に組んだ「米上げ笊」の底面周辺部(石鳥
谷町教育委員会蔵, 名久井芳枝作図『実測図のすすめ』p. 109
~ 112)

に移行する部分に、やはり「飛びござ目」の組み方が認められる。この両例に見られる技法とまことによく共通しているのが正倉院宝物の花籠である[正倉院事務所 1989]。浅いものとやや深いものがあり、ともに底面は網代底であり側面はござ目組みである。網代の組み方には「二本飛び網代」と「三本飛び網代」があるという[前掲書解説 p.57]。この網代組みからござ目組みに移行する部分が「飛びござ目」の技法で組まれている。これらの写真は『日本原始繊維工芸史 土俗編』にも紹介されている[杉山 1942 図版 35 ならびに第 43 図]。

「飛びござ目」組みの技法はいま挙げたような異なる組織技法の橋渡しをしたばかりではなかった。竹が豊富な九州では「屑入れ」や家庭用の「炭籠」、うどんやそばを温める「振り籠」などをこの「飛びござ目」組みの技法で作ったという。写真 36 の「パン籠」、写真 37 の「手籠」はそんな伝統的な技法で製作された現代民俗例である。

これらの民俗例を形成した「飛びござ目」組みの技法は、縄紋時代の鳥浜貝塚例(写真 7・8)、荒屋敷遺跡例(写真 6)等のそれに通じるものである。

カ 「木目ござ目」組み

「飛びござ目」組みの変形とされる組み方で、縦芯材を飛ぶ横芯材の飛び方を順次増減させることによって表面上に右下がり、あるいは左下がりの模様を浮かび上がらせる組み方である。写真 38 はその組み方によった現代民俗例の花籠である。

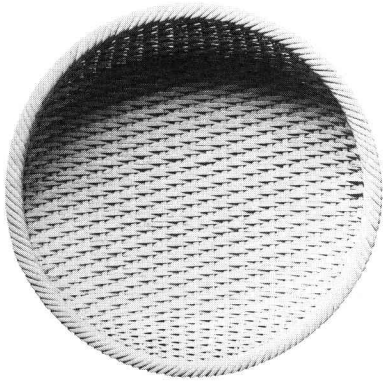


写真36 飛びござ目に組んだ「パン籠」(タケ製, 現代民俗例: 大分県別府市)



写真37 飛びござ目に組んだ「手籠」(タケ製, 現代民俗例: 大分県)

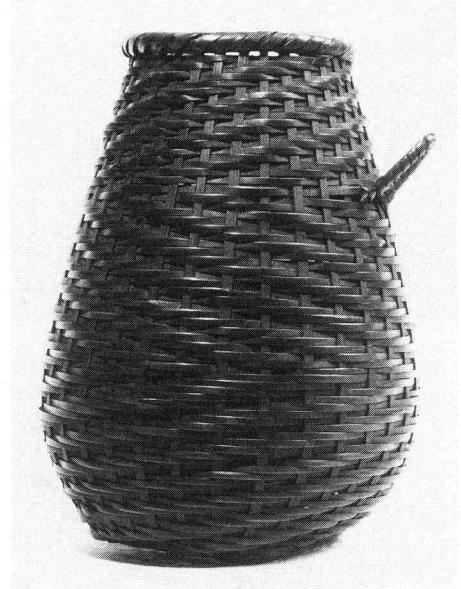


写真38 木目ござ目に組んだ「花籠」(タケ製, 現代民俗例: 大分県別府市)

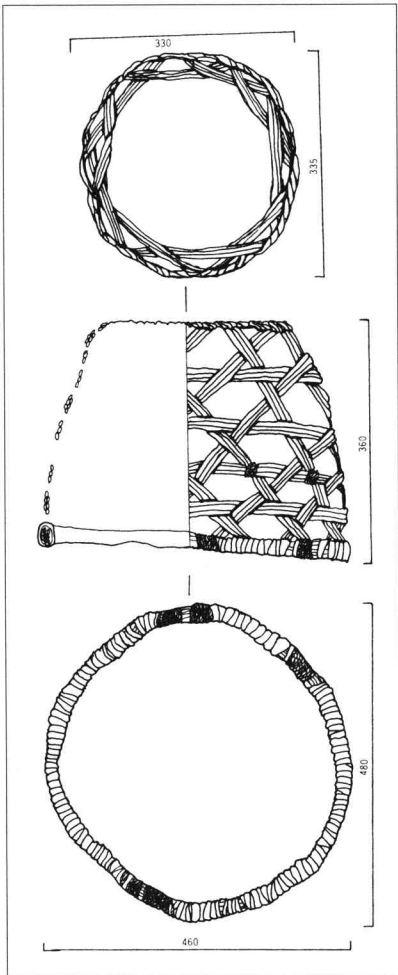


図34 六つ目組みの「豆腐籠」(長内三蔵所蔵, 西村知子作図『若者たちと民具』p.127)

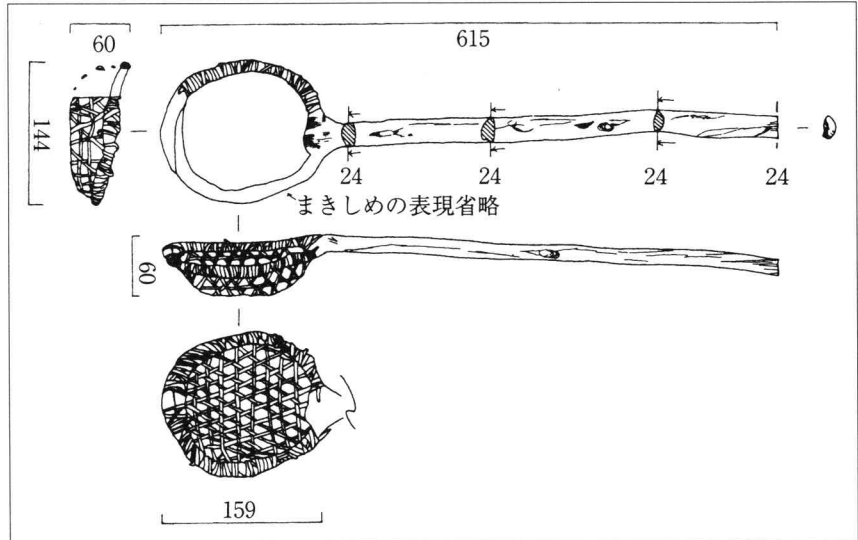


図35 六つ目組みの「えじゃる」(内間木家資料, 森真澄作図『山と生きる』p.167)

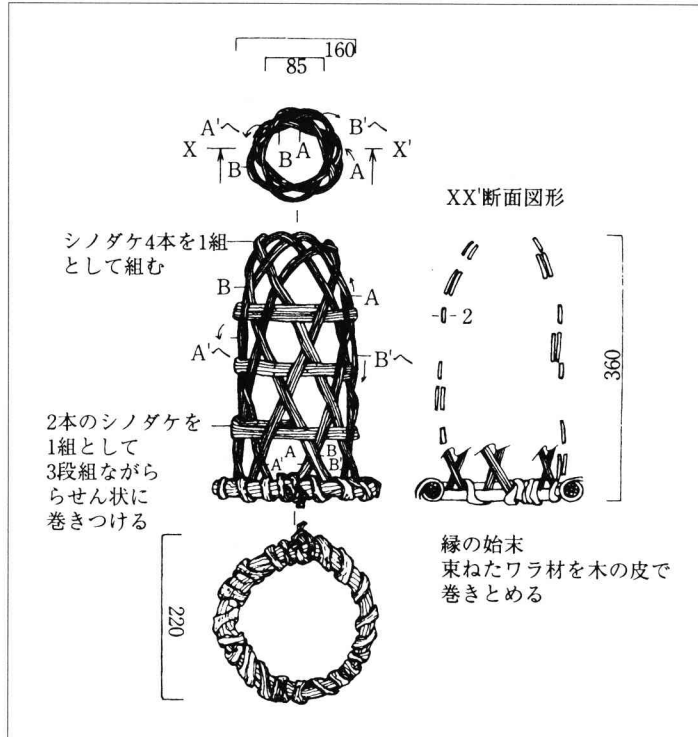


図36 六つ目組みの「糸けし籠」(内間木家資料, 名久井芳枝作図『山と生きる』p.118)

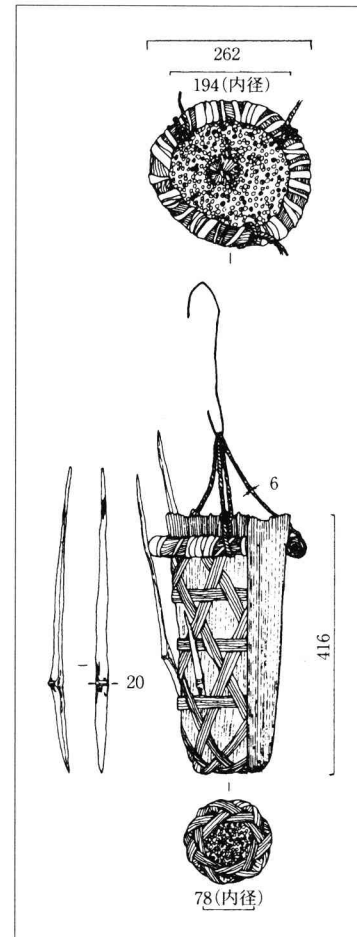


図37 六つ目組みの「べんけい」(内間木家資料, 野澤裕美作図『山と生きる』p.89)

この技法は縄紋時代の荒屋敷遺跡例(写真9)のそれに共通している。

キ 「六つ目」組み

三方向から交差させて組むことで平面上に六角形の目ができる組み方である。図34の「豆腐籠」は豆腐を作る過程で使うもので、この籠に袋をセットし、碾いて煮た豆を入れて搾るのである。図35の「柄じゃる」は煮た餅や饅頭を湯の中からすくい上げるのに使うもので、シノダケを組んで作っている。図36は績んだ糸を巻いた「糸返し籠」で、それとほとんど同様に作って中に藁のようなものを詰め、串に刺した焼き魚をこれに刺し、炉の上に吊して乾燥させるのに使ったのが図37の「べんけい」である。図38・39は洗った食器の水切りに用いた「椀籠」で、写真39は現在では見ることがなくなった「りんご籠」である。後者は相当おおよっぱに作っているが底面には六つ目がよく現れている。籠の中には底面のみならず側面も「六つ目」に組み、補強材を加えたものがある(写真40)。

これらの民俗例を形成した「六つ目」組みの技法は縄紋時代の下宅部遺跡例(写真10)のそれと共通している。

ク 「網代」組み

図40の「いたやかっこべ」はイタヤカエデ材で「二本飛び網代」に組んだ腰籠で、山の幸を採り入れるのに使ったものらしい。図41の「こだす」もクリヤクルミを採って入れる腰籠で、シナノキ

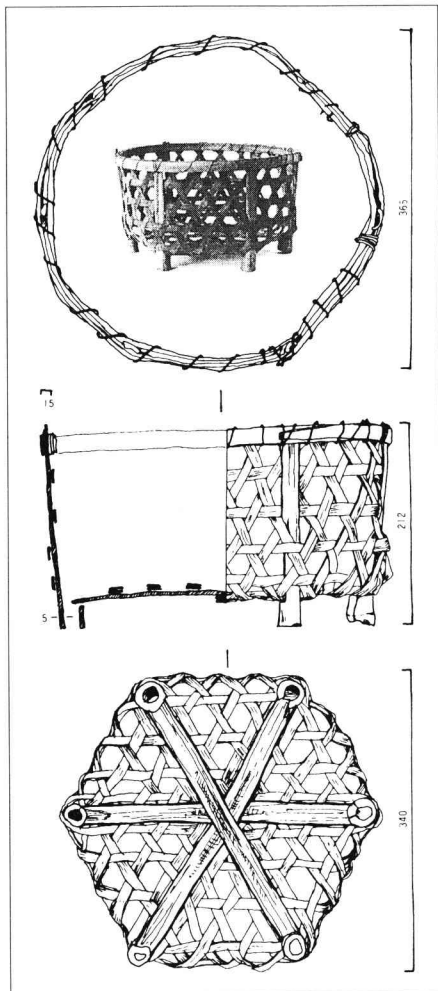


図38 六つ目組みの「椀籠」(長内三蔵所蔵, 日詰恵美子作図『若者たちと民具』p.170)

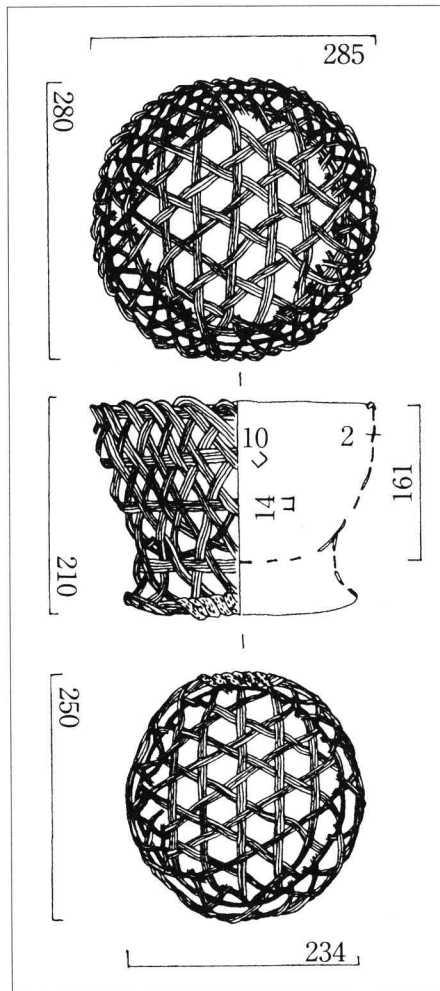


図39 六つ目組みの「椀籠」(内間木家資料, 高塚淑子作図『山と生きる』p.179)

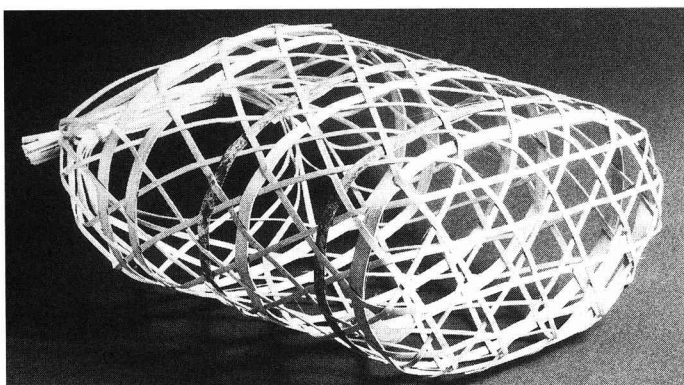


写真39 六つ目に組んだ「りんご籠」(タケ製, 現代民俗例: 岩手県一戸町)

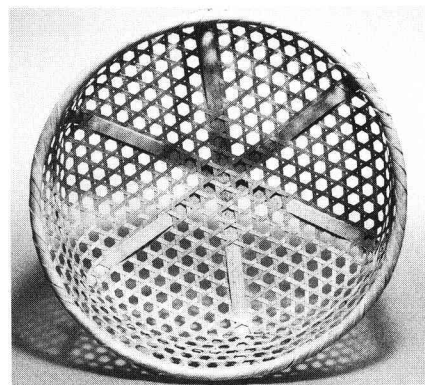


写真40 六つ目に組んだ「籠」(タケ製, 現代民俗例)

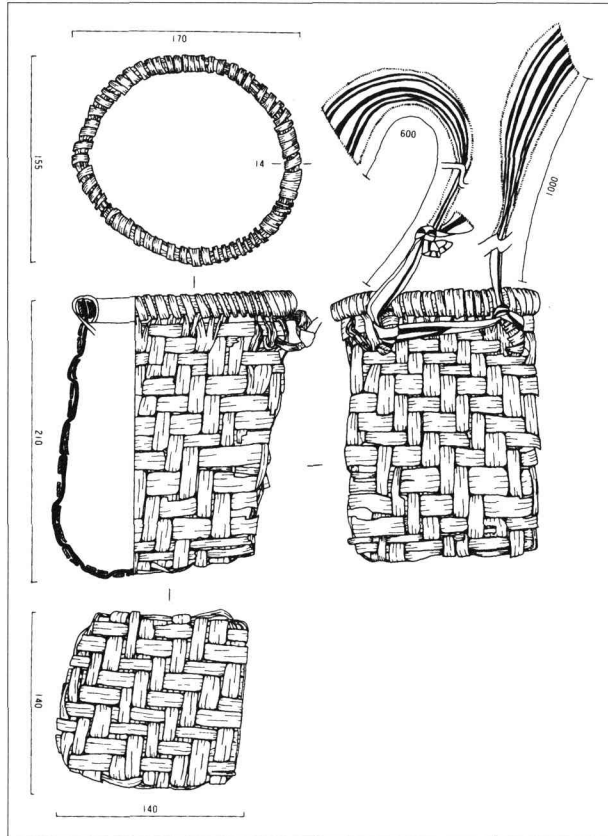


図40 網代組の「いたやかっこべ」（長内三蔵所蔵，大久保さえ作図『若者たちと民具』p.289）

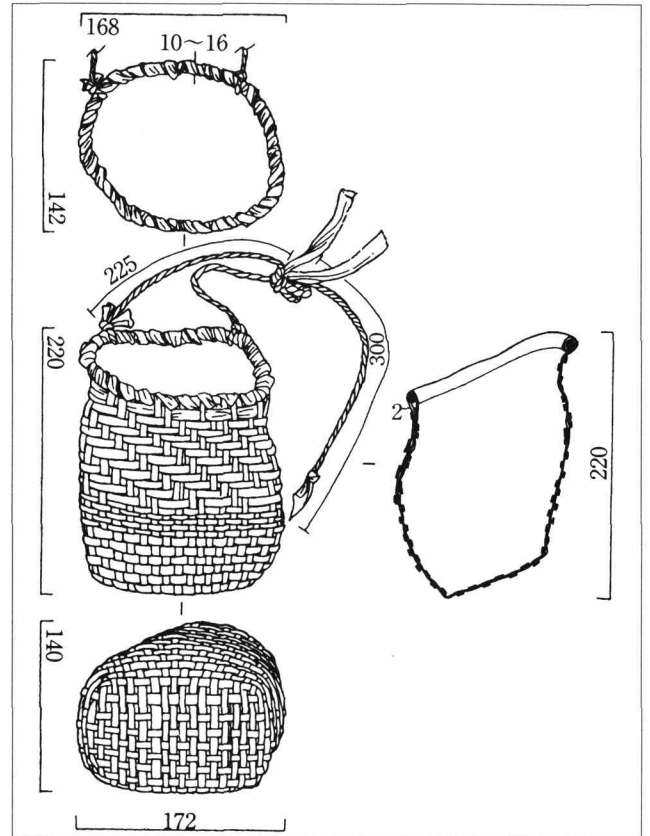


図41 四つ目組みと網代組の「こだす」（内間木家資料，志民香織作図『山と生きる』p.205）

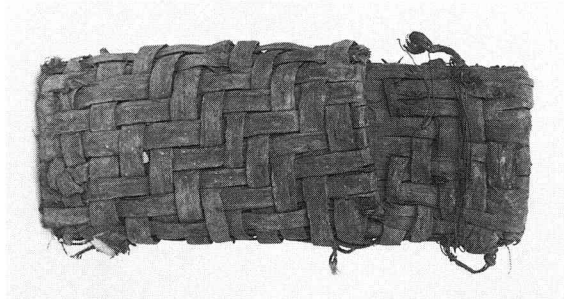


写真41 網代に組んだ「鈍の鞘」（シナノキ樹皮製，二戸市教育委員会所蔵，『北国の樹皮文化』p.76）

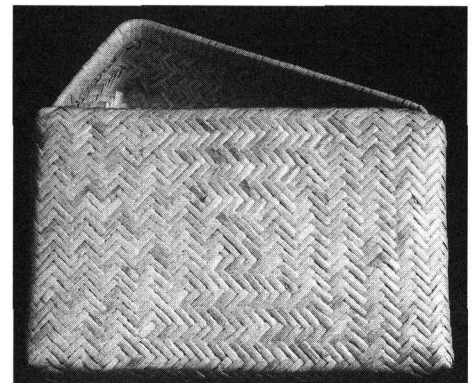


写真42 三本飛び網代組みの小物入れ（タケ製，現代民俗例）

ヤウリハダカエデの樹皮で組んで作ったもの。底部から器体の半ば近くまでは四つ目に組み，それより上部は「二本飛び網代」に組んでいる。写真41はシナノキの樹皮で作った鈍の鞘で，全体が「二本飛び網代」に組まれている。以上の3例はたまたま「二本飛び網代」組みの例であったが「三本飛び網代」組みで製作された民俗例もある（写真42）。また以上の諸例はそれぞれ素材の幅がやや広いものだったが，タケ材を使って細かく組んだ例も多い。例えば図42は畑にマメを播く時に腰に付け，種を取り出しながら植えたというシノダケ製の「たな籠」である。裁縫用具を入れた図43の「針籠」もシノダケ製だが「たな籠」と同様に底は四方網代底である。これに対して長方形に大きく製作された収納，運搬用の「やどい行李」（図44）の底は長柵網代底である。ただし平面形

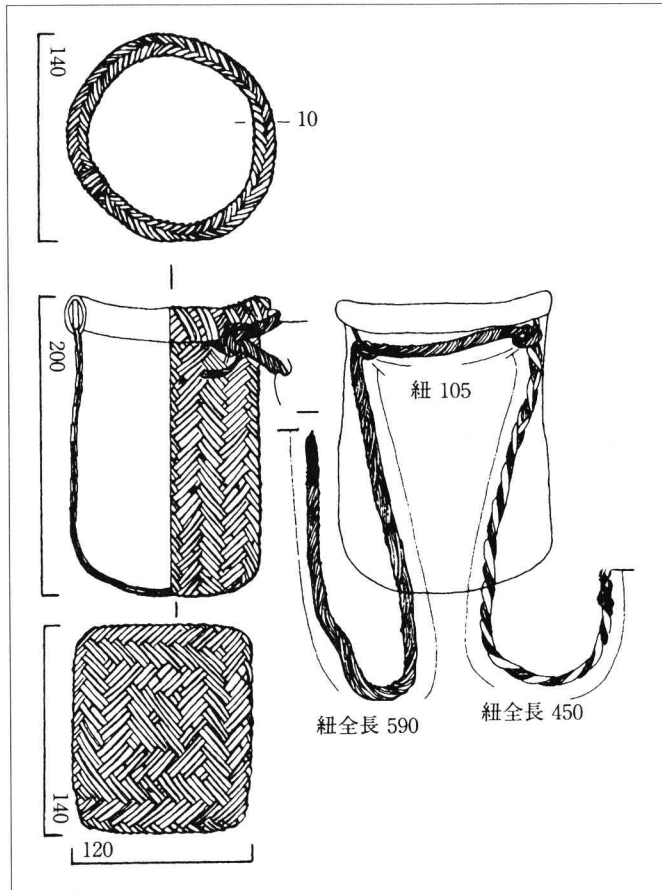


図42 四方網代底の「たな籠」(内間木家資料, 八重壺倫子作図『山と生きる』p.246)

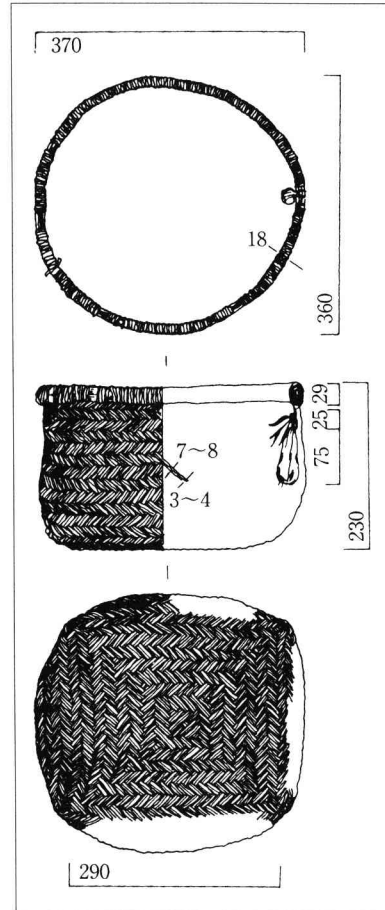


図43 四方網代底の「針籠」(内間木家資料, 柴田憲秀作図『山と生きる』p.127)

が長方形でも四方網代底に製作された「行李」(図45)もある。

以上の網代組みはいずれも目が詰んだかたちで組まれているが、意図的に目を空けて組んだ「透かし網代」組みの例がある。例えば図46は績んだ糸を溜め入れたシノダケ製の「糸め籠」で、図47はアワ、ヒエ等を脱穀した時のごみを除く「せんごく」で、ニガタケ・シノダケ製である。

これらの民俗例を形成した「網代」組みのうち緻密に組んだ技法は縄紋時代の三内丸山遺跡例(写真11)、鳥浜貝塚例(写真12)、桜町遺跡例(図5)、荒屋敷遺跡例(図9, 写真13)のそれと共通する。一部の民俗例のように「透かし網代」組みの技法で製作された例が縄紋時代に存在しているか現在のところでは明確でないが、その気配を窺わせるものはある。

以上に挙げた諸例から知られるように縄紋時代人も近現代人もテープ状に整えた素材を組むことで平面を形成する技術をもっており、その技法には共通するところが多い。両者の技法上の共通性はいれ物を形成する場合も濃密で、まず底部を形成して体部へと移行し口縁部の始末をして終える。縄紋時代人の手法と近現代人のそれとが全く同じであったのは容器形成の手順ばかりではなかった。その間、縦芯材の数を加減することで器形に変化をもたせ、時に横芯材を装飾的に配すことも同じだったし、口縁部を形成する技法にも共通するものがあった。

2 「編む」技術で製作された民俗例

ア 編み芯独走方式による「縄目編み」

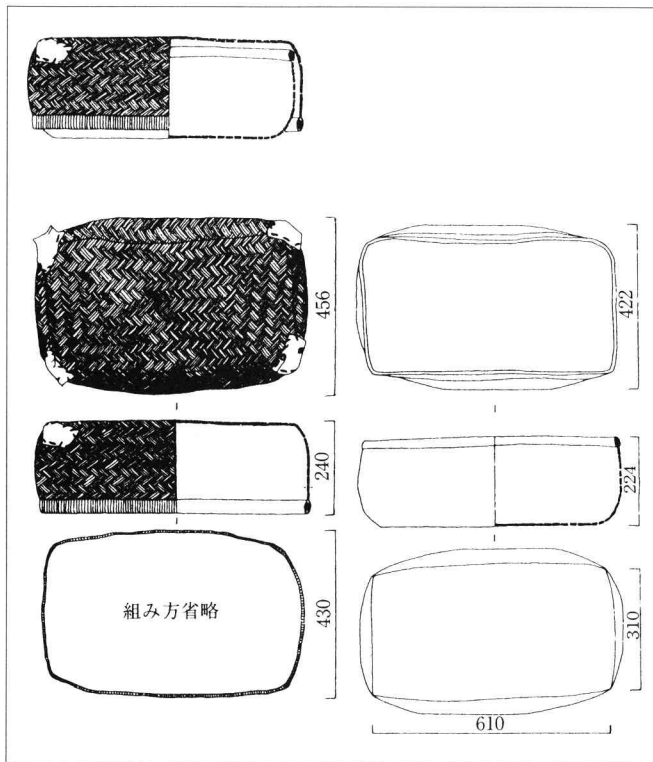


図44 長樹網代底の「やどい行李」(内間木家資料, 三浦悦美作図
作図『山と生きる』p.128)

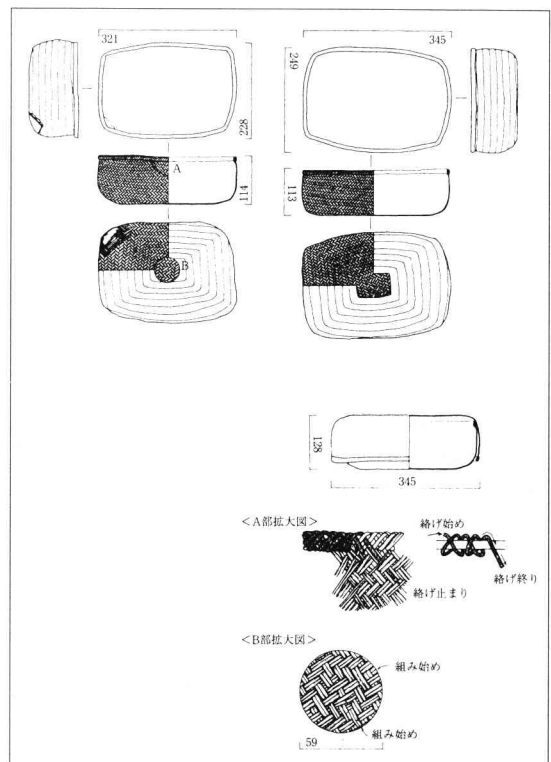


図45 四方網代底の「行李」(内間木家資料, 矢作智恵
子作図『山と生きる』p.96)

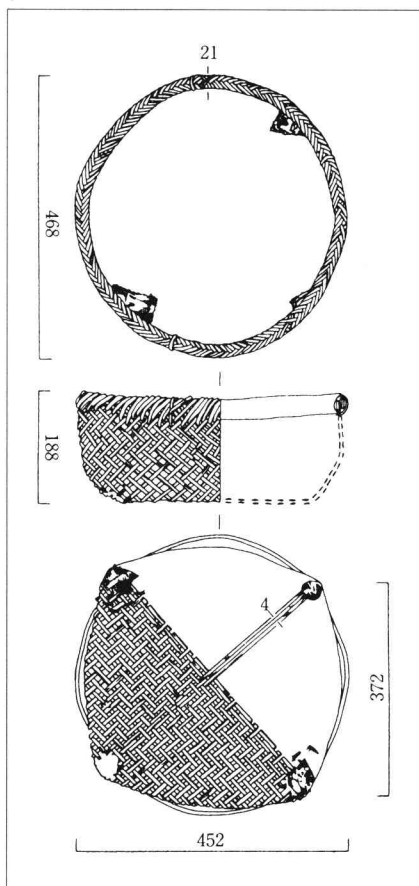


図46 透かし網代組みの「糸め籠」(内間
木家資料, 須川智子作図『山と生きる』
p.115)

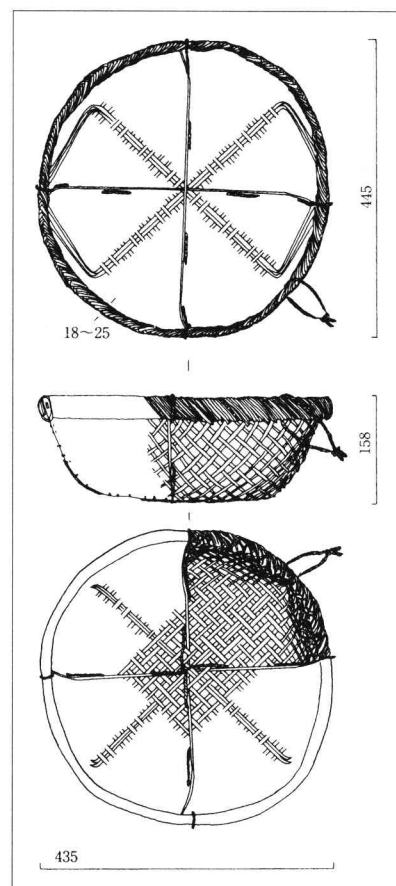


図47 透かし網代組みの「せんごく」
(内間木家資料, 松谷聡子作図『山と生き
る』p.251)

編み方を変えない類

この技法は素材の硬軟に関わらず並列させた素材を編んで連ねることによって平面を形成する場合に用いられた。図48は曲げ物製蒸し器の中に敷かれた「簀の子」で、編み始め、編み終わりの部分は板だがその間は割り竹を編んでいる。蒸気を取り入れるために必要な隙間がこの縄目編みの技法によって作り出されていることが判る。図49は幅広く採った樹皮で側面を作った「栗干し籠」で、アワの穂を入れて焚き火の上方に吊り下げ、乾燥させるために用いられた。底面はニガタケをシナノキの樹皮縄で編んだものだが、この編み方によって形成された隙間が熱気を取り入れるうえで大きな役割を果たすことが判る。図50は秋に拾い集めたナラの実やクリ、トチの実を乾燥させるために用いた「竹とうか」である。乾燥させたいものを載せるために炉の上に設けた棹である「火よせほけ」の上にこれを載せて使った。底面ばかりでなく四方の側面もニガタケをシナノキの樹皮縄で編んで作っている。やはり編むことで生じた素材間の隙間が火気を取り込むのに効いている。図51の「おさあで」はイタヤカエデやクルミの材を縄で編んだもので、この上で豆腐袋を搾るために使われる。この場合、編むことによって各素材間に生じた隙間が、袋から搾り出された液体を通すうえで有効にはたらいている。

以上の民俗例のように硬質の素材を編んだ製作技法は縄紋時代の白座遺跡例（写真22）その他のそれに共通するものである。

図52の「めえだれ」は草刈りに山道に行くなどの際に朝露で身体の前が濡れるのを防ぐために

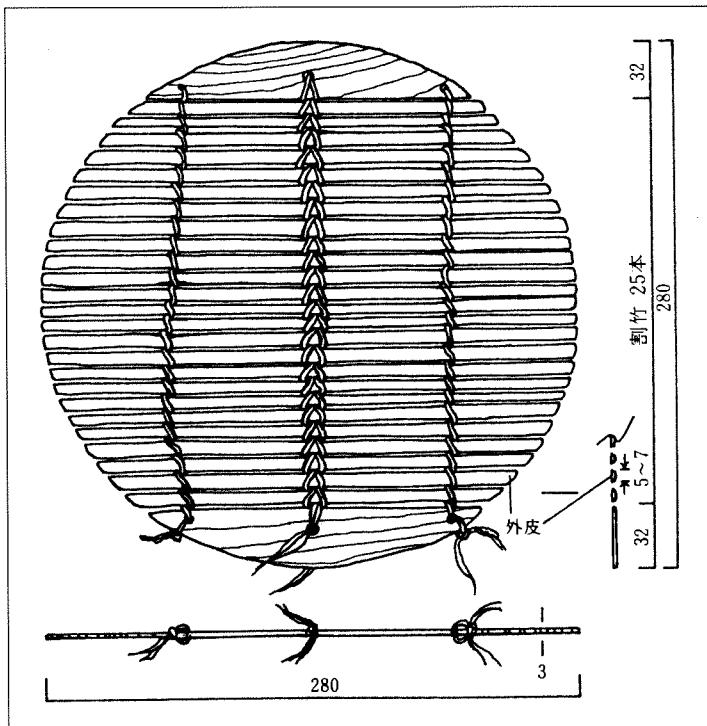


図48 編み芯独走方式による縄目編みの「簀の子」(岩手県立博物館所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1987 p.40]

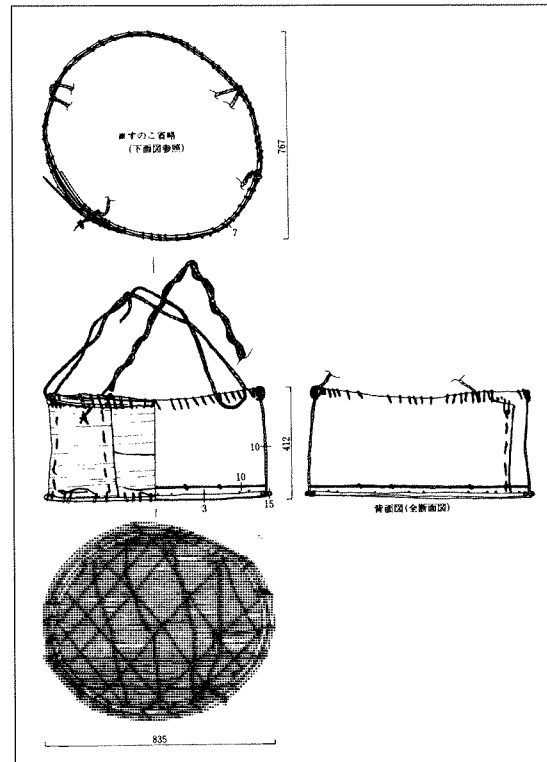


図49 編み芯独走方式による縄目編みの「栗干し籠」の簀の子 (大迫町教育委員会所蔵, 名久井綾作図) [名久井綾 1990]

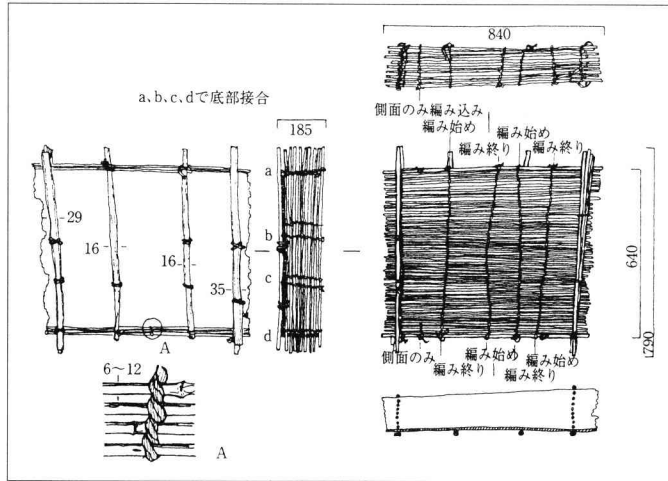


図50 編み芯独走方式による縄目編みの「竹とうか」(内間木家資料, 井沼志保作図『山と生きる』p.210)

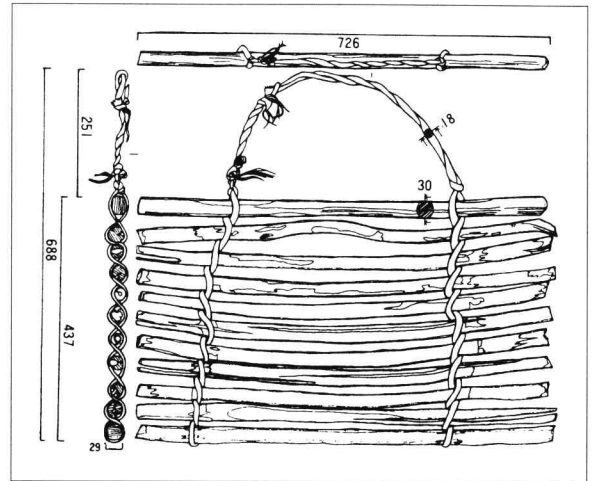


図51 編み芯独走方式による縄目編みの「おさあで」(岩泉家資料, 高橋悦子作図『九十歳岩泉市太郎翁の技術』p.165)

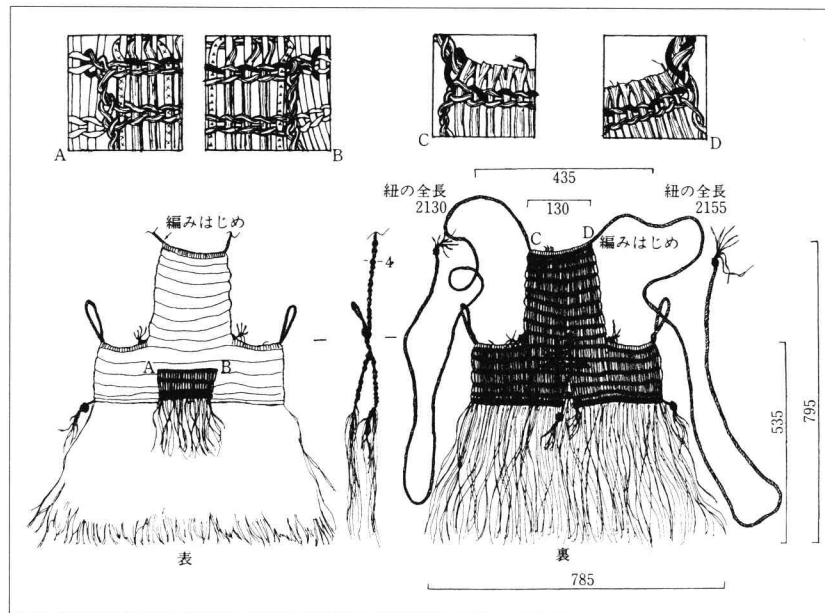


図52 編み芯独走方式による縄目編みの「めえだれ」(葛巻町やすらぎの家資料館所蔵, 矢作智恵子作図) [名久井 1993 p.258]

使ったもので、裂いたシナノキの樹皮を同じ素材になった細縄で編んでいる。図53の「はばき」はヤマブドウの蔓皮から取りだした繊維を、端から端へ行きつ戻りつしながら上から下へと編んだものである。このような軟質の素材を編んで入れ物を作った例は多い。図54は山へ背負って行き山の幸を採り入れた「こだし」で、ヤマブドウの蔓皮を編んだもの。図55の「ねこがき」も同様に用いた背負籠でやはりヤマブドウの蔓皮を編んで作ったものである。

以上の民俗例のように軟質の素材を編んで作る技法は縄紋時代の鳥浜貝塚例(写真14)、真脇遺跡例(図7)、桜町遺跡例(図6・11・15)、坂の下遺跡例(写真18)、龍頭遺跡例(図8)、忍路土場遺跡例(写真15)、是川遺跡例(写真16)、戸平川遺跡例(図12)のそれに共通する。

この縄目編みの技法で製作されたものを描いたかと推測されるものが江戸時代の絵画資料にしばしば見られる。図56は『奥民図彙』に描かれた「農男」の背面だが、彼の肩から肩へ数条の縄が

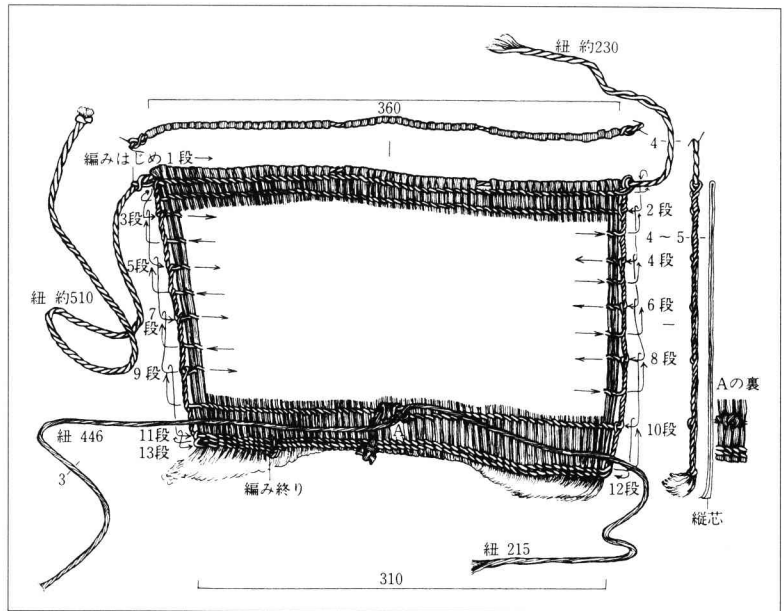


図53 編み芯独走方式による縄目編みの「はばき」(二戸市教育委員会所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.259]

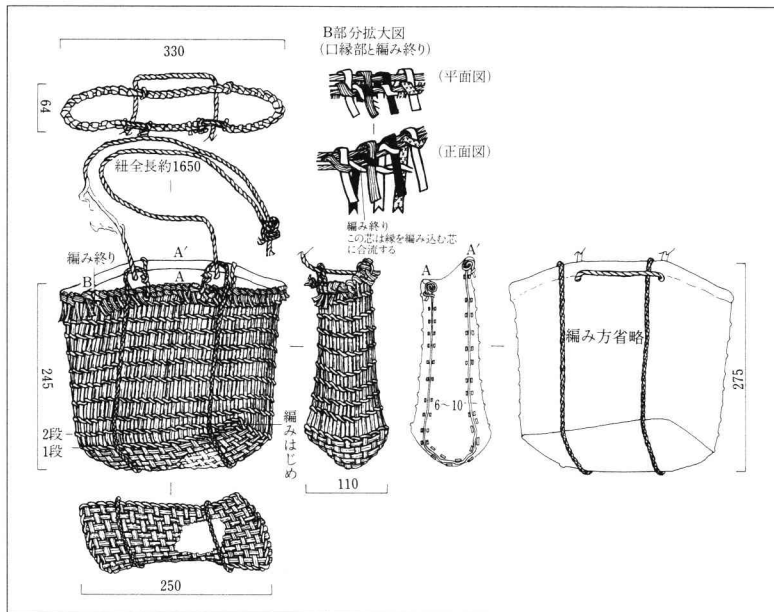


図54 編み芯独走方式による縄目編みの「こだし」(葛巻町やすらぎの家資料館所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.272]

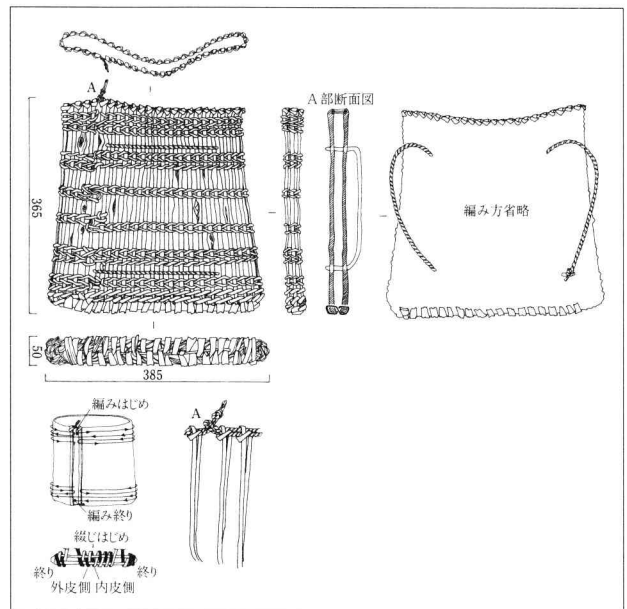


図55 編み芯独走方式による縄目編みの「ねこがき」(長内三蔵所蔵, 佐藤千秋作図『若者たちと民具』 p.229)



図56 絵画資料に見る縄目編み（〔比良野貞彦「奥民図彙」より〕）

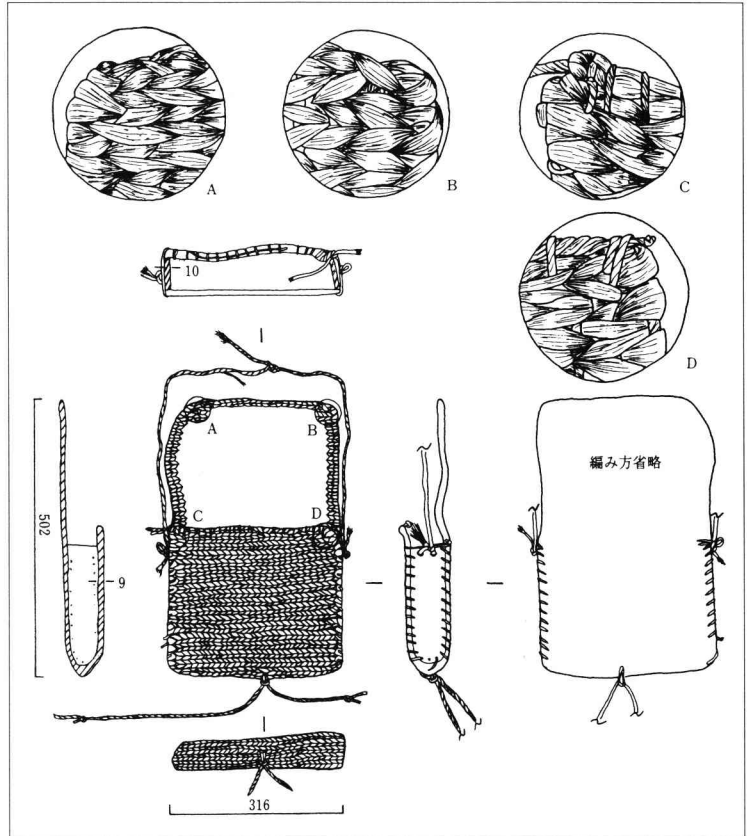


図57 ねこ編みの「蓋付きのいれもの」（長内三蔵所蔵，齊藤明子作図）〔名久井 1994 p.13〕

渡っているのは、彼が着ている「けら蓑」がこの縄目編みの技法で製作されていたからではないだろうか。彼が被る笠，脛に着けた「はばき」に，繊維の方向を横切るように並ぶ点列が描かれているのはやはりこれらが縄目編みの技法で製作されていたことを現したものであろう。

「ねこ編み」

図 57 はシナノキの樹皮を編んで平らに製作したものを折り曲げ，その脇に板を取り付けることで収納用の空間を作りだし，その余りを蓋にしたバッグ形の入れ物である。特徴的なのはその表面で，左右撚りの方向が異なる縄を交互に横に置いたかのような外観となっており，局部的に見ると編み芯の粒は片仮名の「ハ」の字形に配されている。これと似ている例が福島県田島町にある「火薬，玉入れ」である〔田島町民具研究会 1981〕。図 58 は若いクルミの木の樹皮で編んだ「背中当て」で，シナノキの樹皮を編んで平らに製作したものを二つ折りにし，脇と底になる部分を閉じた扁平な入れ物である。山で仕事をする人が鉞や鋸のほか，諸用具，弁当などをこれに入れて背負った。この表面も左右撚りの方向の異なる縄を縦に交互に置いたかのような外観である。写真 43 は同様の製作をした藁製品で，化粧のため赤，白，黒色の布きれを編み込んでいる。

以上の例はこの編み方が平らで目が詰み，加えてやや厚みがあるものを製作するのに向いていることを示している。例えばこの技法で作られた敷物には，脱穀などの作業の際の敷物，蒸したヒエの天日乾燥をする際の敷物，砂金を採取する際に川底に敷いた敷物などが各地にある。図 59 は薪のようなものを背負う時に背中を痛むを防いだ「背中当て」で，ガマの葉にシナノキの樹皮を編み込んでいる。やはり左右撚りの異なる縄を交互に置いたかのような外観となっている。この例のよ

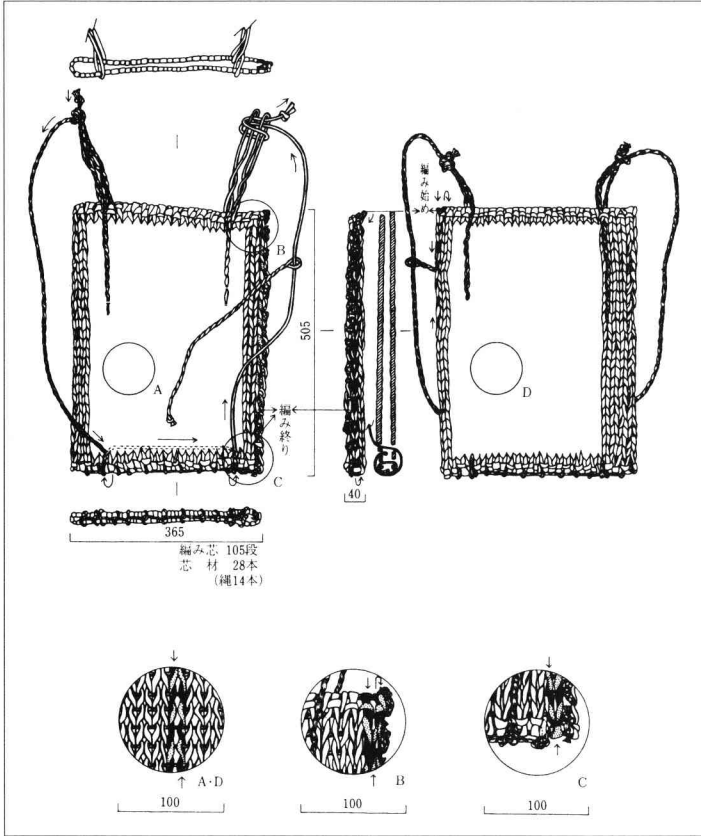


図58 ねこ編みの「背中当て」(岩泉市太郎作製, 名久井芳枝作図『実測図のすすめ』p.126 ~ 128)



写真43 ねこ編みで製作された「背中当て」(藁製, 現代民俗例: 岩手県田老町末前)

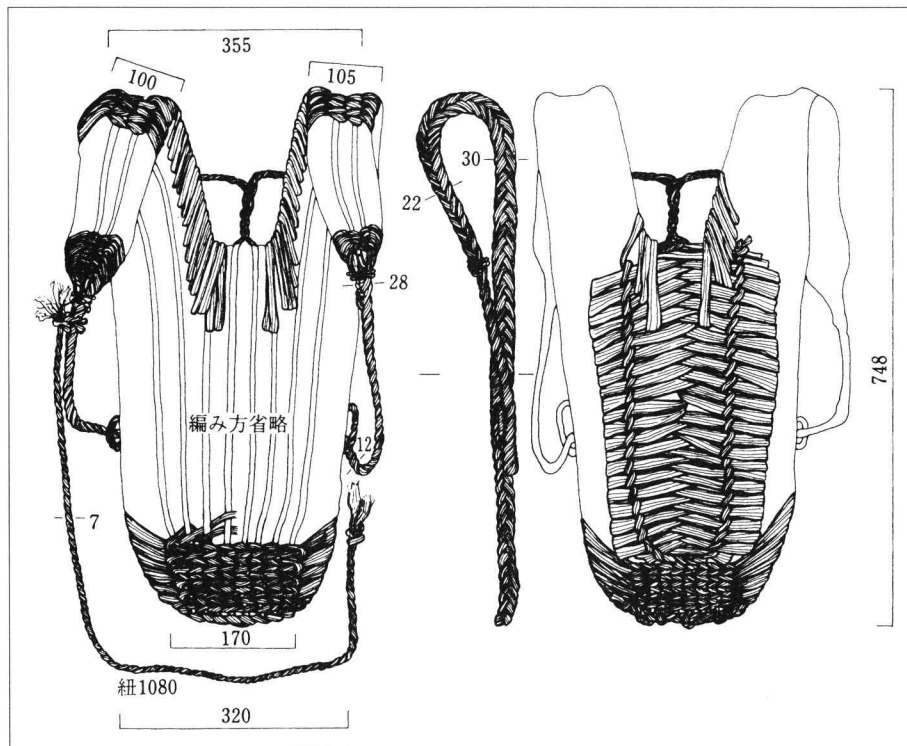


図59 ねこ編みの「背中当て」(照井定子所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1994 p.13]

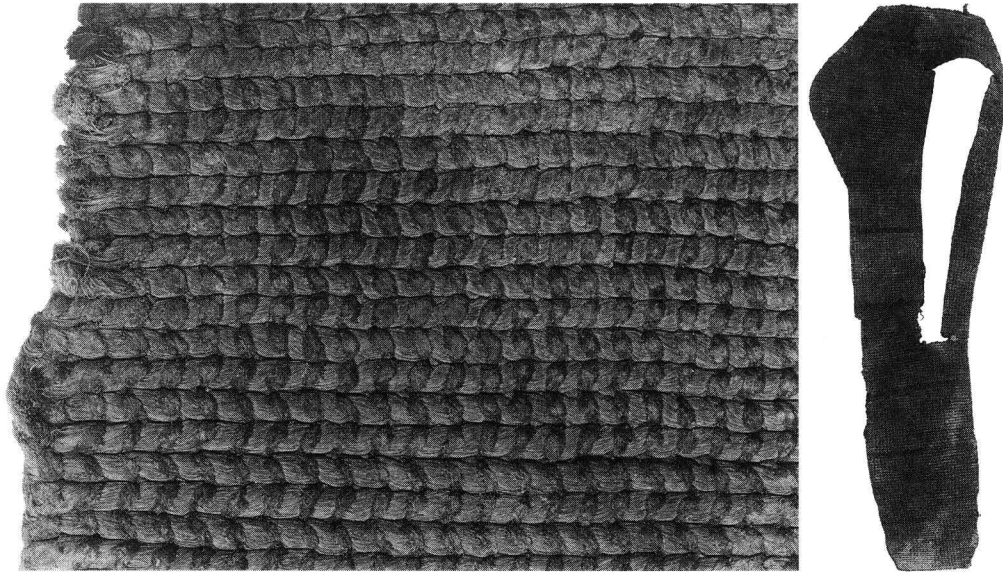


写真44 ねこ編みで製作された「肩当て」とその部分（岩手県農業科学館撮影許可）

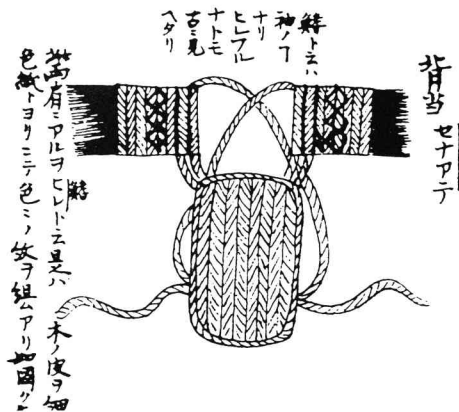


図60 絵画資料に見るねこ編み（比良野貞彦『奥民図彙』より「背当」）

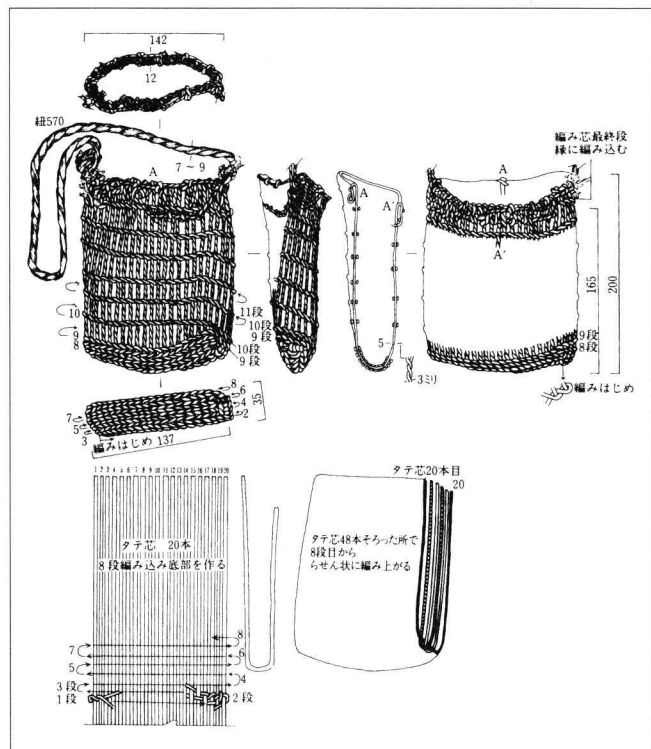


図61 底部がねこ編みの「小物入れ」（長内三蔵所蔵，名久井芳枝作図）[名久井 1993 p.256]

うな背中当てをこの技法で作った例も各地にある。写真 44 は重い荷車を牽いたり重量物を担ぐ時に肩に当てた編み布とその部分拡大写真で，その特徴的な外観から「ねこ編み」によって作られたことが判る。

『奥民図彙』に描かれた「背当」（図 60）は右下がり，左下がりの短線列が交互に現れているから，江戸時代の「ねこ編み」の例であろう。

以上はいずれも平らに製作されたか，もしくはまず平らに製作しそれにさらに手を加えた例で

あったが、最初から入れ物として立体的に製作した例があるらしい。田島町にある「火縄入れ」と屋根鉄のケースは一面だけが図化されているので断言しにくいですが、おそらく最初から入れ物として立体的に製作された「ねこ編み」の例ではないだろうか [田島町民具研究会 1981]。図 61 は図解されているように、やがて側壁の骨格になる 20 本の細縄を並べた後、まず底部になるべき部分を「ねこ編み」にしている。その編み方を続行すれば立体的な「ねこ編み」の入れ物になっただろうが側壁で「縄目編み」に移行し口縁部に至っている。立体的な「ねこ編み」による製品の製作過程を窺わせる一例とってよいだろう。図 56 の農男が左手に提げている入れ物の側面に右下がり、左下がりの短線列が交互に配されているのは、それが「ねこ編み」の技法で製作されたものだったからであろう。

これまで見てきたように「ねこ編み」によった製品の表面はあたかも左右撚りの異なる縄を並べたかのようなものである。しかしこれらの実際の編み方は撚りの異なる二種類の編み芯を併走させたものではない。並列させた縦芯材を編み芯が「縄目編み」の技法で順次取り込みながら進行したもので、その編み芯は常に単独である。編み進んで平面の縁辺に至った後、今度は復路を編むわけだがその際の縦芯材への取り掛かる位置の決め方によって、その外観が左右撚りの異なった縄を並べたように見えることになるのである。したがってその技法はあくまでも「編み芯併走方式」による縄目編みに類する。

これらの民俗例を形成した「ねこ編み」の技法は縄紋時代の押出遺跡例（写真 21）出土の厚手の布地片のそれと共通する。

イ 編み芯併走方式による「縄目編み」

図 62 は炭俵にする「すご」である。両端に加えて中間の 2 箇所でカヤを編み込んで作った。その

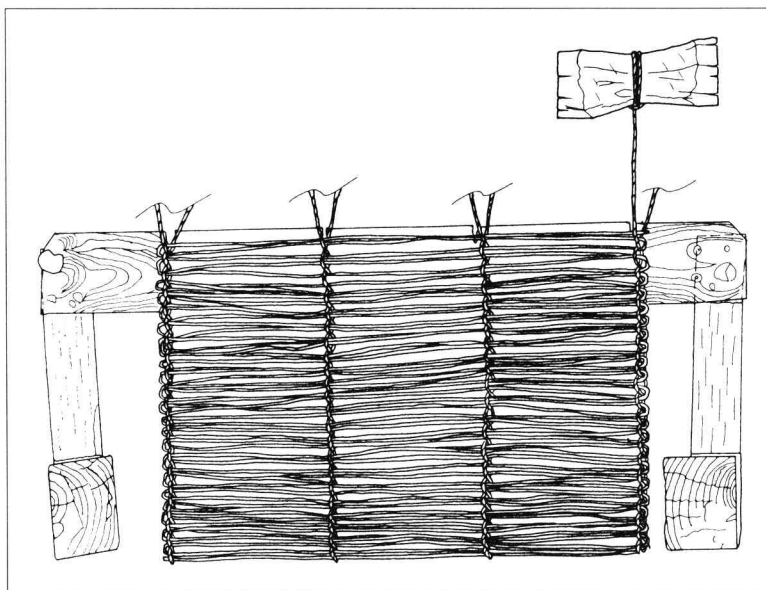


図62 編み芯併走方式による縄目編みの「すご」「すご編み台」「こもずす」(岩泉家資料, 野崎端子作図『九十歳岩泉市太郎翁の技術』p.118)

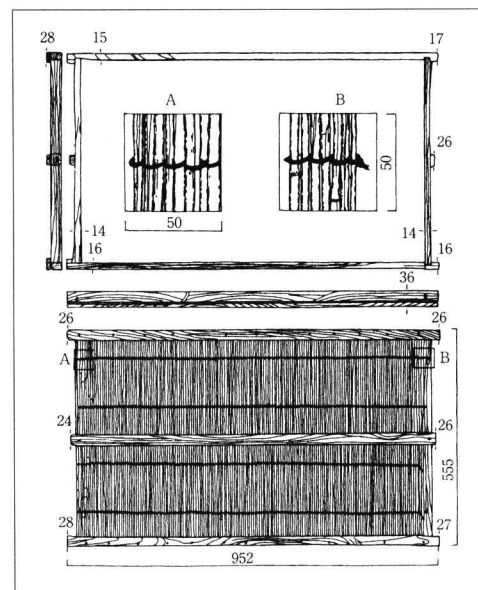


図63 編み芯併走方式による縄目編みの「とうとことうか」(内間木家資料, 津田香織作図『山と生きる』p.130)

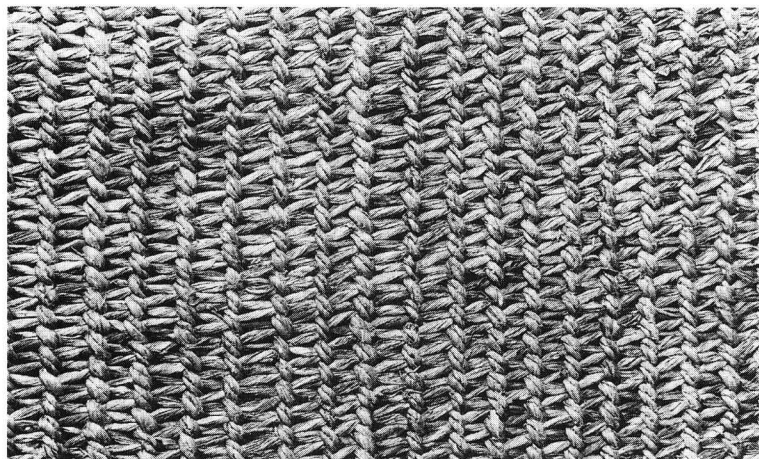


写真45 編み芯併走方式による縄目編みの「袖なし」の部分（十日町市博物館所蔵、『樹皮の文化史』p.218）

際、図のような「すご編み台」と編み縄用の錘である「こもずす」を用いた。ただし、台は用いるが錘を使わずに編むという民俗例もある。図63は蚕を飼う際に使った「とうとことうか」で、やはり台を用いて編んだと推察されるものである。米俵、葦簀、簾、薦などはいずれも編み芯併走方式による「縄目編み」で製作されたのである。

新潟県中魚沼地方や東頸城地方周辺部からこれを編む器具と共に発見され、古老からの聞き取り調査によって製作方法が明らかになった「あんぎん」も、編み台と錘を用いる編み芯併走方式による「縄目編み」によった例である（写真45）[十日町市博物館 1994]。

以上のように、あらかじめ準備された縦芯材の列を編み芯独走の方式による縄目編みの手法で順次編み込んで平面を形成する技法、あるいは縁辺で折り返してから同じ手法で編み続けることによってその表面に「ハ」の字形の編み目が並ぶという特徴を持つ編み方は、縄紋時代にも民俗例にも認められるのである。

(2) 入れ物製作にかかわる諸技法

1 底部を形成する技法

細長い素材を編んだり組んだりして製作する籠のような容器類は、民俗例ではほとんどの場合、底を製作するところから取り掛かる。写真46-(1)(2)はイタヤカエデ材を薄く剥いで取り出した材で作る籠の未製品だが、このようにまず底を作り、その後で側壁の形成に移行し口縁部の始末をして終わるのである。底を形成する技法には次のような種類がある。

ア 網代底

写真47は網代底の竹籠で、写真48はやはり網代底のイタヤカエデ製の入れ物である。

これらの民俗例のように入れ物の底を網代組みの技法で作ることは縄紋時代の三内丸山遺跡例（写真11）、曾畑貝塚例（図13）、戸平川遺跡例（図10）、荒屋敷遺跡例（図4）等に共通する。

イ 菊底

写真33、写真34は菊底の民俗例である。これが縄紋時代の中屋遺跡例（拓影2）、東市瀬遺跡例

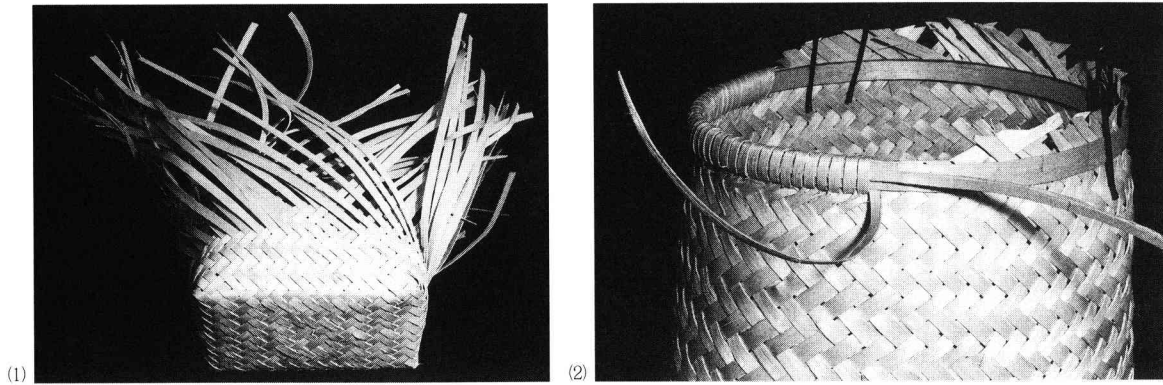


写真46 入れ物の製作手順

(1)底部から体部への移行（イタヤカエデ製，岩手県葛巻町）

(2)体部から口縁部への移行（同前）

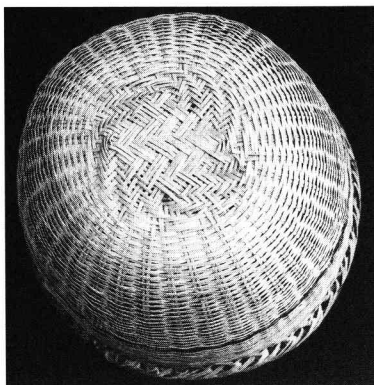


写真47 網代底の籠（タケ製，現代民俗例：岩手県川井村水無辰巳作製）

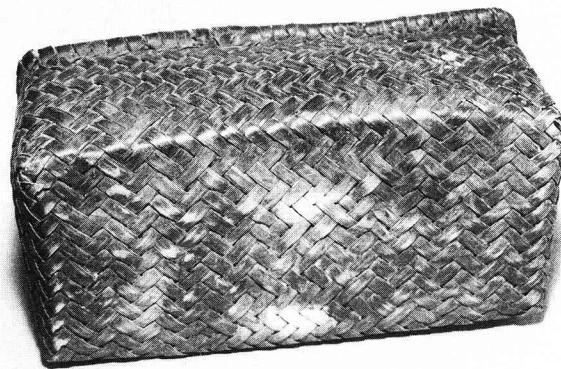


写真48 二本飛び網代組みの「小物入れ」（イタヤカエデ製，岩手県軽米町世増）

（拓影3）の製作技法に共通することはすでにふれたとおりである。

ウ 縄目編み底

民俗例で円筒状の入れ物の底部を作る際に、底の中央部で交差する芯材を縄目編みの技法で編み、中心から少しずつ離れながら渦巻を遡るように編み進む編み方がある。図64の「縄こだす」はその一例で、ナラやトチの実、クリ、茸を採る時に腰に付ける、シナノキの樹皮縄を材料として編んで作った入れ物である。写真49は同様に用いられたと思われる「こだし」で、ヤマブドウの蔓皮から取り出した繊維をなめて作った細縄を編んだものである。

これらの民俗例のうち交差する部分を縄目編みの技法で巻くように編み進みながら、次第に離れていくという進行の仕方に着目すれば、それは縄紋時代の白座遺跡例（写真20）、桜町遺跡例（図11）、坂の下遺跡例（写真18）、中屋遺跡例（拓影2）等に共通している。

以上の例から、縄紋時代人も近現代人も、交差させて置いた軸芯を順次取り込みながら組織していくことで円形の平面を形成する技法をもつことが共通していたといえることができる。

2 縦芯材を増やす技法

図65の入れ物の場合、底部を形成するために交差させた樹皮素材は最初4枚に過ぎなかった。それが器体部の形成にあたって多数の縦芯材が必要となるので細かく裂くことによって本数を増やした例である。図17-(2)例でも同様の技法が見受けられたところである。このように縦芯材を分割

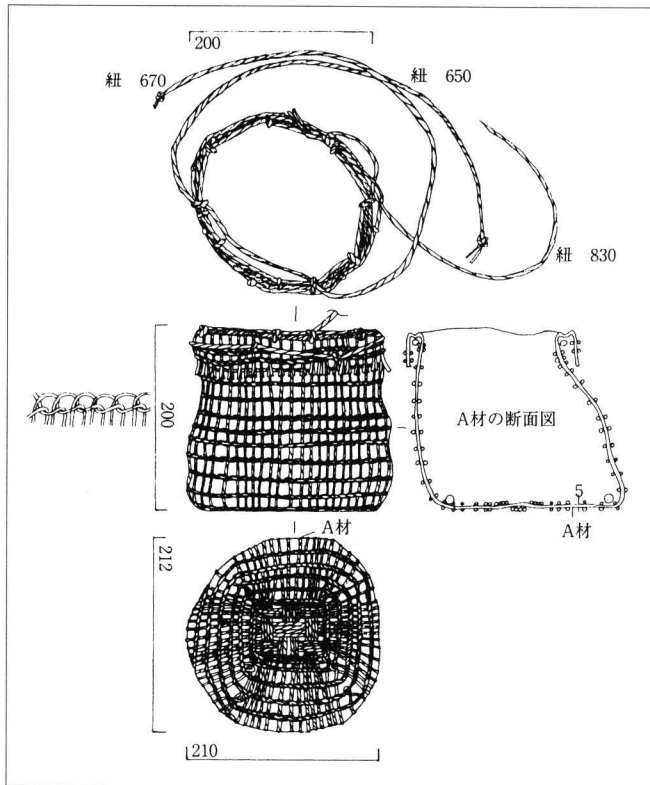


図64 縄目編み底の「縄こだし」(内間木家資料, 小田嶋玲子作図 『山と生きる』 p.205)



写真49 底を縄目編みで編んだ「縄こだし」(ヤマブドウ蔓皮製, 岩手県立博物館所蔵, 『北国の樹皮文化』 p.55)

して増やすことで平面形成の拠り所とするものの他, 新たな芯材を追加することで形成し易くしている民俗例も珍しくない(写真 33)。そのように縦芯材を増減させることは, 時に器形に変化をもたせるための手段でもあった。例えば写真 50 の「びく」は底部から器体部上部までなめらかな円みを帯びさせて形成した後, 肩部から著しくすぼまって頸部に至り, 再び開いて口縁部を造り出している。このような器形の開閉には縦芯材の数を増減することが不可欠である。ヤマブドウの蔓皮で製作されたこの例の場合は首に向かってすぼまる部分に複数の縦芯材を 1 本に寄せて編み込むことによってその数を減じている。

これらの民俗例に見られるように縦芯材の数を加減することによって平面形成の拠り所にした器形に変化をもたせる技法は, 縄紋時代の鳥浜貝塚例(写真 7), 曾畑貝塚例(図 14), 坂の下遺跡例(写真 11), 戸平川遺跡例(図 12), 荒屋敷遺跡例(図 9)などにも認められたところであった。

3 口縁部の処理方法

ア 縦芯材折り込み縁(仮称)

図 66 はかなり厚いシナノキの樹皮を使って四つ目組みにした物入れだが, 口縁部を始末するにあたって側壁を形成し終わった縦芯材を折り曲げている。その時各縦芯材は最上段の横芯材の表裏に交互に立っているから, 最上段の横芯材をくるむようにして器体の内外に折り込むことになったわけである。折り曲げ終わった各縦芯材の末端は, 上から 3 段目の横芯材の中に差し込まれた。図 67 はヤマブドウの蔓皮で製作された「漆かんな入れ」だが, この口縁部も同様に始末されている。図 17, 写真 27 も同様である。

これらの民俗例に見られた口縁部の形成技法は縄紋時代の三内丸山遺跡例(写真 24)のそれに共

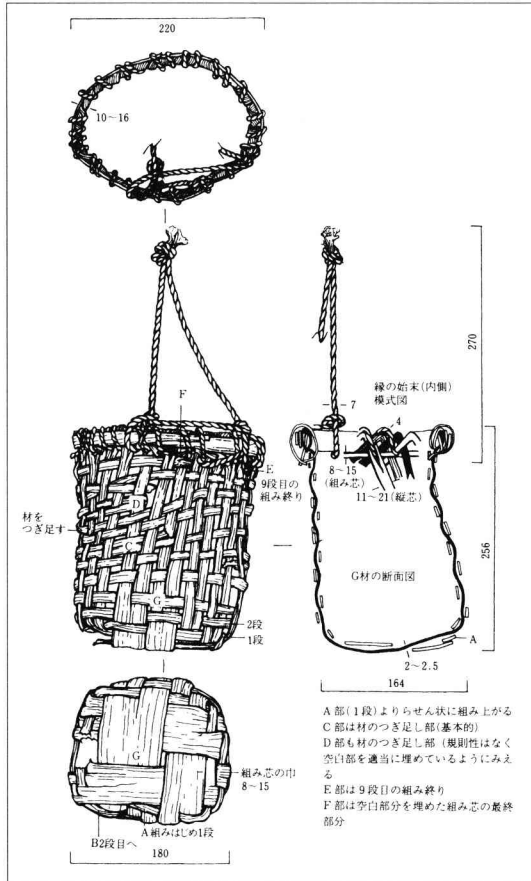


図65 縦芯材を増やしている「腰籠」(照井定子所蔵、名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.265]



写真50 縦芯材の数の増減によって器形を決めた「びく」(ヤマブドウの蔓皮製、田沢湖町教育委員会所蔵、『北国の樹皮文化』p.14)

通している。

イ 縄目返し縁

図 68 は山仕事に使う諸道具を入れて背負ったヤマブドウの蔓皮製の籠で、表面の下半がポケット状に作られている稀な例である。この口縁部の始末の仕方を見ると側壁を形成し終わった縦芯材は全て外側に曲げられ縄目編みの手法で留められている。図 17-(2)の「こだし」、図 54 の「こだし」の口縁部も同様に留めている。竹工芸等の呼称を参考にしてこのように呼んでおきたい。

現在のところではこの民俗例と同じ留め方をした縄紋時代例は見あたらないが、口縁部の直下を縄目編みで固定する点に着目すると下宅部遺跡例、荒屋敷遺跡例(図 4)の製作技法に通じるところがある。

ウ 巻き縁

図 69 の「とな籠」は屋内の厩で牛を飼う冬期間、飼料を煮るために、溜めてある所から「とな釜」という大釜まで運ぶのに使った入れ物である。ニガタケで製作した籠の口縁部はサルナシ材で巻かれている。写真 51・52 は共にヤマブドウの蔓皮で作られた「こだし」で、両例とも口縁部は巻かれている。この他これまで見た例では図 22・23・24・25・34・36・37・40・41・43・44 等が巻き縁の例である。

これらは縄紋時代の曾畑貝塚例(図 14)、桜町遺跡例(図 15)、寿能泥炭層遺跡例(図 16)等の製作技法に共通している。

エ 返し巻き縁

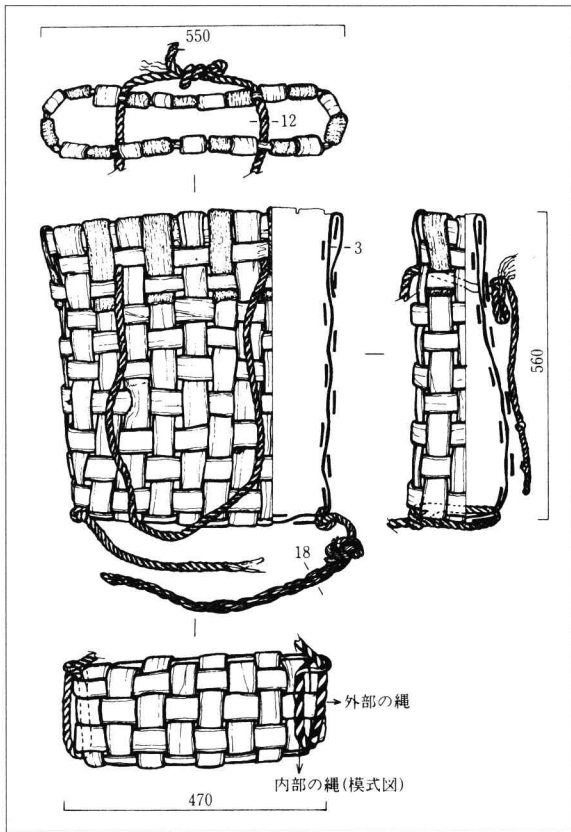


図66 縦芯材を表裏に折り曲げる口縁部処理 (岩手県立博物館所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.262]

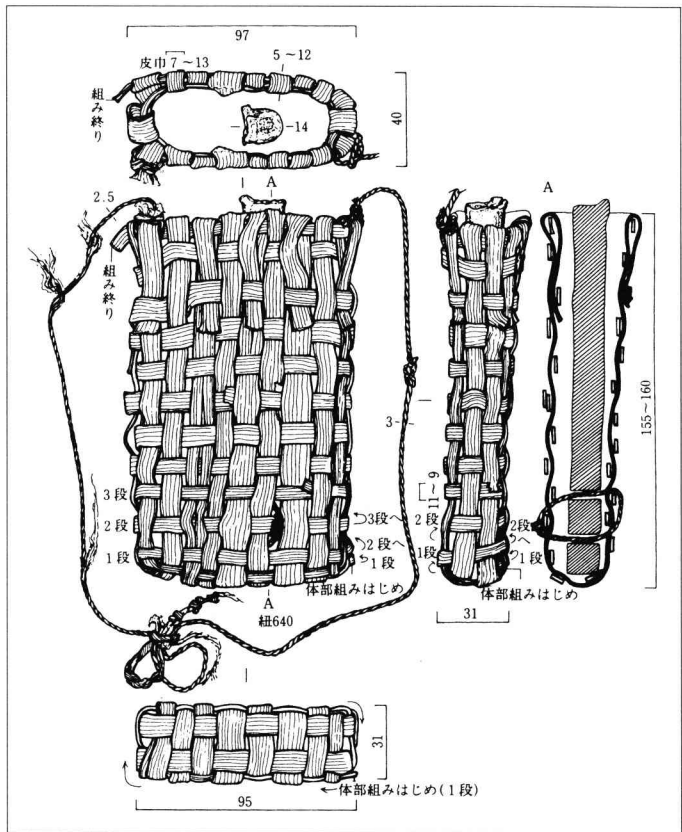


図67 縦芯材を表裏に折り曲げる口縁部処理 (安代町教育委員会所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1993 p.266]

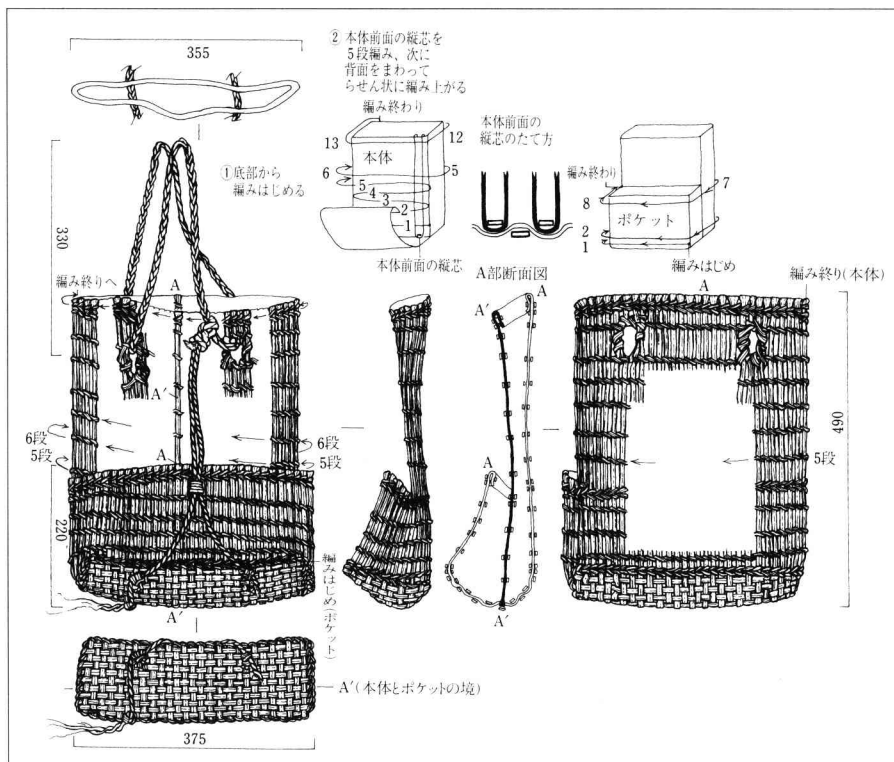


図68 縄目返し縁の「こだし」(階上町教育委員会所蔵, 名久井芳枝作図) [名久井 1994 p.7]

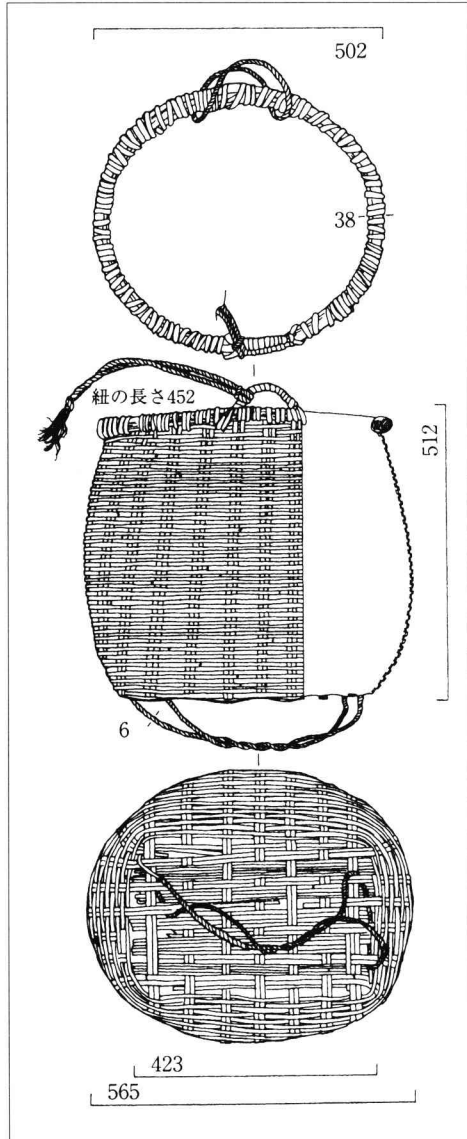


図69 巻き縁の「とな籠」(内間木家資料, 明戸真弓美作図『山と生きる』p.264)



写真51 巻き縁の「こだし」(ヤマブドウの蔓皮製, 千畑町教育委員会蔵, 『北国の樹皮文化』p.55)

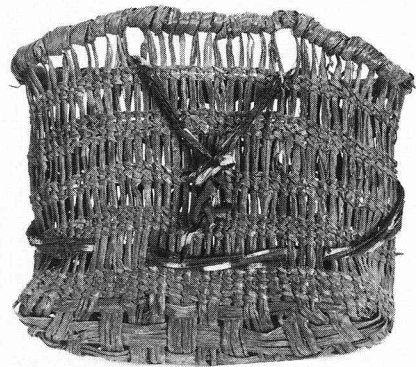


写真52 巻き縁の「こだし」(ヤマブドウの蔓皮製, 田中忠三郎氏蔵, 『北国の樹皮文化』p.51)



写真53 返し巻き縁の「こだし」(ヤマブドウの蔓皮製, 田中忠三郎氏蔵, 『北国の樹皮文化』p.51)

写真53の「こだし」はヤマブドウの蔓皮で製作された背負い籠だが、この口縁部は最初右下がりに巻かれ、その上に重ねて左下がりに巻かれている。

この技法は縄紋時代の下宅部遺跡例に共通するものがある。

以上のように入れ物の口縁部の始末の仕方を見ると、縦芯材折り込み縁、縄目返し縁、巻き縁、返し巻き等が縄紋時代例にも民俗例にも存在していることが判る。

(3)編組技法の伝承と展開

いまここで取り上げた諸資料はその材料からいうと木製品、樹皮製品、竹製品、藁製品である。それらを構成している各種技法については、たまたま私が暮らす東北地方の例を中心として目にする機会があったものを挙げただけのことで、全国的にはまだまだ多くの技法や様々な形態の製品があるに違いない。例えば宮崎県椎葉村で用いられている竹製のある背負い籠は実に堅牢である。孟宗竹の特性を巧みに利用した技法によっているのであろう。これに対して私が暮らす岩手県辺りではそれほど堅固な籠はなく、シノダケを用いて作る入れ物で十分耐えうる用途に無理なく使っている。逆に東北地方北部では珍しくないヤマブドウの蔓の皮を用いて作る籠類は九州には存在しない。むかし椎葉村ではやや太いタケの節を抜き、管状となったそれを煮て軟化させたのを開いて板状に変え、それをたわめて曲げ物の容器を作った。そんな技法は太いタケが自生しない東北地方には有るはずがなかった。曲げ物といえば東北地方では針葉樹を使うが九州にはネムノキの材で作った曲げ物がある。要するに所変われば品変わるといふわけである。これらのような物質文化の違いが植生の違いに由来していることは言うまでもない。

これまでに引用した各民俗例の大部分は列島の北から南まで、古くからそれぞれの土地の植生を背景として生み出されてきたそれぞれの地域の文化の所産である。それらはどの土地にあっても日常の生活を営むうえで必要とされ、それゆえにむかしからその製法や使用方法が受け継がれてきた実用品の数々であった。正倉院宝物である花籠の素材構成方法と、民俗例の籠、例えば米上げ笊(図33)、網代底の皿形の入れ物(写真35)や籠(写真47)のそれが酷似していることは、編組技法が1200年を超えても変わっていない例として非常に興味深い。実用的編組品の変化し難い側面を窺わせる一例である。

これまでみてきた民俗例に関わる各種技法について縄紋時代例と共通することを指摘したわけだが、総じて見ると両者に窺われる共通性はきわめて濃厚であるといわなければならない。悠久の時の流れを隔ててなお両者に多くの要素が共通しているのはどのような背景に基づくものであろうか。

③……………民俗的古式技法の存在とその意味

(1)編組技法伝承の背景

1 縄紋時代編組技法の伝承と展開

植物性素材を用いて作る入れ物や敷物の製作に欠かすことができない編組技法について縄紋時代の遺物を一望すると、例えば九州地方ではそれらは早期、前期、中期、後期の各時期から発見されている。曾畑貝塚の編み物を伴う第45号貯蔵穴の時代は、埋土の観察から後期か晩期ではないかと報告されている[熊本県教育委員会 1988]から晩期にも編み物が存在した可能性は大きいと見てよいのではないだろうか。そうしてみると九州では早期から晩期まで、編組の技法は絶えることなく受け継がれたように思われる。しかしそれぞれの検出例が所属する時代について、もしもこれを、きわめて連続的な推移を知ることができる土器型式編年と対比させたなら、空白の時期が存在する

ことを確認せざるを得ないことになるだろう。問題はその空白についての解釈である。

遺物はそれぞれの時代の物質文化の痕跡だが、では遺物が無い場合は物質文化の存在を語らないのであろうか。縄紋時代の物質文化の存在を証するものとして実在する遺物のみはその役割を与えようとすれば、各検出例の合間合間に技術伝承や伝播の途絶があったことを想定しなければならなくなる。編組技法の途絶と再興がこの列島内でしばしば繰り返されたと考えるのは果たして合理的であろうか。

地理的範囲についても同様のことが言える。例えば編組技法が存在したことを示す青森県の縄紋時代晩期の一地方の遺跡に目を向けてみよう。有名な亀ヶ岡遺跡（木造町）を初めとして、福泉遺跡（五所川原市）、土井1号遺跡（板柳町）、石郷遺跡（平賀町）、八幡崎遺跡（尾上町）などの遺跡からは藍胎漆器あるいは櫛の破片など、編組技法なくしては製作できない遺物が発見されている。津軽地方と呼ばれる限定された地方からこのようになり濃密な状態で検出されるという事実は、縄紋時代晩期のこの地方一帯に編組の技法が定着していたことを窺わせるに十分と言ってよいのではないか。いまその圏外に目を転じると、晩期の藍胎漆器は秋田県北部の日本海側に所在する戸平川遺跡（秋田市）、中山遺跡（五城目町）、青森県の太平洋側に所在する是川遺跡（八戸市）などからも発見されている。いずれも津軽地方からは相当隔たっているわけだが、それぞれの中間地域には有機質遺物が全く検出されない遺跡が存在することも事実である。編組技法の存在を裏付ける遺物を見いだすことができないそのような空白域について、編組技法を知らない、作らない人々だけが住んでいたと理解すべきであろうか。思うべきは有機質素材の腐朽する性質のことである。

土器や石器のように決して腐朽しない遺物とは異なり、有機質素材を用いた加工物は腐朽し消滅することがある。遺物として発見されないことが物質文化の過去の不存在を示ものではないことは当然である。これまで編組技法の一端を窺わせる遺物が検出された遺跡は朱円遺跡や忍路土場遺跡、美沢1遺跡、柏木B遺跡、社台1遺跡（北海道）、三内丸山遺跡や先述の津軽地方の諸遺跡、是川遺跡（青森県）、中山遺跡や戸平川遺跡（秋田県）、山王冨遺跡や根岸遺跡（宮城県）、押出遺跡（山形県）、荒屋敷遺跡（福島県）、真福寺遺跡、後谷遺跡や寿能泥炭層遺跡（埼玉県）、下宅部遺跡や弁天池遺跡、北江古田遺跡（東京都）、桜町遺跡（富山県）、真脇遺跡、米泉遺跡（石川県）、鳥浜遺跡や四方谷富状遺跡（福井県）、滋賀里遺跡、筑摩佃遺跡（滋賀県）、栗谷遺跡、布施第1遺跡、桂見遺跡（鳥取県）、岩田遺跡（山口県）、坂の下遺跡（佐賀県）、曾畑貝塚や椎ノ木崎遺跡（熊本県）、横尾遺跡や竜頭遺跡（大分県）等々を含む相当な数にのぼる。これらのほかに白座遺跡（青森県）、御経塚遺跡、乾遺跡、中屋遺跡、東市瀬遺跡（石川県）などからは、編組技法で製作された製品の圧痕が付された土器が発見されている。以上の諸例にいわゆる網代の圧痕が付けられた土器の出土例を加算したら、編組技法の痕跡をとどめる遺跡の総数がどれほど多数になるか、何びとをもってしても列挙することは不可能であろう。

このことは植物性素材を用いて平面を形成する編組の技法が、大まかに表現して北海道から九州まで、縄紋時代早期から晩期まで広範囲、長期にわたって展開され伝承された事実を反映していると考えるのが合理的な理解といえよう。すなわち編み籠や組み籠の類、櫛その他、編組技法の定着を窺わせる遺物が確認されるその合間合間にそれが発見されない地域があったとしても、それは見かけ上のことに過ぎず、その技法が存在しなかったことを意味するものではない。植物性素材を用

いて籠類その他各種の製品を製作できる編組の技法は日常の生活に欠くことができないものとして縄紋時代を通じて定着していた。それが素材の性質や遺跡の環境条件のために植物性遺物が一部を残して、あるいは全て腐朽してしまったというのが実態に違いない。

縄紋時代は1万年以上も続いたと言われている。植物性素材を用いて平面を形成したり入れ物を作る編組技法が1万年以上もの長きにわたって、しかも極めて広い範囲に展開した背景としてはどのような要因が考えられるのであろうか。

2 編組技法伝承の背景

ア 継続した籠類の必要性

各地の土器型式の推移から窺い知ることができる相当な連続性が示唆するように、巨視的にみると縄紋時代人の日々の営みは途切れることなく草創期から晩期まで継続したとみてよいと思う。彼らは日常の生活を営むうえで衣食住その他にわたる各種の加工物とそれらを製作する知識や技法を必要とし受け継いだ。それは生きていくうえで欠かすことができない営みだったからである。遺跡から発掘される各種の遺物はそんな彼らが必要とした加工物の一端を示しているに過ぎない。

遺物にはある種の石製品のように、ある限られた時期や地域からしか発見されないものがある一方、全国的に草創期から晩期までまんべんなく発見されるものもある。例えば土器や石斧や石鏃は後者の一例であろうし、土器の表面に施される縄紋の存在が裏付ける糸や縄もまたその一例であろう。1万年以上の長きにわたってある種の用品が存在し続けたという事実は、彼らの文化には日常生活に欠かすことができない加工物とその製作技法が長く受け継がれるという側面があったことを物語る。籠類や編組品はその例と思われる。

縄紋時代の植物食研究について先導的役割を果たしてきた渡辺誠によって明らかにされてきたように、全国の各時代の縄紋時代遺跡から植物性食料を利用していた痕跡が発見されている〔渡辺1975〕。特に堅果類を出土する遺跡は草創期から晩期まで、各地に分布している。それぞれの例には穴に貯蔵された状態で発見されたものや住居内から少量あるいは時には何リットルも発見された例もある。堅果類の種類や検出状況、分量などはさまざまだが、縄紋時代人が草創期から晩期まで堅果類を採集し、食用に供したことは疑いようのない事実といってよいだろう。そこで想起してみたいのは彼らの採集や運搬、収納のために用いたであろう入れ物のことである。曾畑貝塚から検出された、貯蔵穴にドングリと共に入っていた「組み籠」類は、そのまま収納用の入れ物を現す一例である。ドングリ貯蔵穴は竜頭遺跡からも発見されており、ここから発見された「編袋」について、報告者が運搬に用いられたものであろうとしているのは合理的な見解である。

縄紋時代人が堅果類を含む自然食料あるいは食料以外の各種の自然物を利用したことを想起すれば、各種物資の採集、運搬、保存などに相応の入れ物が使われていたと考えなければならない。それには北海道の忍路土場遺跡から出土した樹皮製容器〔北海道埋蔵文化財センター 1989 p.60〕のように液体を入れるようなものから、本稿で取り上げた固形物を入れる編み・組み籠まで、対象物に適した素材の選択や製作方法が確立していたと思われる。そんな入れ物を必要とする生活は自然物の採集に依拠した縄紋時代を通じて変わることがなかったから、各種各様の入れ物を製作する技術やそれに付随する諸知識は縄紋時代を通じて受け継がれたと思われる。編組技法はそのような入れ物の製作に不可欠な一技法だったのである。

弥生時代になり水田稲作農耕が本州北部まで行き渡ったのは主として平地でのことだったと推察される。平地でこそ食料に占める米の比率は増したであろうが山地ではそんなわけにはいかなかった。農耕を行う者は山地でも次第に増加した模様だが、その形態は畑作であり、地形上の制約その他から山地の住人たちは農耕と併せて縄紋時代以来の伝統的な方法で山の幸を採集したり捕獲したりせざるを得なかったと思われる。海浜の住人たちも同様の状況から伝統的な各種の漁法を受け継いだのであろう。折々に海の彼方から渡来した新たな文化の影響を受けたものの、衣食住にわたる在来の生活文化が払拭されたわけではなかったから、日常生活を営むうえで必要な各種の文化は基層のところで縄紋時代から連綿として受け継がれ続けたのである。

時代がさらに進み、魚類や鳥獣の捕獲、解体に使う用具の一部が鉄製品に変化し普及した後も、狩猟、漁労、採集の伝統的な営みは、たとえその生活に占める比重が小さくなったとしても受け継がれた。例えばクルミ、クリ、トチの実など堅果類の利用のことを想起してみると、これらを食料に加えることは縄紋時代の初期から現代まで変わることなく受け継がれてきた。クルミの殻の割り方、クリやナラの実の乾燥除殻の方法が縄紋時代から現代まで継続していることについては何度か主張したところである [名久井 1999]。山の幸を採集し、我が家まで運び、保存上の処理を施して収納するまでの各種の入れ物を必要とするという状況は、少なくとも縄紋時代の初期以来変わることなく現代まで継続したのである。

そのような自然物を採集し利用するという日常的な「必要性」は採集行動ばかりではなく、狩猟にも漁労にも言えることであった。狩猟、漁労、採集に関わる文化が幾百世代にもわたって途絶えることがなく継続したことにより、それらの文化の中には変容を遂げながらもついには近現代まで受け継がれて民俗例の中に命脈を保つことになったものがあつたのである。編組技法が受け継がれた背景の一つはそのような「必要性」が途切れなかったことであった。

イ 自然素材利用の継続

旧石器時代人が石器の製作にあたって適材の確保に一種のこだわりをもっていたことは多くの例が示すところである。かれらの適材への関心は石材にとどまらなかったに違いない。有機質素材のことをいうと縄紋時代人は動物性素材のほか、木材、竹、蔓、樹皮、草などの植物性素材を利用して各種の器物を製作した。そのためにかれらが駆使した各種の技法を支えたのは、父祖伝来の適材探索の目で選び抜かれた素材だったと思われる。編組技法で作る平面的製品ないし入れ物に用いる素材は、それぞれの造形目的に適応できる強靱性や柔軟性を備えたものとして、縄紋時代早期から(たぶん旧石器時代から)一貫して植物性素材が利用された。

編組用素材利用の面で一つの変化が起きたであろうと思われるのは水田稲作農耕技術の伝来によってである。すなわちその定着、普及によって藁という新たな素材が登場し身近なものになっていったと想像される。その利用方法には農耕技術とともに大陸からもたらされたものがあつたであろう。水稻栽培の先進地で育まれた藁を用いる物質文化は列島内の植物性素材を用いた伝統的物質文化に大きな影響を与えたことが推察される。しかし自然素材を用いる在来の物質文化は水田稲作農耕が普及した後も引き続いて維持されていたと推察される。

例えば寒中、あるいは積雪時にも使う履き物の用材には保温力に富む藁が最適だが、最高度の強靱性が要求される綱が必要な場合には樹皮が最適である。このように用途に応じて素材を使い分け

るかたちで、自然素材と藁を併用する文化は永く続いたと推察できる。その後近代工業の発展に伴って多くの新素材が出現し普及したが、だからといって伝統的な素材やそれを用いる在来の文化が消滅したわけではなかった。縄紋時代以来受け継がれてきた、自然素材を用いる技術文化と藁を利用する文化とが併行しているところに近代工業の産物である新素材が加わるというかたちで進んだのである。伝統的な文化要素と新時代の要素が併存する例は多いがここでは2つの例を挙げておきたい。

岩手県内でミズナラ、コナラの実のあくを抜くときに使われた「どう」の中にきわめて興味深い例がある。「どう」というのは大きな鍋で実を煮る際に、灰汁や湯を汲み出すときのために最初から鍋の中央に立てておく筒状のものである。あえて隙間を多く作ってあるから、この周囲に入れた実に邪魔されずにこの中から灰汁や湯を汲み出すことができるのである。北上山地で見た「どう」の中には、その一部分をビニール紐で補強しているものがあった。列島内に「どう」が初めて登場した時期は知らないが古老から何うと明治時代に使われていたことは明らかである。これをビニール紐で補強してあることは太平洋戦争後、この地にビニール紐が出回るようになってからもミズナラ、コナラの実のあくを抜いて食べることが行われていたことを示す物証とみてよいわけである。また同様の例で樹皮製の背負い籠に類する「背中当て」にビニール紐が編み込まれている例も見たことがある。

これらは古い形態をとどめるものと新時代の要素が同一個体上に現れた例だが、これらの場合、時代の先端を行く化学的素材は補助的に用いられているに過ぎない。縄紋時代以来の自然素材を利用する文化が近代機械工業が発達する段階にも濃厚に維持されている事実留意したい。

化学的素材が入手し易くなった現在、「ビニールこだし」とでもいうべきものを作る人がいる。梱包用のビニールテープで作る腰籠や背負い籠のことで、素材は入手し易く製品は腐らない。その素材が化学素材であっても「必要」に促されて駆使されるその製作技法は縄紋時代に淵源をもつ父祖伝来の技法にほかならない。

これらのことから窺われるように伝統的な生活様式が必要とする各種の物品の製作には、伝統的要素が非常に根強いかたちで受け継がれてきた。その中で自然素材の物理的特性を活用する技法が縄紋時代から現代まで途絶えることなく受け継がれたことは明確に指摘できるのである。

ところで自然素材を利用するということは、それに備わっている物理的特性を活用するということだったから、縄紋時代人が開発した（ということにしておく）各種の技法は、それぞれの素材が備えている特性の及ぶ範囲内で育まれたものであった。したがって自然素材に伴う制約の中で育まれた加工や利用に関わる諸技法は、縄紋時代人であろうとそれ以降の人々の場合であろうと自然素材を利用し続ける限りそれほど変化しなかったのではないかと思われる。自然素材に備わった物理的特性の利用の仕方が変化し難いことは、木材の場合の建築材や弓、斧の柄、舟や櫂など、自然石の場合の硯や砥石の利用の仕方などを想起してみると理解し易いのではないだろうか。

編組技法が少なくとも縄紋時代の初期から1万年以上にもわたって、それほどの変化がないままに受け継がれた背景としては、変わることなく巡りくる四季とそれに依拠した生活が途切れなかったことが大きい。人々は、食料はもちろんのこと各種の生活必需品を製作する素材の全てを自然界に求めなければならなかったからである。そんな不断の生活が必要とする種々の物品を製作しよう

とするかれらが利用したのは、それぞれの自然素材が備えている物理的特性であった。その営みの中で練りあげられた諸技法は必要にして十分なものであったから、それ以後も踏襲されることになった。その結果として古式の編組技法等が民俗例に伝えられることになったのである。

おわりに

本稿ではまず縄紋時代の編組技法を論じるのに避けて通れない「組む」「編む」の用語について整理を試みた。その内容は本文に述べたとおりだが、私がこの2種類の技法の呼称を取り上げ両者の技法が根本的に相違していることを明確にしたのは、物質文化を扱う研究者間に共通語を必要とするからである。つまり「編む」という用語は同じでも中身に編むも組むも含まれるということでは厄介だからである。技法が異なるものには異なる名称を用いるのが当然とする見地から、「もじり編み」が使い難い名称であることは本文中にふれた。

次いで本稿では縄紋時代の遺物から読み取った「組む」「編む」に属す各種の技法を明らかにし、それぞれに該当する遺物を明示した。さらに底部の製作から取り掛かって口縁部の始末で終える入れ物製作の手順を指摘し、底部や口縁部の形成技法の幾種類かを明らかにした。そのうえでそれらの縄紋時代例にきわめてよく共通する民俗例が存在することを例示し、両者の編組技法が深く関わっていることを論じた。その濃厚な共通性については、編組技法が縄紋時代から近現代まで受け継がれてきたことによると主張したのである。その背景として、まず自然物の採集、運搬、収納、保存などの際に入れ物を作るための不可欠な技法として必要とされ続けたことを挙げた。次いでその製作用の素材として選ばれたのが各種の植物性素材であり、それぞれの物理的特性の制約の中でそれを利用してきたことがかくも永い間、編組技法が受け継がれた背景であると結論づけた。ただし縄紋時代に存在しているが民俗例には見あたらないという技法もあったしその逆もあった。そのような非共通の技法についての理解はまた別な観点からの検討を要するものであろう。

編組技法を取り扱ったいま、優れた実測図の存在には非常に助けられたことを実感している。本稿のように各地の資料と比較を行いたい場合、もし実測図がなく写真あるいはスケッチを見るほか方法がなかったとすれば、そこから読み取ることができる情報には自ずから限界があり、それに基づいて考察することは困難だったに違いない。近世以前の絵画史料がそうであったように外観だけのスケッチや写真では科学的な情報を汲み取るには限界があり、その意味を考えるには「推測」を重ねるほかなかったと思う。得られるかぎりの情報を表現した実測図は作図者の責任において作製された立派な著作物である。その点を明示する意味合いからも、本稿に利用させて戴いた実測図のうち作図者名が判るものはその都度氏名を明らかにすることに努めた。これに対して埋蔵文化財の実測図に作図者氏名を明示していないのは、氏名が判るものがなかったからである。

一定の方式に沿って描かれた情報量の多い実測図の作製にご苦心された作図者の皆様に対しては、学術的価値の甚だ大であることを明記し、心からの敬意と深甚の謝意を捧げたい。また編組技法が窺われる遺物の見学を許して下さった各地の機関と種々ご説明くださった担当の諸氏にも厚くお礼を申し述べる。

参考文献

- 青森県史編さん考古部会（編） 2002 『青森県史 別編 三内丸山遺跡』 青森県
青森県階上町教育委員会（編） 1989 『白座遺跡 野場遺跡（三）発掘調査報告書』
青森県平賀町教育委員会（編） 1979 『石郷遺跡』「平賀町埋蔵文化財報告書」第7集
青森県立郷土館（編） 1984 『亀ヶ岡石器時代遺跡』「青森県立郷土館・考古」第六集
秋田県五城目町教育委員会（編） 1984 『中山 中山遺跡発掘調査報告書』
秋田県埋蔵文化財センター（編） 2000 『戸平川遺跡—東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV—』「秋田県文化財調査報告書」294集
石川県立埋蔵文化財センター 1989 『金沢市米泉遺跡』
伊東信雄 1966 『縄文時代の布』『文化』第30巻第1号 東北大学文学部
大分県教育委員会（編） 1999 『龍頭遺跡』「大分県文化財調査報告書」102輯
大分市教育委員会 2001 『大分市市内遺跡確認調査概報—2001年度—』
大分県別府産業工芸試験所（編） 1991 『竹編組技術資料 基礎技術編』
大分県別府産業工芸試験所（編） 1992 『竹編組技術資料 応用技術編』
桶川市（編） 1990 『後谷遺跡』『桶川市史』第九巻補遺編
尾関清子 1996 『縄文の衣』学生社
金沢市教育委員会（編） 1981 『金沢市中屋遺跡—第1～3次分布調査報告—』「金沢市文化財紀要」28
金沢市教育委員会（編） 1985 『金沢市東市瀬遺跡』「金沢市文化財紀要」50
北江古田遺跡調査会（編） 1987 『北江古田遺跡発掘調査報告書』東京都中野区
喜田貞吉・杉山寿栄男 1932 『日本石器時代植物性遺物図録』喜田貞吉
熊本県教育委員会（編） 1988 『曾畑—熊本県宇土市花園町 曾畑貝塚・低湿地の調査—』「熊本県文化財調査報告」第100集
工藤正 1979 『青森県尾上町八幡崎・李平遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』青森県南津軽郡尾上町教育委員会
湖西線関係遺跡発掘調査団 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書（本文編）』滋賀県教育委員会
五所川原市教育委員会（編） 1983 『幅泉遺跡—試掘調査報告書—』「五所川原市文化財発掘調査報告書」第6集
幸節家蔵 『三十二番職人歌合絵巻』（縮小複製卷子本） 便利堂
埼玉県立博物館（編） 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—』埼玉県教育委員会
佐賀県立博物館（編） 1975 『坂の下遺跡の研究』「佐賀県立博物館調査研究書」第2集
桜町遺跡発掘調査団（編） 2001 『桜町遺跡調査概報』学生社
正倉院事務所（編） 1989 『正倉院宝物 南倉』朝日新聞社
菅江真澄 1982 『蝦夷喧嘩辯（えみしのさえき）』『菅江真澄全集』第二巻 未来社
杉山寿栄男 1942 『日本原始繊維工芸史 土俗編』雄山閣
田島町民具研究会（編） 1981 『奥会津地方の山村生産用具〔Ⅱ〕』
十日町市博物館（編） 1994 『縄文からのメッセージ 図説越後アングイン』十日町市博物館友の会
鳥取市教育委員会（編） 1978 『桂見遺跡発掘調査報告書』「鳥取市文化財報告書」V
鳥取県教育文化財団（編） 1981 『布施遺跡発掘調査報告書』
鳥浜貝塚研究グループ（編） 1979 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』福井県教育委員会
鳥浜貝塚研究グループ（編） 1984 『研究の成果』『鳥浜貝塚 1983年度調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4—』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
鳥浜貝塚研究グループ（編） 1987 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査6—』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
富山県小矢部市・小矢部市教育委員会 1999 『NEWS-WIDE 一富山県小矢部市桜町遺跡—』
長野市立博物館（編） 1984 『ワラと生活』
名久井綾 1990 『粟箆』『いわて文化財』第117号 岩手県文化財愛護協会
名久井文明 1987 『わが国甌の伝統と渡来に関する一予察』「岩手県立博物館研究報告」第5号
名久井文明 1993 『東日本における樹皮利用の文化—加工技術の体系と伝統—』「国立民族学博物館研究報告」第18巻2号
名久井文明 1994 『民俗例から遡源する縄文時代の樹皮製容器に関する試論』『先史考古学論集』第3集
名久井文明 1998 『縄文時代から継続する編組技術—網代組みと縄目編み—』『縄文式生活構造—土俗考古学からのアプローチ—』 同成社
-

-
- 名久井文明 1999 『樹皮の文化史』吉川弘文館
名久井文明・名久井芳枝 2001 『山と生きる』
名久井芳枝 1986 『実測図のすすめ—モノから学術資料へ—』一芦舎
1991 『若者たちと民具』一芦舎
能都町教育委員会真脇遺跡発掘調査団(編) 1986 『石川県能都町 真脇遺跡』
野々市町教育委員会(編) 1983 『野々市町御経塚遺跡』
東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団 2000 『下宅部遺跡 1999年度発掘調査概報』
比良野貞彦 1970 「奥民図彙」『日本庶民生活史料集成』第10巻
文化庁(編) 1996 「籠頭遺跡」『発掘された日本列島'96 新発見考古速報展』朝日新聞社
北海道埋蔵文化財センター(編) 1981 『社台1遺跡他』
北海道埋蔵文化財センター(編) 1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡 第4分冊』「北海道埋蔵文化財センター
調査報告書」第53集
三島町教育委員会(編) 1990 『荒屋敷遺跡Ⅱ』三島町文化財報告10集
三田史学会(編) 1959 『亀ヶ岡遺蹟—青森県亀ヶ岡低湿地遺蹟の研究—』有隣堂出版
村越潔・工藤泰博 1972 「青森県板柳町土井I号遺跡」『考古学ジャーナル』No.75
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館(編) 1996 『第3回特別展 縄文のタイムカプセル 押出遺跡』
山口県平生町教育委員会(編) 1974 『岩田遺跡』
山本直人 1986 「金沢市内縄文時代遺跡出土のカゴ底圧痕」『金沢市新保本町チカモリ遺跡—第4次発掘調査兼土器
編—』金沢市教育委員会ほか
渡辺誠 1975 『縄文時代の植物食』雄山閣
渡辺誠 1981 「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』66-94
渡辺誠 1982 「植物性遺物とその採集用具」『季刊考古学 特集 縄文人は何を食べたか』雄山閣
渡辺誠 1985 「縄文文化の発達とブナ帯」『ブナ帯文化』思索社
渡辺誠 1994 「編み物の容器—籠と筥・箕—」『季刊考古学 特集 先史時代の木工文化』第47号 雄山閣

(物質文化研究所一芦舎, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2003年5月16日受理, 2003年7月18日審査終了)

The Existence of Ancient Folkloric Techniques and Their Significance: the “Amu” and “Kumu” Techniques of Braiding

NAKUI Bunmei

People in the Jomon Period adopted the two different types of techniques called “kumu” and “amu” (roughly translated as forms of “braiding”) for making containers and other articles using fibrous plant materials. However, the details of the techniques represented by the terms “kumu” and “amu” are generally confused. Thus, in line with the author’s belief that the terms “kumu” and “amu” should reflect the differences of two exact methods, this paper first brings to light the differences between the two techniques. I introduce the different “kumu” techniques such as “yotsume-kumi”, “ishidatami-kumi”, “gosame(zarume)-kumi”, “tobigozame-kumi”, “kimegozame-kumi”, “mutsume-kumi” and “ajiro-kumi” that can be observed from relics dating from the Jomon Period, and the “amu” techniques of “nawame-ami” and “neko-ami”. I also present examples of relics made using each of these techniques. I also explain that when making containers using these braiding techniques, the bottom part was invariably made first, followed by the sides, and then the opening. I introduce the different techniques for making the bottom part, such as the “ajiro-soko”, “kiku-soko” and “nawame-ami-soko” techniques and the “tate-shinzai-omoteura-kogo-oricomi”, “nawamekaeshi-heri”, “maki-heri” and “kaeshimaki-heri” techniques for making the openings. I also provide examples of relics corresponding to each of these techniques.

I then proceed to a discussion on how most of these various Jomon Period techniques using plant materials are found to exist in exactly the same form in examples dating from the Early Modern and Modern Periods and I present examples of folk crafts made using the various techniques. The identical elements found in examples of folk crafts and relics dating from the Jomon Period are no coincidence, but are due to the passing down of each of the techniques over several hundred generations. This is underpinned by the needs of the people over the centuries for containers and other equipment for the collection, transportation, storage and preservation of different types of natural products, including foodstuffs, from the Jomon Period through to the present time, which saw the continuation of the use of natural materials as materials used in their fabrication.